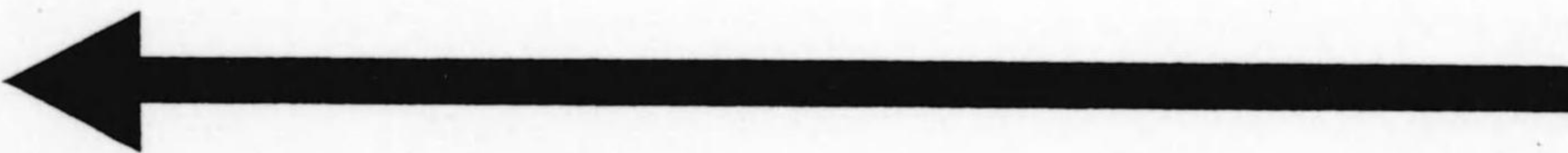




始



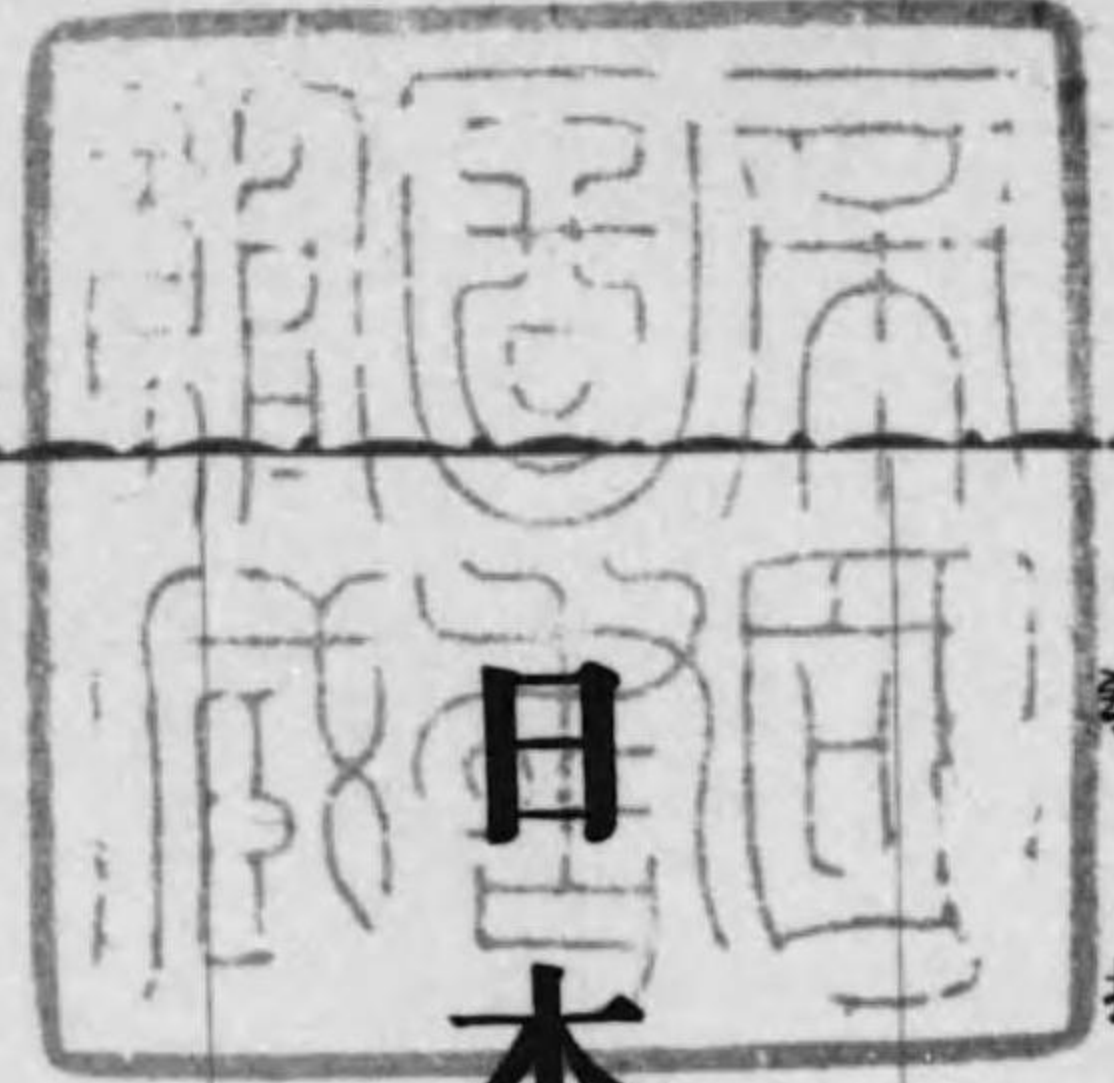


湖本

（理法書院）



特 229  
98



日本大學  
教授

板垣市藏編

【改修版】

日本文學新抄

東京

株式會社

明治書院





## 凡 例 (改修版)

- 一 本書は高等學校専門學校及び同程度の諸學校の國語教科書として編纂したものであります。
- 二 編纂の方針として、日本文學作品中、各時代の代表作品、殊に日本的なるもの、明朗にして剛健の氣風あるものを探り、しかもその作品の全貌を窺ひ得るやうに努力致しました。特に國體觀念竝に健全なる日本國民思想の涵養を念願致しました結果、之に逆行する如き點は些細の個所といへども悉く(中略)として削除致しました。
- 三 頭註は人名地名の簡單なる説明、竝に故事典據を示すに止めました。これは實際教授の際、板書の煩を避けるを得るに便したに過ぎません。他は一切教授者の説明補正に委ねました。



四 編者改修に従事致しました時、急に多忙を極めましたので、不備の點だらけであることを感じます。御使用の際は御不満の多いことゝ存じますが、やがて補訂致したいと存じます。何卒御叱正御示教下さることを御願致して置きます。

昭和十五年十二月

編者

# 日本文學新抄 目次

## 第一篇 上古 大和時代

古事記	二
序文	二
天地初發	六
神世七代	六
國土の修理固成	六
國生みの物語	七
三貴子分治	九
天岩屋戸物語	二
國讓物語	三
天孫降臨	六
神武天皇	九
萬葉集	二九



卷第一	.....	元
卷第二	.....	二
卷第三	.....	三
卷第四	.....	四
卷第五	.....	五
卷第六	.....	六
卷第七	.....	七
卷第八	.....	八
卷第九	.....	九
卷第十四	.....	一四
卷第十六	.....	一六
卷第十八	.....	一八
卷第二十	.....	二〇

第二篇 中古 平安時代

古今和歌集

序	.....	五
---	-------	---

卷第一 春歌 上	.....	六
卷第二 春歌 下	.....	七
卷第三 夏歌	.....	八
卷第四 秋歌 上	.....	九
卷第五 秋歌 下	.....	一〇
卷第六 冬歌	.....	一一
卷第七 賀歌	.....	一二
卷第八 離別歌	.....	一三
卷第九 羈旅歌	.....	一四
卷第十 物名	.....	一五
卷第十一—卷第十五 戀歌	.....	一六
卷第十六 哀傷歌	.....	一七
卷第十七—卷第十八 雜歌	.....	一八
卷第十九 雜體	.....	一九
卷第二十 大歌所御歌	.....	二〇



枕草子

春は曙……………八七

正月一日は……………八八

思はむ子を法師に……………九一

すさまじきもの……………九二

木の花は……………九五

あてなるもの……………九七

蟲は……………九七

頭の辨の……………九八

雪いと高く降りたるを……………一〇〇

物暗うなりて……………一〇〇

左中將のいまだ……………一〇二

第三篇 近古 鎌倉室町時代

平家物語

祇園精舎……………一〇四

鱸王……………一〇五

祇王……………一〇七

鹿谷……………一三〇

教訓状……………一三四

入道死去……………一三一

福原落……………一三四

壇浦合戦……………一三七

女院出家……………一四二

大原入……………一四三

大原御幸……………一四八

六道の沙汰……………一五三

女院御往生……………一五九

謡曲・狂言

高砂……………一六一

隅田川……………一六七

附子……………一七四

目次……………五



第四篇 近古 江戸時代

奥の細道……………二八〇

直 毘 靈……………二〇〇

第五篇 現代 東京時代

現代詩選……………三六

月夜の美感……………二六二

五 重 塔……………二八二

草 枕……………二九六

峠の茶屋……………二九八

詩 境……………三三

第一篇 上古 大和時代







○議安河一高天孫  
降臨以前天照大神  
巢日神以天照大神  
萬神の御會議を開  
かせられた故事  
○論小瀨一建御  
雷神と天鳥船神と  
が大國主神に國土  
獻上の議を申出  
でられた故事をい  
ふ。  
○番仁岐命一天孫  
降臨の史實をい  
ふ。  
○神倭天皇云々一  
神武天皇の御東征  
の故事をいふ。  
○化熊出爪一爪  
は山又は穴の誤な  
らんと。(記傳)  
○覺夢而敬三神  
祇一崇神天皇、大  
物主神の夢の御告  
げを受けさせ給ひ  
し故事をいふ。  
○望烟一仁徳天  
皇の御仁政をい  
ふ。  
○定境開邦一成  
務天皇國郡制定の  
史實をいふ。

削偽定實、欲流後葉。時有舍人、姓稗田、名阿禮、年是廿八、  
爲人聰明、度目誦口、拂耳勸心。即、勅語於阿禮、令誦習  
帝皇日繼及先代舊辭。然、運移世異、未行其事矣。  
伏惟、皇帝陛下、得一光宅、通三亭育。御紫宸而德、被馬蹄之所、  
極、坐玄扈而化照、船頭之所逮。日浮重暉、雲散非烟。連柯并  
穗之瑞、史不絕、列烽重譯之貢。府無空月。可謂名高  
文命、德冠天乙矣。於焉、惜舊辭之誤、正先紀之謬、錯以和  
銅四年九月十八日、詔臣安萬侶、撰錄稗田阿禮所誦之勅語舊辭、  
上者、謹隨詔旨、子細採摭。然、上古之時、言意竝朴、敷文  
構、句、於字卽難、已因訓述者、詞不逮心、全以音連者、事趣  
更長。是以、今、或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓錄。  
卽、辭理、巨見以注明、意況、易解更非注。亦、於姓日下、  
謂玖沙訶、於名帶字謂多羅斯、如此之類、隨本不改。  
自天地開闢、始以訖于小治田御世。故、天御中主神以下、  
日子波限建鸕

○近淡海一成務天  
皇近淡海之志賀之  
高穴穗宮に都し給  
ふ。  
○正姓撰氏一允  
恭天皇神探湯を  
以て氏姓を正し給  
ひし故事をいふ。  
○遠飛鳥一允恭天  
皇大和國遠飛鳥宮  
に都し給ふ。  
○步驟一三皇步  
五帝驟三王馳五伯  
驚。(史記正義)  
○文質一「文質彬  
々然後君子」(論  
語)  
○稽古一「曰若  
稽古帝堯云々」  
(書經)  
○風猷一「夫存樹  
風猷沒著徵烈」  
(文選)  
○飛鳥清原大宮一  
天武天皇大和國飛  
鳥淨御原に都し給  
ふ。  
○潛龍體元一「王  
者體元建極而君  
臣上下各得其位」  
秋元命苞。(春  
秋元命苞)「春  
游雷一游雷震」。

草葺不合命以前、爲上卷、  
爲中卷、大雀皇帝以下、小治田大宮以前、爲下卷、  
謹以獻上。  
臣安萬侶、誠惶誠恐、頓首頓首。  
和銅五年正月二十八日  
正五位上勳五等太朝臣安萬侶。  
神倭伊波禮毘古天皇以下、  
品陀御世以前、  
并錄三卷、  
の名。  
○小治田御世一推  
古天皇、大和國小  
墾田宮に都し給  
ふ。  
○品陀御世一應神  
天皇の御名を譽田  
別尊と申し奉る。  
○大雀皇帝一仁徳  
天皇の御名を大鷲  
尊と申し奉る。

古事記



○天之御中主神—  
宇宙の根元神。  
○高御產巢日神・  
神產巢日神—書紀  
には高皇產靈尊・  
神皇產靈神と見  
え、產靈神である。  
○宇麻志阿斯訶備  
比古遲神—書紀に  
「可美葦牙彥尊」  
と見えてゐる。  
○天之常立神—國  
之常立神に對する  
神。

○國之常立神—書  
紀一書に「國底立  
尊」とも見えてゐ  
る。  
○宇比地遲神・須  
比智遲神—「濕土  
煮尊」(濕土、此云  
于毗尼)、「沙土煮  
尊」(沙土、此云須  
毗尼)亦曰「濕土根  
尊」(沙土根尊)。(書  
紀)  
○角枝神・活枝神  
—「角機尊・活機  
尊」(書紀一書)  
○意富斗能地神・  
大斗乃辨神—「大

〔天地初發〕 天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、阿麻下天云、次高御  
產巢日神、次神產巢日神、此三柱神者、竝獨神成坐而、隱身也。次國稚如浮  
脂、而、久羅下那洲多陀用弊疏之時、疏字以上、如葦牙、因萌騰之物而、成神名、  
宇麻志阿斯訶備比古遲神、以音、次天之常立神、訓常云登許、このふたはしらのかみもひざりがみなりまして  
而、隱身也。  
かみのくだりいづはしらのかみはこごあまつかみ  
上件五柱神者別天神。

〔神世七代〕 次成神名、國之常立神、亦如上次豐雲上野神。此二柱神亦獨神  
成坐而、隱身也。次成神名、宇比地遲神、次妹須比智遲去神。名以音、次  
角枝神、次妹活枝神。柱、次意富斗能地神、次妹大斗乃辨神。亦以音、次淡母陀琉  
神、次妹阿夜上訶志古泥神。此二神名、次伊邪那岐神、次妹伊邪那美神。此二神名亦  
上件自國之常立神以下、伊邪那美神以前、并稱神世七代。十神、各合二神、云「一代」也

〔國土の修理固成〕 於是天神諸命以、詔伊邪那岐命・伊邪那美命二柱神、修

理固成是多陀用幣流之國、賜天沼矛而、言依賜也。故二柱神立、多志天浮橋  
而、指下其沼矛、以畫者、鹽許袁呂許袁呂邇、以音、畫鳴那志、而、引上時、  
自其矛末垂落之鹽、累積成嶋、是淤能基呂嶋、自淤以下、四字以音

戸之道尊・大苦邊  
尊。(亦曰「大戸摩  
彦尊」・大戸摩姫尊、  
亦曰「大富道尊」・大  
富邊尊)。(書紀)  
○於母陀流神・阿  
夜訶志古泥神—  
「面足尊・惶根尊」  
(書紀)  
○伊邪那岐神・伊  
邪那美神—「伊弉  
諾尊・伊弉冉尊」  
(書紀)  
○天沼矛—「天之  
瓊矛」。(書紀)  
○淤能基呂嶋—  
「破取盧島」。(書  
紀) 自淤島の義。

○水蛙子—書紀に  
「雖三已三歳、脚猶  
不立」と見えて  
ゐる。  
○葦船—書紀の一  
書に「生鳥磐櫂樟  
船、輒以此船載、  
輕兒順流放棄」

〔國生みの物語〕 其の島に天降り坐して、天之御柱を御立て、八尋殿を見立てたま  
ひき。於是其の妹伊邪那美命に、(中略)「國土生成さむと以爲ふは奈何」とのりたま  
へば、伊邪那美命「然善けむ」と答曰したまひき。爾に伊邪那岐命(中略)「汝は  
右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむ」と詔りたまひ、約り竟へて廻ります時に  
伊邪那美命先づ、「阿那邇夜志、愛袁登古袁」と言りたまひ、後に伊邪那岐命、「阿  
那邇夜志、愛袁登賣袁」と言りたまひき。各言りたまひ竟へて後に、其の妹に、「女  
人を言先だちて不良」と告りたまひき。然れども(中略) 子水蛙子を産み  
たまひき。此の子は葦船に入れて流し去てつ。次に淡島を生みたまひき。是も子の  
例には入らず。

於是二柱の神議りたまひつらく、「今吾が生める子不良。猶天神の御所に白すべし」



と見えてゐる。  
○淡島―書紀に、  
「對馬島・壹岐島及  
處々小島、皆是潮  
沫凝成者矣。」と見  
えてゐる。

とのりたまひて、即ち共に參上りて、天ツ神の命を請ひたまひき。爾に天ツ神の命以ちて、布斗麻邇に卜相へて詔りたまひつらく、「女を言先だちしに因りて不良。亦還り降りて改め言へ」とのりたまひき。故爾ち反り降りまして、更に其の天之御柱を先の如往き廻りたまひき。於是伊邪那岐命先づ、「阿那邇夜志、愛袁登賣袁」と言りたまひ、後に妹伊邪那美命「阿那邇夜志、愛袁登古袁」と言りたまひき。如此言りたまひ竟へて、御合ひまして、子淡道之穗之狭別島を生みたまひき。次に伊豫之二名島を生みたまひき。此の島は身一つにして、面四つ有り。面毎に名有り。故伊豫國を愛比賣と謂ひ、讚岐國を飯依比古と謂ひ、粟國を大宜都比賣と謂ひ、土左國を建依別と謂ふ。次に隱伎之三子島を生みたまひき。亦の名は天之忍許呂別。次に筑紫島を生みたまひき。此の島も身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。故筑紫國を白日別と謂ひ、豊國を豊日別と謂ひ、肥國を建日向日豊久士比泥別と謂ひ、熊曾國を建日別と謂ふ。次に伊伎島を生みたまひき。亦の名は天比登都柱と謂ふ。次に津島を生みたまひき。亦の名は天之狭手依比賣と謂ふ。次に佐渡島を生みたまひき。次に大倭豊秋津島を生みたまひき。亦の名は天御虚空豊秋津根別と謂ふ。故此

の八島を先づ生みませるに因りて、大八島國と謂ふ。

然て後に還り坐す時に、吉備兒島を生みたまひき。亦の名は建日方別と謂ふ。次に小豆島を生みたまひき。亦の名は大野手比賣と謂ふ。次に大島を生みたまひき。亦の名は大多麻流別と謂ふ。次に女島を生みたまひき。亦の名は天一根と謂ふ。次に知訶島を生みたまひき。亦の名は天之忍男と謂ふ。次に兩兒島を生みたまひき。亦の名は天兩屋と謂ふ。吉備兒島より天兩屋まで併せて六島。

〔三貴子分治〕是を以て伊邪那岐大神詔りたまはく、「吾は伊邪志許米志許米岐穢

○伊邪志許米志許米岐穢國―書紀一書に「不須也凶目汚穢之處」と見え

し」と詔りごちたまひて、初めて中瀬に墮り迦豆伎て、滌ぎたまふ時に成り坐せる神の名は、八十禍津日神、次に大禍津日神。此の二神は其の穢き繁國に到りましし時の、汚垢に因りて成りませる神なり。次に其の禍を直さむと爲て、成りませる神の名は神直毘神、次に大直毘神、次に伊豆能賣〔神〕。次に水底に滌ぎたまふ時に、



○底津綿津見神・中津綿津見神・上津綿津見神—この三神は延喜式神名帳に筑前國糟屋郡志加海神社三座の名が見えてゐる。

○墨江—筑前國筑紫郡住吉町住吉神社三座(官幣小社)・長門國豐浦郡勝山村住吉神社三座(官幣中社)・攝津國大阪市外住吉町住吉神社三座(官幣大社)

○天照大御神—書紀には「大日靈貴」・「天照大日靈尊」と見えてゐる。

○月讀命—書紀に「月弓尊」・「月夜見尊」と見えてゐる。

○建速須佐之男命—書紀に「素戔鳴尊」と見えてゐる。

○母由良通—書紀一書に「瓊瓊杵々

成りませる神の名は底津綿津見神、次に底筒之男命。中に滌ぎたまふ時に成りませる神の名は中津綿津見神、次に中筒之男命。水の上に滌ぎたまふ時に成りませる神の名は上津綿津見神、次に上筒之男命。此の三柱の綿津見神は、阿曇連等が祖神と以ち伊都久神なり。故阿曇連等は、其の綿津見神の子、宇都志日金柝命の子孫なり。其の底筒之男命・中筒之男命・上筒之男命三柱の神は、墨江の三前の大御神なり。於是左の御目を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は天照大御神。次に右の御目を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は月讀命。次に御鼻を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は建速須佐之男命。

右の件八十禍津日神以下、速須佐之男命以前十四柱の神は、御身を滌ぎたまふに因りて生れませる者なり。

此の時伊邪那岐命大歡喜ばして詔りたまはく、「吾は子生み生みて、生の終に三柱の貴の子得たり」とのりたまひて、即ち其の御頸珠の玉の緒母由良邇取り由良邇志て、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、「汝が命は高天原を知らせ」と事依さし賜ひき。故其の御頸珠の名を御倉板舉之神と謂す。次に月讀命に詔りたまはく、「汝が

乎」と書いて「メナトモモユラニ」と訓んでゐる。

命は夜之食國を知らせ」と事依さしたまひき。次に建速須佐之男命に詔りたまはく、「汝が命は海原を知らせ」と事依さしたまひき。

○思金神—書紀に「思兼神」と見えてゐる。  
○天津麻羅—「倭鍛部、天津眞浦」(綴靖紀)・「倭鍛師等祖、天津眞浦」(舊事本紀卷三)・「鐵師開」(法隆寺金堂多聞天光背銘)  
○伊斯許理度賣命—書紀に「石凝姥」と見え、その一書に「故即以石凝姥爲治工」探天香山之金以作日矛又全剝眞名鹿之皮以作天羽輪用此奉造之神、是即紀伊國所坐日前神也。」と見えてゐる。  
○玉祖命—「玉作

〔天岩屋戸物語〕是を以て八百萬神天安之河原に神集ひ集ひて、高御産巢日神の子思金神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて鳴かして、天安河の河上の天堅石を取り、天金山の鐵を取りて、鍛入天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度賣命に科せて鏡を作らしめ、玉祖命に科せて、八尺勾瓏の五百津の御須麻流の珠を作らしめて、天兒屋命・布刀玉命を召びて、天香山の眞男鹿の肩を内抜きに抜き、天香山の天波波迦を取りて、占合へ麻迦那波しめて、天香山の五百津眞賢木を根許士に許して、上枝に八尺勾瓏の五百津の御須麻流の玉を取り著け、中枝に八尺鏡を取り繫け、下枝に白丹寸手・青丹寸手を取り垂でて、此の種種の物は布刀玉命布刀御幣と取り持たして、天兒屋命布刀詔戸言禱ぎ白して、天手力男神戸の掖に隠り立たして、天宇受賣命天香山の天之日影を手次に繫けて、天之眞柝を鬘と爲て、天香山の小竹葉を手草に結ひて、天之石屋戸に汗氣伏せて、踏み登杼呂許し、神懸爲て胸乳を



部遠祖豐玉者造  
 玉。とも玉作遠  
 祖伊弉諾尊兒天明  
 玉所作八坂瓊之  
 曲玉。とも見えて  
 みる。(書紀一書)  
 ○天兒屋命「遺  
 中臣連遠祖興臺產  
 靈兒天兒屋命一而  
 使祈。」(書紀一  
 書)  
 ○布刀玉命「忌  
 部首遠祖太玉命。」  
 (書紀)  
 ○天香山「天上  
 有山、分而墮地。  
 一片爲伊豫國之  
 天山、一片爲大和  
 國之香山。」(大和  
 國風土記)  
 ○白丹寸手・青丹  
 寸手「青和幣・白  
 和幣。」(書紀)  
 ○天宇受賣命「  
 『天鈿女命』(書  
 紀)、『天鈿女命』古  
 幣天乃於須女、其  
 神強悍猛固、故以  
 爲名、今俗強女  
 謂之於須志、此緣  
 也。(古語拾遺)

掛き出で、裳緒を番登に忍し垂れき。爾高天原動りて八百萬神共に咲ひき。  
 於是天照大神怪しと以爲ほして、天石屋戸を細めに開きて、内より告りたまへる  
 は、「吾が隠り坐すに因りて、天原自ら聞く、葦原中國も皆闇からむと以爲ふを、  
 何由以天宇受賣は樂し、亦八百萬神諸咲ふぞ」とのりたまひき。爾ち天宇受賣、  
 「汝が命に益りて貴き神坐すが故に、歡喜び咲樂ぐ」と言しき。如此言す間に、天  
 兒屋命・布刀玉命其の鏡を指し出でて、天照大御神に示せ奉る時に、天照大御神逾  
 奇しと思ほして、稍戸より出でて臨み坐す時に、其の隠り立てる天手力男神、其の  
 御手を取りて引き出しまつりき。即ち布刀玉命尻久米繩を其の御後方に控き度し  
 て、「此より内にな還り入りましそ」と自言しき。故天照大御神出で坐せる時に、高  
 天原も葦原中國も自ら照り明りき。於是八百萬神共に議りて、速須佐之男命に  
 千位置戸を負せ、亦鬚と手足の爪とを切り祓へしめて、神夜良比夜良比岐。

〔國讓物語〕 天照大御神の命以ちて、「豐葦原之千秋長五百秋之水穗國は我が御子正  
 勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らさむ國」と言因さし賜ひて天降したまひき。於是

○尻久米繩「端  
 出之繩。」(書紀)  
 「爰令天手力雄神  
 引啓其扉、遷座  
 新殿。則天兒屋命、  
 太玉命以日御綱  
 (今斯利久迷繩、是  
 日影之像也)廻懸  
 其殿。」(古語拾遺)  
 ○千位置戸「千  
 座置戸。」(書紀)  
 ○正勝吾勝勝速日  
 天忍穗耳命「正  
 哉吾勝々速日天忍  
 穗根尊。」(書紀)  
 ○伊都之尾羽張神  
 「稜威雄走神」  
 (書紀)  
 ○建御雷之男神「  
 時有二天石窟所  
 住神稜威雄走神  
 之子、斐速日神之  
 子、煖速日神、煖速  
 日神之子武斐速  
 神。此神進曰、豈唯  
 經津主神獨爲丈夫  
 夫而吾非丈夫一  
 者哉。其辭氣慷慨、  
 故以即配經津主  
 神。令平葦原中

天忍穗耳命天浮橋に多多志て詔りたまはく、「豐葦原之千秋長五百秋之水穗國は伊多  
 久佐夜藝且有り那理」と告りたまひて、更に還り上らして、天照大神に請したまひ  
 き。爾高御産巢日神・天照大御神の命以ちて、天安河の河原に八百萬神を神集へ  
 に集へて、思金神に思はしめて詔りたまはく、「此の葦原中國は我が御子の知ら  
 さむ國と言依さし賜へる國なり。故此の國に道速振る荒振る國神等の多なると以爲  
 すは、是何れの神を使はしてか言趣けまし」とのりたまひき。(中略) 爾思金神及  
 諸の神白しけらく、「天安河の河上の天石屋に坐す、名は伊都之尾羽張神是遣は  
 すべし。若し亦此の神ならずば、其の神の子建御雷之男神、此遣はすべし。且其の  
 天尾羽張神は天安河の水を逆さまに塞き上げて、道を塞き居れば、他神は得行  
 かじ。故別に天迦久神を遣はして問ふべし」とまをしき。故爾に天迦久神を使はし  
 て、天尾羽張神に問ふ時に「恐し、仕へ奉らむ。然れども此の道には僕が子建御  
 雷神を遣はすべし」と答白して、乃ち貢進りき。爾天鳥船神を建御雷神に副へ  
 て遣はしき。

是を以て此の二柱の神、出雲國の伊那佐の小濱に降り到きて、十掬劍を抜きて浪の



國。(書紀)  
○伊那佐の小濱  
「五十田狹小汀」  
(書紀)。「五十狹々  
之小汀。」(書紀一  
書)

○青柴垣。「我父  
宜當奉避、吾亦  
不可避。因於海  
中造八重着柴  
籬踏船樁而避  
之。」(書紀)

穂に逆さまに刺し立てて、其の劍の前に踏み坐て其の大國主神に問ひたまはく、「天照大御神・高木神の命以ちて問ひに使はせり。汝が宇志波流葦原中國は、我が御子の知らさむ國と言依さし賜へり。故汝が心奈何にぞ」ととひたまふ時に、答へ白さく、「僕は得白さじ。我が子八重言代主神是白すべきを、鳥の遊取魚しに御大之前に往きて、未だ還り來ず」とまをしき。故爾に天鳥船神を遣はして、八重事代主神を徵し來て問ひ賜ふ時に、其の父の大神に、「恐し、此の國は天神の御子に立奉りたまへ」と言ひて、即ち其の船を踏み傾けて、天逆手を青柴垣に打成して隠りましき。

故爾に其の大國主神に問ひたまはく、「今汝が子事代主神如此白しぬ。亦白すべき子有りや」と問ひたまひき。於是亦白しつらく、「亦我が子建御名方神あり。此を除きては無し」如此白したまふ間しも、其の建御名方神千引石を手末に撃げ來て、「誰ぞ、我が國に來て忍び忍び如此物言ふ。然らば力競爲む。故我先づ其の御手を取らむ」と言ふ。故其の御手を取らしむれば、即ち立氷に取り成し、亦劍刃に取成しつ。故爾懼れて退き居り。爾に其の建御名方神の手を取らむと乞ひ歸して取れ

○洲羽海—信濃國諏訪湖。官幣大社の祭神は建御名方神、下諏訪はその妹八坂刀賣命。

ば、若葦を取るが如搯み批ぎて投げ離ちたまへば、即ち逃げ去にき。故追ひ往きて科野國の洲羽海に迫め到りて、殺さむとしたまふ時に、建御名方神白しつらく、「恐し、我を莫殺したまひそ。此の地を除きては他處に行かじ。亦我が父大國主神の命に違はじ。八重事代主神の言に違はじ。此の葦原中國は天神の御子の命の隨に獻らむ」とまをしたまひき。

故更に且還り來て、其の大國主神に問ひたまはく、「汝が子等事代主神・建御名方神二神は、天神の御子の命の隨に違はじと白しぬ。故汝が心奈何にぞ」と問ひたまひき。爾に答白へまつらく、「僕が子等二神の白せる隨に僕も違はじ。此の葦原中國は命の隨に既に獻らむ。唯僕が住所をば、天神の御子の天津日繼知しめさむ、登陀流天之御巢如して、底津石根に宮柱布斗斯理、高天原に氷木多迦斯理て治め賜はば、僕は百足らず八十垵手に隠りて侍ひなむ。亦僕が子等百八十神は、八重事代主神、神の御尾前と爲りて仕へ奉らば、違ふ神はあらじ。如此白して「乃ち隠りましき。故白したまひし隨に」出雲國の多藝志の小濱に天之御舍を造りて、水戸神の孫櫛八玉神を膳夫と爲て、天御饗獻る時に禱ぎ白して、櫛八玉神鵜に化りて、海底



に入りて、底の波邇を咋ひ出でて、天八十毘良迦を作りて、海布の柄を鎌りて燧白に作り、海葦の柄を燧杵に作りて、火を鑽り出でて云しけらく、「是の我が燧れる火は、高天原には神産巢日御祖命の登陀流天之新巢の凝烟の、八拳垂る摩豆燒き擧げ、地の下は底津石根に燒き凝して、栲繩之千尋繩打ち延へ釣らせる海人が、口大之尾翼鱸佐和佐和邇控さ依せ騰げて、拆竹の登遠遠登遠邇天之眞魚咋獻らむ」とまをしき。故建御雷神返り參上りて、葦原中國言向け和平しぬる狀を復奏したまひき。

○天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇藝命「天津彦彦火瓊瓊杵尊」(書紀)

〔天孫降臨〕 爾に天照大御神・高木神の命以ちて、太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に詔りたまはく、「今葦原中國を平け訖へぬと白す。故言依さし賜へりし隨に、降り坐して知し看せ」とのりたまひき。爾に其の太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の答白したまはく、「僕は降りなむ裝束しつる間に、子生れましつ。名は天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇藝命。此の子を降すべし」とまをしたまひき。此の御子は、高木神の女萬幡豐秋津師比賣命に御合ひまして生みませる子天火明命、

尊「天津彦彦火瓊瓊杵尊」(書紀一書)  
○萬幡豐秋津師比賣命「栲繩千々姫」(書紀)

次に日子番能邇藝命二柱にます。是を以て白したまふ隨に、日子番能邇藝命に科詔せて、「此の豐葦原水穗國は汝知らさむ國なりと言依さし賜ふ。故命の隨に天降りますべし」とのりたまひき。

○媛田毘古神「この神は天神之子則當到筑紫日向高千穗穗觸之峯。吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上」と天鈿女命に答へたと見えてゐる。(書紀一書)

爾に日子番能邇藝命天降りまさむとする時に、天之八衢に居て、上は高天原を光し下は葦原中國を光す神是に有り。故爾に天照大御神・高木神の命以ちて、天ノ宇受賣神に詔りたまはく、「汝は手弱女人なれども、伊牟迦布神と面勝つ神なり。故専ら汝往きて問はむは、「吾が御子の天降りまさむと爲る道を誰ぞ如此て居る」と問へ」とのりたまひき。故問はせ賜ふ時に答白へまをさく、「僕は國神、名は媛田毘古神なり。出で居る所以は、天神の御子天降り坐すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとて、參向へ侍らふぞ」とまをしたまひき。

爾に天兒屋命・布刀玉命・天宇受賣命・伊斯許理度賣命・玉祖命、并せて五件緒を支り加へて、天降りまさしめたまひき。於是其の遠岐斯八尺勾瓊・鏡及草那藝劍、亦常世思・金神・手力男神・天石門別神を副へ賜ひて、詔りたまへらくは、「此の鏡は専ら我が御魂と爲て、吾が前を拜くが如伊都岐奉れ。次に思金神は前の事を取



○伊須受能宮—「伊勢國度會郡大神宮三柱」(神名帳)「同殿神坐二柱、坐三方一稱三天手力男神、靈御形弓坐。坐三方一稱三萬幡豐秋津姬命也。是皇孫之母靈、御形劍坐。」(皇太神宮儀式帳)  
 ○登由宇氣神—「豐受神。」(書紀)この神は雄略天皇の御宇、丹波國余佐郡眞井原より今の外宮に遷座し奉る。  
 ○櫛石窓神—「奇石間門神。」(書紀)  
 ○佐那縣—「伊勢國多氣郡佐那神社二座。」(神名帳)  
 ○伊都能知和岐知岐豆—「稜威道別道別而。」(書紀)  
 ○宇岐土摩理蘇理多多斯豆—「立於浮渚在平處。」(書紀)  
 ○竺紫日向高千穗

り持ちて政爲よ」とのりたまひき。此の二柱の神は、佐久久斯侶伊須受能宮に拜き祭る。次に登由宇氣神、此は外宮の度相に坐す神なり。次に天石戸別神、亦の名は櫛石窓神と謂し、亦の名は豊石窓神とも謂す。此の神は御門の神なり。次に手力男ノ神は佐那縣に坐せり。故其の天兒屋ノ命は、中臣連等が祖、布刀玉ノ命は、忌部首等が祖、天ノ宇受賣命は、媛女君等が祖、伊斯許理度賣ノ命は、鏡作連等が祖、玉祖ノ命は、玉祖連等が祖なり。故爾に天津日子番能邇邇藝ノ命、天之石位を離れ、天之八重多那雲を押し分けて、伊都能知和岐知和岐豆、天浮橋に宇岐土摩理蘇理多多斯豆、竺紫日向の高千穗の久士布流多氣に天降り坐しき。故爾に天忍日命・天津久米命二人、天之石鞞を取り負ひ、頭椎之大刀を取り佩き、天之波士弓を取り持ち、天之眞鹿兒矢を手挟み、御前に立たして仕へ奉りき。故其の天忍日ノ命、大伴連等が祖、天津久米ノ命、此は久米直等が祖なり。於是笠沙之御前に眞來通りて詔りたまはく、「此地は韓國に向ひて、朝日の直刺す國、夕日の日照る國なり。故此地を甚吉き地」と詔りたまひて、底津石根に宮柱布斗斯理、高天原に氷椽多迦斯理而坐しき。

の久士布流多氣—「日向襲之高千穗峯」(書紀)・「筑紫日向高千穗觸之峯」(書紀)一書)  
 ○神倭伊波禮毘古命—「神日本磐余彥天皇。」(書紀)  
 ○足一騰宮—「一柱騰宮」(書紀)  
 ○岡田宮—「岡水門」(書紀)筑前國遠賀郡岡縣の地。  
 ○多祁理宮—「埃宮」(書紀)安藝國高宮郡高宮郷の地。(記傳)  
 ○高島宮—備前國兒島郡高島の地。  
 ○速吸門—神名帳によれば豊後國海郡早吸日女神社(今の佐賀關町下浦の早吸神社、俗に珍宮といふ)の近海ならんと。  
 ○倭國造—「以珍彦」爲倭國造」(神武紀)

〔神武天皇〕 神倭伊波禮毘古命其の伊呂兄五瀬命と二柱、高千穗宮に坐しまして議りたまはく、「何れの地に坐さばか、天下の政をば平けく聞し看さむ。猶東のかたにこそ行でまさめ」とのりたまひて、即ち日向より發たして筑紫に幸行でましき。故豊國の宇沙に到りませる時に、其の土人名は宇沙都比古・宇沙都比賣二人、足一騰宮を作りて大御饗獻りき。其地より遷移らして、竺紫の岡田の宮に一年坐しき。亦其の國より上り幸でまして、阿岐國の多祁理宮に七年坐しき。亦其の國より遷り上り幸でまして、吉備の高島宮に八年坐しき。故其の國より上り幸でます時に、龜の甲に乗りて釣爲つつ、打ち羽舉り來る人、速吸門に遇ひき。爾喚び歸せて、「汝は誰ぞ」と問はしければ、「僕は國神(名は宇豆毘古)」と答ひしき。又「汝は海道を知れりや」と問はしければ、「能く知れり」と答ひしき。又「從に仕へ奉らむや」と問はしければ、「仕へ奉らむ」と答ひしき。故爾ち槁機を指し度して、其の御船に引き入れて、即ち槁根津日子と號ふ名を賜ひき。此は倭國ノ造等が祖なり。故其の國より行でます時に、浪速の波を経て、青雲之白肩津に泊てたまひき。此の時登美能那賀須泥毘古軍を興して、待ち向へて戦ひしかば、御船に入れたる楯を取



○浪速の渡―攝津國西生郡邊の浦ならんと。  
 ○青雲之白肩津―「廻し流而上、徑至河内國草香邑青雲白肩之津。」(書紀)  
 ○登美能那賀須泥昆古―登美は鳥見郷(今の和國生駒郡富雄村)で、那賀須泥昆古は長髓彦(書紀)と見えてゐる。  
 ○日下之蓼津―河内國中河内郡日根村大字日下の地名らんと。  
 ○男水門―紀伊國和歌山市附近の小野町・湊町にその名残を見ることが出来る。  
 ○竈山―紀伊國海草郡三田村大字和田、官幣中社竈山神社。  
 ○熊野村―紀伊國牟婁郡の地。

りて下り立ちたまひき。故其地の號を楯津と謂けつるを、今は日下之蓼津となも云ふ。於是登美昆古と戦ひたまふ時に、五瀬命御手に登美昆古が痛矢串を負はしき。故爾に詔りたまはく、「吾は日神の御子にして、日に向ひて戦ふこと良はず。故賤奴が痛手をなも負ひつる。今よりはも行き廻りて、日を背負ひてこそ撃ちてめ」と期りたまひて、南の方より廻り幸でます時に、血沼海に到りて、其の御手の血を洗ひたまひき。故血沼海とは謂ふなり。其地より廻り幸でまして、紀國の男之水門に到りまして詔りたまはく、「賤奴が手を負ひてや死ぎなむ」と男健爲て崩りましぬ。故其の水門を男水門とぞ謂ふ。陵は即て紀國の竈山に在り。

故、神倭伊波禮昆古命其地より廻り幸でまして、熊野村に到でませる時に、大なる熊髻髻に出で入りて即ち失せぬ。爾に神倭伊波禮昆古命倏急に遠延まし、及御軍も皆遠延て伏しき。此の時に熊野の高倉下一横刀を齎ちて、天ツ神の御子の伏せる地に到て獻る時に、天ツ神の御子即ち寤起めまして、「長寢しつるかも」と詔りたまひき。故其の横刀を受け取りたまふ時に、其の熊野山の荒ふる神自ら皆切り仆さえて、爾ち其の惑え伏せる御軍悉に寤起めたりき。故天ツ神の御子其の横刀を獲つる所由を問

○石上神宮―大和國山邊郡丹波市町大字布留、官幣大社石上神社。

ひたまへば、高倉下 答曰さく、「己夢に、天照大神・高木ノ神二柱の神の命以ちて、建御雷神を召して詔りたまはく、「葦原ノ中國は伊多玖佐夜藝帝阿理那理。我が御子等不平み坐す良志。其の葦原ノ中國は専ら汝が言向けつる國故、汝建御雷神降りてよ」とのりたまひき。爾に 答曰さく、「僕降らずとも、専ら其の國平けし横刀有れば降してむ。此の刀の名は佐士布都ノ神と云ふ。亦の名は斐布都ノ神と云ふ。亦の名は布都御魂。此の刀は石上神宮に坐す。此の刀を降さむ状は、高倉下が倉の頂を穿ちて、其より墮し入れむ」とまをしたまひき。「故建御雷神教へたまはく、「汝が倉の頂を穿ちて、此の刀を墮し入れむ。」故阿佐米余玖汝取り持ちて、天ツ神の御子に獻れ」とをしへたまひき。故夢の教の如に、且己が倉を見しかば、信に横刀有りき。故是の横刀は獻るにこそ」とまをしき。

於是亦高木ノ大神の命以て、覺し白したまはく、「天ツ神の御子、此より奥方に莫入幸りましそ。荒ふる神甚多かり。今天より八咫鳥を遣せむ。故其の八咫鳥道引きてむ。其の立たむ後より幸行でますべし」とさとしまをしたまひき。故其の教覺の隨に、其の八咫鳥の後より幸行でまししかば、吉野河の河尻に到りましし時に、筌を



○贊持の子「菟  
菟擔之子」(書紀)  
又菟菟は「裏魚  
肉」也。(和名抄)  
と見えてゐる。

○國巢「昔在國  
巢。俗語曰都知久  
母。又曰夜都賀波  
岐。山之佐伯。野之  
佐伯。普置。掘土  
窟。常居穴。有  
人來則入窟而竄  
之。(常陸風土記)  
○宇陀之穿「大和  
國宇陀郡宇賀志  
村。  
○訶夫羅前「この  
地未詳。

作ちて魚取る人有りき。爾に天ツ神の御子、「汝は誰ぞ」と問はしければ、「僕は國ツ神、名は贊持の子」と答白しき。此は阿陀の輪養之祖なり。其地より幸行でませば、尾生る人井より出で來。其の井光れり。爾ち「汝は誰ぞ」と問はせば、「僕は國ツ神、名は井氷鹿」と答曰しき。此は吉野首等が祖なり。即て其の山に入りまししかば、亦尾生る人遇へり。此の人巖を押し分けて出で來。爾ち「汝は誰ぞ」と問はせば、「僕は國ツ神、名は石押分の子、今天ツ神の御子幸行でますと聞ける故に、參向へまつるにこそ」と答曰しき。此は吉野の國巢の祖なり。其地より蹈み穿ち越えて、宇陀に幸でましき。故宇陀之穿とぞいふ。

故爾に宇陀に、兄宇迦斯・弟宇迦斯と二人有りけり。故先づ八咫鳥を遣はして、二人に、「今天ツ神の御子幸行でませり。汝等仕へ奉らむや」と問はしめたまひき。於是兄宇迦斯、鳴鏑を以ちて其の使を待ち射返しき。故其の鳴鏑の落ちたりし地を訶夫羅前と謂ふ。待ち撃たむと云ひて、軍を聚めしかども、得聚めざりしかば、仕へ奉らむと欺陽りて大殿を作り、其の殿内に押機を作りて待ちける時に、弟宇迦斯先づ參向へて、拜みて曰さく、「僕が兄兄宇迦斯、天ツ神の御子の使を射返し、待ち攻

○大伴連「大伴宿禰、高皇產靈尊五世孫天押日命之後也。初天孫彦火瓊瓊杵尊神駕之降也。天押日命、大來目部立ニ於御前、降ニ于日向高千穂峯。(中略)大伴連、道臣命十世孫佐豆彦後也。(姓氏錄左京神別)

めむと爲て、軍を聚むれども得聚めざれば、殿を作り其の内に押機を張りて待ち取らむとす。故參向へて顯し白す」とまをしき。爾に大伴連等が祖道臣命、久米直等が祖大久米命二人、兄宇迦斯を召して罵詈りて云ひけらく、「伊賀作り仕へ奉れる大殿内には、意禮先づ入りて、其の仕へ奉らむと爲る狀を明しまをせ」といひて、即ち横刀の手上握り、矛由氣矢刺して追ひ入るる時に、乃ち己が作りおける押に打たえて死にき。即ち控き出して斬り散りき。故其地を宇陀之血原と名も謂ふ。然して其の弟宇迦斯が獻れる大饗をば、悉に御軍どもに賜ひき。此の時に歌曰したまはく、

宇陀の高城に 鳴罌張る 我待つや 鳴は障らず いすくはし くらら障る  
前妻が 魚乞はさば たちそばの 實の無けくを こきしひゑね 後妻が 魚  
乞はさば いちさかさき 實の多けくを こきだひゑね ええしやこしや 此は伊  
碁能布ぞ ああしやこしや 此は嘲喚ふぞ。

故其の弟宇迦斯、此は宇陀の水取等が祖なり。

其地より幸行でまして、忍坂の入室に到りませる時に、尾生る土雲八十建其の室

○水取「給ニ弟猪  
猛田邑。因爲ニ猛田  
縣主。是苑田主水



部遠祖也。(書紀)  
 ○忍坂—大和國磯城郡忍坂村。  
 ○土雲—土蜘蛛(書紀)高尾張邑有土蜘蛛。其爲人也、身短而手足長。與侏儒相類。(書紀)

に在りて、待ち伊那流。故爾に天神の御子の命以ちて、八十建に饗を賜ひき。於是八十建に宛てて、八十膳夫を設けて、人毎に刀佩けて、其の膳夫等に、「歌を聞かば一時共に斬れ」と誨へたまひき。故其の土雲を打たむとすることを明かせる歌、忍坂の 大室屋に 人さには 來入り居り 人さには 入り居りとも みつみつし 久米の子が 頭椎い 石椎いもち 擊ちてしやまむ みつみつし 久米の子等が 頭椎い 石椎いもち 今擊たば善らし

如此歌ひて、刀を抜きて一時に打ち殺しつ。

然後登美毘古を撃ちたまはむとせし時の歌曰、

みつみつし 久米の子等が 粟生には 藁一莖 其根が莖 其根芽つなぎて 擊ちてしやまむ

又歌曰、

みつみつし 久米の子等が 垣下に 植ゑし藪 口ひびく 吾は忘れじ うちてしやまむ

又歌曰、

神風の 伊勢の海の 大石に はひもとほろふ 細螺の い這ひもとほり うちてしやまむ

○伊那佐の山—大和國宇陀郡伊那佐村。

○邇藝速日命—「饒速日命」(書紀)

○宇摩志麻遲命—「可美眞手命」(書紀)

○畝火の白檮原宮—「辛酉年春正月庚辰朔、天皇即位帝位於橿原宮。是歲爲天皇元年。」(書紀)

○阿多の小椅君—「火闌降命即吾田君小橋等之本祖也」(書紀)  
 ○阿比良比賣—「吾田邑吾平津

又兄師木・弟師木を撃ちたまへる時に、御軍暫しは疲れたりき。爾の歌曰、

楯並めて 伊那佐の山の 木の間よも い行きまもらひ 戦へば 吾はや飢ぬ 島津鳥 鶺鴒がとも 今助けに來ぬ

故爾に邇藝速日命參赴て、天神の御子に白さく、「天神の御子天降り坐しぬと聞きつる故に、追ひて參降り來つ」とまをして、即ち天津瑞を獻りて、仕へ奉りき。故

邇藝速日命、登美毘古が妹登美夜毘賣に娶ひて生める子宇摩志麻遲命。此は物部連・穗積臣・嫁臣の祖なり。故此の如荒夫琉神等を言向け平和し、不伏人等を退ひ撥げたまひて、畝火の白檮原宮に坐しまして天下治しめき。

故日向に坐しましし時、阿多の小椅君の妹、名は阿比良比賣を娶して生みませる子多藝志美美命、次に岐須美美命二柱坐せり。然れども更に大后と爲む美人を求めきたまふ時に、大久米命の曰さく、「此間に神の御子なりと謂す媛女有り。其を神の御子なりと謂す所以は、三島渚咋の女、名は勢夜陀多良比賣、其容姿麗美かりけ



媛。(書紀)・吾田・吾平は地名で、薩摩同給其郡・大隅國肝屬郡給其村などに関係があらう。

○多藝志美美命―「手研耳命。」(書紀)

○三島湊咋―攝津國三島郡三島村の東南溝咋村溝咋神社。

○美和の大物主神―大和國磯城郡三輪町大神神社の祭神。

○比賣多多良伊須氣余理比賣―「有氣余理比賣」有氣人奏曰、事代主神共三島溝咋耳神之女王櫛媛一所生兒、號曰媛踏輪五十鈴媛命。是國色之秀者、天皇悅之。(書紀)

○高佐士野―大和國香久山村大字南浦香村の天指山の麓の野かといふ。

れば、美和の大物主神見感でて、(中略)其の美人に娶ひて生みませる子、名は(中略)比賣多多良伊須氣余理比賣と謂す。(中略)故是を以て神の御子とは謂すなり」とまをしき。

於是七媛女高佐士野に遊行べるに、伊須氣余理比賣其の中に在りき。爾ち大久米、命其の伊須氣余理比賣を見て、歌以て天皇に白しけらく、

倭の高佐士野を 七行く 媛女ども 誰をし纏かむ

爾に伊須氣余理比賣は、其の媛女等の前に立てりき。乃ち天皇其の媛女等を見はして、御心に伊須氣余理比賣の最前に立てることを知りたまひて、歌以て答へたまはく、

かつがつも いや前立てる 愛をし纏かむ

爾に大久米命、天皇の命を其の伊須氣余理比賣に詔れる時に、其の大久米命の黥る利目を見て、奇しと思ひて、

あめつつ ちどりましとと などをさける利目

歌ひければ、大久米命、

をとめに 直に逢はむと わがさける利目

と歌ひてぞ答へける。故其の嬢子「仕へ奉らむ」と白しき。

於是其の伊須氣余理比賣命の家、狹井河の上に在りき。天皇其の伊須氣余理比賣之許幸行でまして、(中略)阿禮坐せる御子の名は日子八井命、次に神八井耳命、次に神沼河耳命。三柱。

故天皇崩りまして後に、其の庶兄當藝志美美命、(中略)其の三はしらの弟たちを

殺せむとして、謀つ間に、其の御祖伊須氣余理比賣患苦ひまして、歌以て其の御子等に知らしめたまへりし、その歌曰、

狹井川よ 雲立ちわたり 畝火山 木の葉騒ぎぬ 風吹かむとす

又歌曰、

畝火山 晝は雲と居 夕されば 風吹かむとぞ 木の葉さやげる

於是其の御子たち聞き知りまして、驚きて乃ち當藝志美美を殺せむと爲たまふ時に、神沼河耳命其の兄神八井耳命に曰したまはく「那泥汝命 兵を持ちて入りて、當藝志美美を殺せたまへ」とまをしたまひき。故兵を持ちて入りて、殺せむとした

○狹井河―大和國三輪山に發し卷向川に注ぐ川。

○日子八井命―書紀に見えず、舊事紀には神八井耳命の子となつてゐる。



まふ時に、手足和那那岐且得殺せたまはざりき。故爾に其の弟神沼河耳命、其の兄の持たせる兵を乞ひ取りて入りて、當藝志美美を殺せたまひき。故亦其の御名を稱へて建沼河耳命とも謂しき。爾に神八井耳命、弟建沼河耳命に譲りて曰したまはく、「吾は仇を得殺せず。汝命既に仇を得殺せたまひぬ。故吾は兄なれども、上と爲るべからず。是を以て汝命上と爲して天下治しめせ。僕は汝命を扶けて、忌人と爲りて仕へ奉らむ」とまをしたまひき。

故其の日子八井命は、美田連・手鳥連之祖。神八井耳命は、意富臣・小子部連・坂合部連・火君・大分君・阿蘇君・筑紫三家連・雀部臣・雀部造・小長谷造・都祁直・伊余國造・科野國造・道奥石城國造・常道仲國造・長狹國造・伊勢船木直・尾張丹羽臣・鳥田臣等が祖なり。神沼河耳命は天下治しめしき。凡て此の神倭伊波禮毘古天皇御年壹佰參拾漆歲。御陵は畝火山の北の方の白檮尾上に在り。  
○白檮尾上「畝傍山東北陵。」(書紀)

# 萬葉集

## 卷第一

### 雜歌

泊瀨朝倉宮御宇天皇代 オホハツセチカケノ 太泊瀨稚武天皇

天皇御製歌  
 籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此岳爾 榮採須兒 家吉閑 名告  
 沙根 虛見津 山跡乃國者 押奈戶手 吾許曾居 師吉名倍手 吾己曾座 我許  
 背齒告目 家乎毛名雄母

高市岡本宮御宇天皇代 タケチヲカモトノ 息長足日廣額天皇

天皇登三香具山望國之時御製歌  
 山常庭 村山有等 取與呂布 天乃香具山 騰立 國見乎爲者 國原波 煙立龍

○高市岡本宮—大和國高市郡飛鳥村字雷の東方にあつたといはれる。  
 ○息長足日廣額天皇—舒明天皇。  
 ○香具山—大和國磯城郡香久山村。

○泊瀨朝倉宮—大和國磯城郡朝倉村大字黒崎附近であつたといはれてゐる。  
 ○太泊瀨稚武天皇—雄略天皇。



第一篇 上古 大和時代

海原うなはら海 加萬目立多都かまめたちたつ 何怜國會うましくにぞ 蜻島あきつしま 八間跡能國者やまさのくには

後岡本宮御宇天皇代 天豐財重日足姬天皇後即位後岡本宮

額田王歌

熟田津爾にきたづに 船乘世武登ふなのりせむせ 月待者つきまては 潮毛可奈比沼しほもかなひわ 今者許藝乞榮いまはこぎいでな

右檢山上憶良大夫類聚歌林曰、飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑、九年丁酉十二月己巳朔壬午、天皇太后幸于伊豫湯宮。後岡本宮御宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅、御船西征始就于海路。庚戌、御船泊于伊豫熟田津石湯行宮。天皇御覽昔日猶存之物、當時忽起感愛之情。所以因製歌詠爲之哀傷也。即此歌者天皇御製焉。但額田王歌者別有四首。

近江大津宮御宇天皇代 天命開別天皇

味酒うまさけ 三輪乃山みわのやま 青丹吉あをによし 奈良能山乃ならのやまの 山際やまのまに 伊隱萬代いかくろまで 道隈みちのくま 伊積流萬代爾いづもるでに

○近江大津宮—近江國志賀郡大津附近にあつたといふ。  
○天命開別天皇—天智天皇。

委曲毛つはらにも 見管行武雄みつつかひを 數數毛しばしばも 見放武八萬雄みさげむやまを 情無こゝろなく 雲乃くももの 隱障倍之也かくさふべしや

反歌

三輪山乎みわやまを 然毛隱賀しかもかくすか 雲谷裳くもたにら 情有南畝こゝろあんなむ 可苦佐布倍思哉かくさふべしや  
右二首歌山上憶良大夫類聚歌林曰、遷都近江國時、御覽三輪山御歌焉。日本書紀曰、六年丙寅春三月辛酉朔己卯遷都于近江。

明日香清御原宮御宇天皇代 天淳中原瀧真人天皇

淑人乃よきひとの 良跡吉見而よしとよきみ 好常言師よしとよひし 芳野吉見與よしぬよきみ 良人四來三よきひとよきみ  
紀曰、八年己卯五月庚辰朔甲申、幸于吉野宮。

藤原宮御宇天皇代 高天原廣野姬天皇

天皇御製歌

萬葉集



春過而 夏來良之 白妙能 衣乾有 天之香來山

た、持統・文武兩帝の皇居。○高天原廣野姫天皇―持統天皇。

過近江荒都二時柿本朝臣人麿作歌

玉手次 畝火之山乃 榎原乃 日知之御世從 阿禮座師 神之盡 樛木乃  
彌繼嗣爾 天下 所知食之乎 食來 天爾滿 倭乎置而 青丹吉 平山乎越 倭乎置青  
丹吉平 何方 御念食可計米可 天離 夷者雖有 石走 淡海國乃 樂浪乃 大  
津宮爾 天下 所知食兼 天皇之 神之御言能 大宮者 此間等雖聞 大殿者  
此間等雖云 春草之 茂生有 霞立 春日之霧流 流夏草香繁成奴留 百磯城之 大宮  
處 見者悲毛左夫思母

反歌

樂浪之 思賀乃辛崎 雖幸有 大宮人之 船麻知兼津  
左散難彌乃 志我能良乃 大和太 與杼六友 昔人二 亦母相目八毛跡母戸八

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌

○辛崎―近江國滋賀郡唐崎。○志我能大和太―今の琵琶湖をいふ。  
○吉野宮―大和國吉野郡中莊村宮瀧

の地、應神天皇より聖武天皇の御代まで離宮があつたといふ。

八隅知之 吾大王之 所聞食 天下爾 國者思毛 澤二雖有 山川之 清河内跡  
御心乎 吉野乃國之 花散相 秋津乃野邊爾 宮柱 太敷座波 百磯城乃 大宮  
人者 船竝氏 旦川波 舟競 夕河渡 此川乃 絕事奈久 此山乃 彌高良之  
珠水激 瀧之宮子波 見禮跡不飽可聞

反歌

雖見飽奴 吉野乃河之 常滑乃 絕事無久 復還見牟

輕皇子宿于安騎野二時柿本朝臣人麿作歌

八隅知之 吾大王 高照 日之皇子 神長柄 神佐備世須登 太敷爲 京乎置而  
隱口乃 泊瀬山者 真木立 荒山道乎 石根 禁樹押靡 坂鳥乃 朝越座而 玉  
限 夕去來者 三雪落 阿騎乃大野爾 旗須爲寸 四能乎押靡 草枕 多日夜取  
世須 古昔念而

短歌

阿騎乃野爾 宿旅人 打靡 寐毛宿良目八方 古部念爾



真草薙 荒野者雖有 葉 過去君之 形見跡曾來師

東 野 炎 立所見而 反見爲者 月西渡

日雙斯 皇子命乃 馬副而 御獵立師斯 時者來向

○日雙斯皇子—天武天皇の皇太子草壁皇子、持統天皇三年薨去、御齡二十八。

卷 第二

相 聞

難波高津宮御宇天皇代 大鷦鷯天皇

磐姫皇后思天皇御作歌四首

君之行 氣長成奴 山多都禰 迎加將行 待爾可將待

右一首歌山上憶良臣類聚歌林載焉。

如此許 戀乍不有者 高山之 磐根四卷手 死奈麻死物乎

在管裳 君乎者將待 打靡 吾黑髮爾 霜乃置萬代日

秋之田 穗上爾霧相 朝霞 何時邊乃方二 我戀將息

○難波高津宮—今の大阪城の南方附近であつたといはれてゐる。  
○大鷦鷯天皇—仁徳天皇。  
○磐姫皇后—仁徳天皇の皇后、葛城襲津彦の御女、履仲・反正・允恭三天皇の御母。

近江大津宮御宇天皇代 天命開別天皇

内大臣藤原卿娶ニ 采女安見兒一 時作歌一首

吾者毛也 安見兒得有 皆人乃 得難爾爲云 安見兒衣多利

柿本朝臣人麿從三石見國一別妻上來時歌

石見乃海 角乃浦回乎 浦無等 人社見良目 瀧無等無登 人社見良目 能喚八

師 浦者無友 縱畫屋師 瀧者磯者 無鞞 鯨魚取 海邊乎指而 和多豆乃 荒

磯乃上爾 香青生 玉藩息津藻 朝羽振 風社依米 夕羽振流 浪社來緣 浪之

共 彼緣此依 玉藻成 依宿之妹乎 思妹之手本乎 露霜乃 置而之來者 此道乃 八

十隈每 萬段 顧爲騰 彌遠爾 里者放奴 益高爾 山毛越來奴 夏草之 念之

奈要而 志怒布良武 妹之門將見 靡此山

反 歌

石見乃也 高角山之 木際從 我振袖乎 妹見都良武香

○角乃浦—石見國那賀郡都濃村都農津附近の海岸。  
○和多豆—渡津、都濃の東にある小村。

○高角山—今の島



星山ならんといはる。

第一篇 上古 大和時代  
小竹之葉者 三山毛清爾 亂友 吾者妹思 別來禮婆

挽歌

近江大津宮御宇天皇代 天命開別天皇

天皇聖躬不豫之時、太后奉御歌一首

天原 振放見者 大王乃 御壽者長久 天足有

天皇崩御之時、倭太后御作歌一首

人者縱 念息登母 玉獲 影爾所見乍 不所忘鴨

天皇崩時、婦人作歌一首 姓氏未詳

空蟬師 神爾不勝者 離居而 朝嘆君 放居而 吾戀君 玉有者 手爾卷持而

衣有者 脫時毛無 吾戀 君曾伎賊乃夜 夢所見鶴

藤原宮御宇天皇代 高天原廣野姬天皇

日並皇子尊殞宮之時柿本人麿作歌一首并短歌

天地之 初時之 久堅之 天河原爾 八百萬 千萬神之 神集 集座而 神分  
分之時爾 天照 日女之命 日女之命 天乎波 所知食登 葦原乃 水穗之國乎 天  
地之 依相之極 所知行 神之命等 天雲之 八重搔別而 八重雲別而 神下 座  
奉之 高照 日之皇子波 飛鳥之 淨之宮爾 神隨 太布座而 天皇之 敷座國  
等 天原 石門乎開 神上 上座 奴余之可婆 吾王 皇子之命乃 天下 所  
知食世者 春花之 貴在等 望月乃 滿波之計武跡 天下 食國 四方之人乃 大  
船之 思憑而 天水 仰而待爾 何方爾 御念食可 由緣母無 真弓乃崗爾 宮  
柱 太布座 御在香乎 高知座而 明言爾 御言不御問 日月之 數多成塗 其  
故 皇子之宮人 行方不知毛人 歸邊不知爾寫

○日並皇子—天武天皇皇太子草壁皇子。

○真弓乃崗—大和國高市郡越智村大字真弓佐田附近の丘陵。皇子の御墓は佐田の地にある。



反歌 二首

久堅乃 天見如久 仰見之 皇子乃御門之 荒卷惜毛  
 茜刺 日者雖照有 烏玉之 夜渡月之 隱良久惜毛  
 或本云、以三件歌爲後  
 皇子尊殯宮之時歌反也。

柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌并短歌

天飛也 輕路者 吾妹兒之 里爾思有者 勲 欲見騰 不止行者 人目乎多見  
 眞根久往者 人應知見 狹根葛 後毛將相等 大船之 思憑而 玉蜻 磐垣淵之  
 隱耳 戀管在爾 度日乃 晚去之如 照月乃 雲隱如 奧津藻之 名延之妹者  
 黃葉乃 過伊去等 玉梓之 使乃言者 梓弓 聲爾聞而耳聞而 將言爲便 世武爲  
 便不知爾 聲耳乎 聞而有不得者 吾戀 千重之一隔毛 遣悶流 情毛有八等  
 吾妹子之 不止出見之 輕市爾 吾立聞者 玉手次 畝火乃山爾 喧鳥之 音母  
 不知聞 玉梓 道行人毛 獨谷 似之不去者 爲便乎無見 妹之名喚而 袖曾振  
 鶴聞而有不得者一句

○輕路—大和國高市郡白樺村大字大

○鴨山—位置未詳但、三説あり。(那賀郡神村の山・美濃郡高津村の港口にあつた鴨島・那賀郡濱田町の龜山)

○天皇—持統天皇。○雷岳—飛鳥の神奈備山の異稱、大和國高市郡飛鳥村字雷の地。○忍壁皇子—天武天皇子、慶雲二年薨去。

短歌 二首

秋山之 黃葉乎茂 迷流 妹乎將求 山道不知母不知而  
 黃葉之 落去奈倍爾 玉梓之 使乎見者 相日所念

柿本朝臣人麿在石見國臨死時自傷作歌一首

鴨山之 磐根之卷有 吾乎鴨 不知等妹之 待乍將有

卷 第三

雜歌

天皇御遊雷岳之時柿本朝臣人麿作歌一首  
 皇者 神二四座者 天雲之 雷之上爾 廬爲流鴨  
 右、或本云、獻忍壁皇子也、其歌曰、王 神座者 雲隱、伊加土山爾、宮敷座。

天皇賜志變軀御歌一首



第一篇 上古 大和時代

○天皇—持統天皇  
○志斐姬—傳未詳。

○天皇—持統天皇  
○志斐姬—傳未詳。

不聽雖謂 話禮話禮常 詔許會 志斐伊波奏 強語登言

柿本朝臣人鷹從近江國上來時至宇治河邊作歌一首

物乃部能 八十氏河乃 阿白木爾 不知代經浪乃 去邊白不母

長忌寸奧麻呂歌一首

苦毛 零來雨可 神之埼 狹野乃渡爾 家裳不有國

柿本朝臣人麻呂歌一首

淡海乃海 夕浪千鳥 汝鳴者 情毛思努爾 古所念

○長忌寸奧麻呂—長忌意吉磨とも見えてゐる。傳未詳。  
○神之埼—紀伊國東牟婁郡三輪崎町。  
○狹野—三輪崎町大字佐野。

山部宿禰赤人望不盡山歌一首并短歌

天地之 分時從 神左備手 高貴寸 駿河有 布士能高嶺乎 天原 振放見者  
度日之 陰毛隱比 照月乃 光毛不見 白雲母 伊去波伐加利 時自久會 雪者  
落家留 語告 言繼將往 不盡能高嶺者

反歌

田兒之浦從 打出而見者 眞白衣 不盡能高嶺爾 雪波零家留

○田兒之浦—駿河國庵原郡蒲原町の東方海岸。  
○小野老—天平九年歿。

太宰少貳小野老朝臣歌一首

青丹吉 寧樂乃京師者 咲花乃 薰如 今盛有

山上臣憶良寔宴歌一首

憶良等者 今者將罷 子將哭 其彼母毛 吾乎將待會

太宰帥大伴卿讚酒歌十三首(中八首)



第一篇 上古 大和時代

驗無 物乎不念者 一坏乃 濁酒乎 可飲有良師  
 古之 七賢 人等毛 欲爲物者 酒西有良師  
 賢跡 物言從者 酒飲而 醉哭爲師 益有良之  
 中々二 人跡不有者 酒壺二 成而師鴨 酒二染嘗  
 痛醜 賢良乎爲跡 酒不飲 人乎焚見者 猿二鴨似  
 價無 寶跡言十方 一坏乃 濁酒爾 豈益目八  
 今代爾之 樂有者 來生者 蟲爾鳥爾毛 吾羽成奈武  
 生者 遂毛死 物爾有者 今生在問者 樂乎有名

○太宰帥大伴卿—  
 大伴宿禰族人、安  
 磨の長男、神龜年  
 間太宰帥、天平二  
 年大納言、翌三年  
 七月歿、年六十七。  
 ○古之七賢人—竹  
 林の七賢。(晉書列  
 傳)

○沙彌滿誓—俗名  
 笠朝臣麻呂。養老  
 五年出家、同七年  
 勅を蒙り筑紫觀世  
 音寺建立。歿年未  
 詳。

○勝鹿眞間—下總

挽歌

過勝鹿眞間娘子墓時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

沙彌滿誓歌一首  
 世間乎 何物爾將誓 且開 擲去師船之 跡無如

國東葛飾郡。今市  
川市眞間。

古昔 有家武人之 倭文幡乃 帶解替而 廬屋立 妻問爲家武 勝壯鹿乃 眞間  
 之手兒名之 奧柳乎 此間登波聞杵 眞木葉哉 茂有良武 松之根也 遠久寸  
 言耳毛 名耳母吾者 不所忘

反歌

吾毛見都 人爾毛將告、勝壯鹿之 問間能手兒名之 奧津城處  
 勝壯鹿乃 眞間乃入江、打靡 玉藻刈兼 手兒名志所念

卷第四

相聞

○近江天皇—天智  
天皇。

額田王思近江天皇作歌一首

君待登 吾戀居者 我屋戶之 簾動之 秋風吹

○大伴郎女—大伴  
坂上郎女、旅人の  
妹。  
○和歌—この歌の

大伴郎女和歌四首(中二首)

狹穂河乃 小石踐渡 夜干玉之 黑馬之來夜者 年爾母有稗  
 萬葉集



前に「京職大夫藤原大夫贈大伴郎女歌三首」が見えてゐる。  
○狭穂河一佐保川、奈良市の北を西流する大和川の一支流。

第一篇 上古 大和時代

千鳥鳴 佐保乃河瀬之 小浪 止時毛無 吾戀者

右郎女者佐保大納言卿之女也。初嫁一品穗積皇子、被寵無儔。而皇子薨之後時、藤原麻呂大夫姆之郎女焉。郎女家於坂上里。仍族氏號曰坂上郎女也。

卷第五

雜歌

思子等二歌一首并序

釋迦如來金口正說、等思衆生一如羅喉羅。又說、愛無過子。至極大聖尙有愛子之心。況乎世間蒼生誰不愛子乎。

宇利波米婆 胡藤母意母保由 久利波米婆 麻斯提斯農波由 伊豆久欲利 枳多  
利斯物會 麻奈迦比爾 母等奈可利提 夜周伊斯奈佐農

反歌

銀母 金母玉母 奈爾世武爾 麻佐禮留多可良 古爾斯迦米夜母

貧窮問答歌一首并短歌

○乞乞「乞且」の誤ならむと。(代匠記)

風雜 雨布流欲乃 雨雜 雪布流欲波 爲部母奈久 寒之安禮婆 堅鹽乎 取都  
豆之呂比 糟湯酒 宇知須須呂比且 之波夫可比 鼻毗之毗之爾 志可登阿良農  
比宜可伎撫而 安禮乎於伎且 人者安良自等 富己呂倍騰 寒夜須良乎 和禮欲利母  
引可賀布利 布可多衣 安里能許等其等 伎會倍騰毛 寒夜須良乎 和禮欲利母  
貧人乃 父母波 飢寒良牟 妻子等波 乞乞泣良牟 此時者 伊可爾之都都可  
汝代者和多流 天地者 比呂之等伊倍杼 安我多米波 狹也奈理奴流 日月波  
安可之等伊倍騰 安我多米波 照哉多麻波奴 人皆可 吾耳也之可流 和久良婆  
爾 比等等波安流乎 比等奈美爾 安禮母作乎 綿毛奈伎 布可多衣乃 美留乃  
其等 和和氣佐我禮流 可可布能尾 肩爾打懸 布勢伊保能 麻宜伊保乃內爾  
直土爾 藁解敷而 父母波 枕乃可多爾 妻子等母波 足乃方爾 圍居而 憂  
吟 可麻度柔播 火氣布伎多且受 許之伎爾波 久毛能須可伎且 飯炊 事毛  
和須禮提 奴延鳥乃 能杼與比居爾 伊等乃伎提 短物乎 端伎流等 云之如  
楚取 五十戶長我許惠波 寢屋度麻位 來立呼比奴 可久婆可里 須部奈伎物能  
可 世間乃道



世間乎 宇之等夜佐之等 於母倍杼母 飛立可禰都 鳥爾之安良禰婆

山上憶良頓首謹上。

好去好來歌一首

神代欲理 云傳介良久 虛見通 倭國者 皇神能 伊都久志吉國 言靈能 佐吉  
播布國等 加多利繼 伊比都賀比計理 今世能 人母許等期等 目前爾 見在知  
在 人佐播爾 滿且播阿禮等母 高光 日御朝庭 神奈我良 愛能盛爾 天下  
奏多麻比志 家子等 撰多麻比天 勅旨大命 載持且 唐能 遠境爾 都加  
播佐禮 麻加利伊麻勢 宇奈原能 邊爾母奧爾母 神豆麻利 宇志播吉伊麻須諸  
能 大御神等 船舳爾能閉爾 道引麻志遠 天地能 大御神等 倭 大國靈  
久堅能 阿麻能見虛喻 阿麻賀氣利 見渡多麻比 事了 還日者 又更 大御神  
等 船舳爾 御手打掛且 墨繩袁 播倍多留期等久 阿遲可遠志 智可能岬欲利  
大伴 御津濱備爾 多太泊爾 美船播將泊 都都美無久 佐伎久伊麻志且 速歸  
坐勢

反歌

大伴 御津松原 可吉掃且 和禮立待 速歸坐勢  
難波津爾 美船泊農等 吉許延許婆 紐解佐氣且 多知婆志利勢武  
天平五年三月一日 良宅對面獻三日 山上憶良 謹上  
大唐大使卿記室

卷第六

雜歌

山部宿禰赤人作歌二首(中一首)并短歌  
八隅知之 和期大王乃 高知爲 芳野宮者 立名附 青墻隱 河次乃 清河內會  
春部者 花咲乎遠里 秋去者 霧立渡 其山之 彌益益爾 此河之 絕事無 百  
石木能 大宮人者 常將通

反歌二首

三吉野乃 象山際乃 木末爾波 幾許毛散和口 鳥之聲可聞

○象山—大和國吉

○大唐大使卿—遣  
唐大使多治比真人  
廣成。天平五年渡  
唐、同七年歸朝。



野郡中莊村大字喜  
佐谷の山。

第一篇 上古 大和時代

烏玉之 夜乃深去者 久木生留 清河原爾 知鳥數鳴

山上臣憶良沈疴之時歌一首

士也母 空應有 萬代爾 語續可 名者不立之而

右一首憶良臣沈疴之時、藤原朝臣八束使河邊朝臣東人令問所疾之狀。於是憶良臣報語已畢。有須拭涕悲嘆口吟此歌。

○海犬養宿禰岡磨

一傳未詳。

海犬養宿禰岡磨應詔歌一首

御民吾 生有驗在 天地之 榮時爾 相樂念者

卷第七

雜 詞

詠 天

天海丹 雲之波立 月船 星之林丹 撈隱所見

右一首柿本朝臣人麿之歌集出。

旋 頭 歌

君爲 手力勞 織在衣服斜 春去 何 色 摺者吉

譬 喻 歌

寄 草

冬隱 春乃大野乎 燒人者 燒不足香文 吾情熾  
月草爾 衣者將摺 朝露爾 所沾而後者 徙去友

卷第八

春 雜 詞

山部宿禰赤人歌四首(中一首)

萬 葉 集



第一篇 上古 大和時代

春野爾はるのの 須美禮すみれ探爾等たみらむら 來師吾曾こしわれぞ 野乎奈都可之美ねをなつかしき 一夜宿二來ひさよりにける

夏相聞

大伴坂上郎女歌一首

夏野乃なつのは 繁見丹開有しげみにさける 姬由理乃ひめゆりの 不所知戀者しらえぬこひは 苦物乎くるしきものを

秋雜歌

岡本天皇御製歌一首

暮去者ゆふさらは 小倉乃山爾をぐらのやまに 鳴鹿之なぐしかの 今夜波不鳴こよひはななき 寐宿家良思母いれにけらしも

湯原王蟋蟀歌一首

暮月夜ゆふづくよ 心毛思努爾こころしぬに 白露乃しらつゆの 置此庭爾おくこのにはに 蟋蟀鳴毛こぼろぎなぐも

冬相聞

三國真人足歌一首

高山之たかやまの 菅葉之努藝すがのほしぬぎ 零雪之ふるゆきの 消跡可曰毛けぬさかいはも 戀乃繁鷄鳩こひのしげけく

紀少鹿女郎歌一首

久方之ひさかたの 月夜乎清美つきよをきよみ 梅花うめのはな 心開而こころにさきて 吾念有公あがもへるきみ

卷第九

雜歌

詠水江浦島子一首并短歌

春日之はるのひの 霞時爾かすみあるとき 墨吉之すみよしの 岸爾出居而きしにいでみて 釣船之つりぶねの 得乎良布見者さをらふみれば 古之いにしへの 事曾所念ことぞおもはゆる  
水江之みづのえの 浦島兒之うらしまのこが 堅魚釣かたをつり 鯛釣矜たひつりほり 及七日なぬかまで 家爾毛不來而いえにもこずて 海界乎うなさを 過而傍行すきてこぼゆく  
爾に 海若わたつみの 神之女爾かみのをさめに 避爾たまさかに 伊許藝趁いこぎひかひ 相詛良比あひかたらひ 言成之賀婆ことなりしかは 加吉結かきむすび 常代爾さこよに  
至いたり 海若わたつみの 神之宮乃かみのみやの 内隔之うちへの 細有殿爾たへなるとのに 携たづさはり 二人入居而ふたりいりみて 者不爲おもしろせず 死不爲而しにらせずして  
永世爾ながきよに 有家留物乎ありけるものを 世間之よのなかの 愚人之かたくなびとの 吾妹兒爾わがもこに 告而語久のりてかたらく 須臾者しましきは 家歸いへにかへり

萬葉集

○岡本天皇—舒明天皇。

○湯原王—志貴皇子の御子、光仁天皇の皇弟、延暦廿四年薨去。

○三國真人人足—慶雲二年十二月、從五位下、養老四月正月、正五位下。享年未詳。

○紀少鹿女郎—鹿人大夫之女、名曰小鹿、安貴王之妻也。(元曆本)

○水江—丹後國竹野郡網野町にある湖の古名なりといふ。  
○浦島子—浦島傳説。日本書紀・續日本後紀・丹後風土記・本朝神仙傳等に見ゆ。



而 父母爾 事毛告良比 如明日 吾者來南登 言家禮婆 妹之答久 常世邊爾  
 復變來而 如今 將相跡奈良婆 此篋 開勿勤常 曾己良久爾 望目師事乎 墨  
 吉爾 還來而 家見跡 宅毛見金手 里見跡 里毛見金手 恠常 所許爾念久  
 從家出而 三歲之間爾 墻毛無 家滅目八跡 此篋乎 開而見手齒 如本 家者  
 將有登 玉篋 小披爾 白雲之 自箱出而 常世邊 棚引去者 立走 叫袖振  
 反側 足受利四管 頓 情消失奴 若有之 皮毛皺奴 黑有之 髮毛白班奴  
 由奈由奈波 氣左倍絕而 後遂 壽死祁流 水江之 浦島子之 家地見

反歌

常世邊 可住物乎 劔刀 己之小柄 於曾也是君

右件歌者、高橋蟲麿歌集中出。

卷第十四

東歌

筑波禰乃 爾比具波麻欲能 伎奴波安禮杼 伎美我美家思志 安夜爾伎保思母

○筑波禰—常陸國筑波山。

○高橋蟲麿—傳未詳。傳説を詠める歌人として特出してゐる。

或本歌曰、多良知禰能。又云、安麻多伎保思母。

右二首(中一首)常陸國歌

相聞

多麻河泊爾 左良須氏豆久利 佐良左良爾 奈仁曾許能兒乃 己許太可奈之伎

○多麻河—武藏國多摩川。

右九首(中一首)武藏國歌

爾保杼里能 可豆思加和世乎 爾倍須登毛 曾能可奈之伎乎 刀爾多氏米也母

右四首(中一首)下總國歌

卷第十六 有由緣一井雜歌

昔者有娘子、字曰櫻兒也。于時有二壯士、共誂此娘。而捐生格競、貪死相敵。於是娘子歎曰、從古來于今、未聞未見一女之身往適二門矣。方今壯士之意有難和平、不如妾死相害永息。爾乃尋入林中、懸樹經死。其兩壯士不致哀慟、血泣漣漣。各陳心緒、作歌二首。

春去者 插頭爾將爲跡 我念之 櫻花者 散去流香聞  
 妹之名爾 繫有櫻 花開者 常哉將戀 彌年之羽爾



卷第十八

賀陸奥國出金 詔書一哥一首并短歌

○陸奥國出金 天平廿一年二月、陸奥國小田郡より黄金九百兩献上。聖武天皇御嘉納、東大寺に行幸、御奉告。時に大伴家持越中にありて賀上した歌がこれである。

○小田在山 陸前國遠田郡浦谷村大字元涌谷。

葦原能 美豆保國乎 安麻久太利 之良志賣之家流 須賣呂伎能 神乃美許等能  
 御代可佐禰 天乃日嗣等 之良志久流 伎美能御代御代 之伎麻世流 四方國爾  
 波 山河乎 比呂美安都美等 多豆麻豆流 御調寶波 可蘇倍衣受 都久之毛可  
 禰都 之加禮騰母 吾大王能 毛呂比登乎 伊射奈比多麻比 善事乎 波自米多  
 麻比豆 久我禰可毛 多能之氣久安良牟登 於母保之豆 之多奈夜麻須爾 鷄鳴  
 東國能 美知能久乃 小田在山爾 金有等 麻宇之多麻敵禮 御心乎 安吉良  
 米多麻比 天地乃 神安比字豆奈比 皇御祖乃 御靈多須氣豆 遠代爾 可可里  
 之許登乎 朕御世爾 安良波之豆安禮婆 食國波 左可延牟物能等 可牟奈我良  
 於毛保之賣之豆 毛能乃布能 八十伴雄乎 麻都呂倍乃 牟氣乃麻爾麻爾 老人  
 毛 女童兒毛 之我願 心太良比爾 撫賜 治賜婆 許己乎之母 安夜爾多敷  
 刀美 宇禮之家久 伊余與於母比豆 大伴能 遠都神祖乃 其名乎婆 大來目主

登 於比母知豆 都加倍之官 海行者 美都久屍 山行者 草牟須屍 大皇乃  
 敵爾許曾死米 可弊里見波 勢自等許等太豆 大夫乃 伎欲吉彼名乎 伊爾之敵  
 欲 伊麻乃乎追通爾 奈我佐敵流 於夜能子等毛會 大伴等 佐伯氏者 人祖乃  
 立流辭立 人子者 祖名不絶 大君爾 麻都呂布物能等 伊比都雅流 許等能都  
 可佐會 梓弓 手爾等里母知豆 劔大刀 許之爾等里波伎 安佐麻毛利 由布能  
 麻毛利爾 大王能 三門乃麻毛利 和禮乎於吉豆 且比等波安良自等 伊夜多豆  
 於毛比之麻左流 大皇乃 御言能左吉乃乎 聞者貴美之安禮婆

反歌三首

大夫能 許己呂於毛保由 於保伎美能 美許登能佐吉乎能 聞者多布刀美之安禮婆  
 大伴能 等保追可牟於夜能 於久都奇波 之流久之米多底 比等能之流倍久  
 須賣呂伎能 御代佐可延牟等 阿頭麻奈流 美知能久夜麻爾 金花佐久

天平感寶元年五月十二日於越中國守館大伴宿禰家持作之。

○大伴宿禰家持 旅人之子、天平十年より十六年頃まで内舍人、十八年宮内少輔より越中守。爾後、中央・地方の諸官に歴任し延暦二年七月申納言となり同四年八月歿、集中最多の歌人。



卷第二十

天平勝寶七歲乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌

於保吉美能 美許等可之古美 伊蘇爾布理 宇乃波良和多流 知知波波乎於伎且

右一首助丁丈部造人鷹。

知知波波我 可之良加伎奈且 佐久安禮天 伊比之古度婆曾 和須禮加禰津流

右一首丈部稻鷹。

○三年—天平寶字三年。

三年春正月一日於因幡國應賜饗國郡司等之宴歌一首

新 年之始乃 波都波流能 家布敷流由伎能 伊夜之家餘其騰

右一首守大伴宿禰家持作之。

第二篇 中古 平安時代



### 古今和歌集

○やまと歌は云々  
「夫倭歌者、託其根於心地、發其花於詞林也。」(眞名序)  
 ○世の中にある人云々  
「人之在世、不能無爲、思慮易遷、哀樂相變、感生於志、詠形於言。」(眞名序)

○花に鳴く鶯云々  
「若夫鶯之鳴花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發歌詠、物皆有之、自然之理也。」(眞名序)  
 ○力をも入れずして云々  
「動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和歌。」(眞名序)

〔序〕 やまと歌は、ひとの心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を、見る物聞く物につけて、いひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの聲を聞けば、いきとしいけるもの、いづれか歌を詠まざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬおに神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をもやはらげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり。

この歌、あめつちの開けはじまりける時よりいできにけり。しかあれども、世に傳はる事は久方のあめにしては、下照姫にはじまり、あらがねの土にしては、素戔鳴尊よりぞおこりける。ちはやぶる神代には、歌のもしも定まらず、すなほにして、ことの心わき難かりけらし。人の世となりて、すさのをの命よりぞ、みそもじ餘り一文字はよみける。かくてぞ花をめ、鳥を羨み、霞を憐び、露を悲ぶ心ことは、

名序) ○この歌云々  
「然而神世七代、時賈人淳、情欲無分、和歌未レ作。」(眞名序)  
 ○下照姫—大國主神の女、天稚彦の妻。  
「天なるや、弟機織女のうながせる玉の御統、御統の穴玉はやみ谷、二わたらす阿遲志貴、高日子根の神ぞや。」(古事記)  
 ○素戔鳴尊—八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣つくるその八重垣を。(古事記)  
 ○難波津の歌—  
「難波津にさくやこの花冬ごもり今を春へとさくやこの花。」(王仁の歌と傳へらる。)  
 ○あさか山の言の葉—  
「淺香山影さへ見ゆる山の井の

多くさま／＼になりける。遠き處も、出で立つ足もとよりははじまりて、年月をわたり、高さ山も、麓の塵ひぢよりなりて、天雲たなびくまで生ひのぼれるが如くに、この歌もかくの如くなるべし。難波津の歌は、みかどのおほんはじめなり。あさか山の言の葉は、采女の戯れより詠みて、このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける。そも／＼歌のさまむつなり。からの歌にもかくぞあるべき。そのむくさの二つには、そへ歌、二つには、かぞへ歌、三つには、なずらへ歌、四つには、たとへ歌、五つには、たゞごと歌、六つには、いはひ歌なり。今の世の中色につき、人の心花になりけるより、あだなる歌、はかなきことのみいでくれば、色好みの家にうもれ木の、人しれぬ事となりて、まめなる處には、花すゝき、ほに出だすべき事にもあらずなりけり。そのはじめを思へば、かゝるべくなむあらぬ。いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜毎に、さぶらふ人々を召して、事につけつ、歌を獻らしめ給ふ。あるは花を翫ぶとて、たよりなき所にまどひ、あるは月を懷ふとて、しるべなき闇にたどれる心々を見給ひて、さかし愚なり、としろしめし



あさくは人をわが思はなくに。(萬葉集)  
○采女の戯れ—淺香山の歌の詞書に「於是前采女、風流娘子、左手捧レ觴、右手持レ水、擊レ之王膝—而詠ニ其歌。」と見えてゐる。

○歌のさまむつ—「倭歌有ニ六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。」(眞名序)

○いにしへの世々のみかど云々—「古天子、毎ニ良辰美景、詔レ侍臣預ニ宴筵—者ニ獻ニ和歌。」(眞名序)

○あるは花を翫ぶ云々—「君臣之情、由レ斯可レ見、賢愚之性、於レ是相分、所レ以隨ニ民之欲—擧ニ士之才也。」(眞名序)

○さざれ石に喩へ—「わが君は千代にましませざれ石のいはほとなりて苔の蒸すまで。」(古今集)

○筑波山にかけて—「筑波根のこのもかにもに蔭はあれど君がみかけにます蔭はなし。」(古今集)

○富士の烟—「人しれぬおもひを常にするがなる富士の山こそ我が身なりけれ。」(古今集)

○松蟲の音—「君しのぶ草にやつるるふるさとほまつ蟲の音ぞ悲しかりける。」(古今集)

○高砂・住の江の松—「誰をかもしる人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに。」(われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく世へぬらむ。」(古今集)

○男山の昔—「今

けむ。しかあるのみならず、さざれ石に喩へ、筑波山にかけて君をねがひ、よろこび身にすぎ、たのしみ心に餘り、富士の烟によそへて人を戀ひ、松蟲の音に友をしるのび、高砂・住の江の松も、あひあひのやうに覺え、男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞ慰めける。また春のあしたに花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは年毎に鏡の影に見ゆる、雪と波とを歎き、草の露、水の泡を見て、我が身を驚き、あるはきのふは榮えおごりて、けふは時をうしなひ世にわび、親しかりしも疎くなり、あるは松山の波をかけ、野中の水を汲み、秋萩の下葉をながめ、曉の鳴のはね搔を數へ、あるは吳竹の憂きふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨み來つるに、今は富士の山の烟も立たずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。

古へより、かく傳はるうちにも、奈良の御時よりぞ弘まりにける。かのおほん世や、歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、おほきみつの位柿本の人麻呂なむ、歌のひじりなりける。これは君もひともし、身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ、立田川に流る、紅葉をば、帝の御ほん目には、錦と見給ひ、春のあした、吉野の山の櫻は、人麻呂が心には、雲かとのみなほ覺えける。又やまのべの赤人といふ人あり。歌にあやしくたへなりけり。人麻呂は、赤人が上に立たむ事かたく、赤人は人麻呂が下に立たむ事難くなむありける。この人々をおきて、又すぐれたる人も、吳竹のよゝに聞え、片絲のよりよりに絶えずぞありける。

これよりさきの歌を集めてなむ、萬葉集となづけられたりける。かの御時より、年はもゝとせに餘り、世はとつぎになむなりにける。こゝにいにしへのことをも、歌の心をも知れる人、よむ人多からず、わづかに一人二人なりき。しかあれど、これかれ、得たる所、得ぬ所、互になむある。いまこの事をいふに、つかさ位たかき人をば、たやすきやうなればいれず。そのほかに、近き世にその名聞えたる人は、即ち、僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、まことすくなし。たとへば繪にかけらる女を見て、いたづらに心を動かすが如し。在原業平は、その心あまりて、言葉足らず、いはゞ、しほめる花の色なくて匂残れるが如し。ふんやの康秀は、詞はたくみにて其のさま身におはず。いはゞ、あき人のよききぬ著たらむが如し。宇治山の僧喜撰は、詞はかすかにして、はじめをはりたしかならず。いはゞ、秋の月を見る



こそあれわれもむかしは男山さかゆく時もありこしものを。(古今集)  
 ○女郎花の一時「秋の野になまめきたてるをみなへしあなかしがまし花も一時。」(古今集)  
 ○鏡の影「うば玉のわが黒髪やかはるらむ鏡のかげにふれる白雪。」(古今集)  
 ○水の泡「うきながら消ぬる泡ともなりなむ流れてとだに頼まれぬ身は。(古今集)  
 ○あるはきのふは榮え「いにしへの賤のをだまきいやしきもよきも盛りはありし物なり。」(古今集)  
 ○松山の波をかけたし「君をおきてあだし心をわがもたば末のまつ山波もこえなむ。」(古今集)

に、曉の雲にあへるが如し。をの、小町は、いにしへのそとほり姫のながれなり。あはれなるやうにて、強からず。いはゞ、よき女の惱めるところあるに似たり。大ともの黒主は、心はをかしくて、そのさまいやし。いはゞ、たき木おへる山人の花の蔭にやすめるが如し。この外の人々、その名聞ゆる、野邊におふる葛の這ひひろごり、林にしげき木の葉の如く多かれど、歌とのみ思ひて、其のさま知らぬなるべし。

かゝるに、今、すべらぎの天の下しろしめすこと、よつの時、こゝのがへりになむなりぬる。あまねきおほんうつくしみの波、八島のほかまで流れ、ひろきおほんめぐみの蔭、筑波山の麓よりも繁くおはしまして、よろづの政を聞き召すいとま、もろくの事をすて給はぬあまりに、いにしへの事をも忘れじ、舊りにし事をもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀の友則・御書のところのあづかり紀の貫之・前のかひのさう官おふしかふちの躬恒・右衛門の府生みふの忠岑らにおほせられて、萬えふ集に入らぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。

○野中の水「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞ波む。(古今集)  
 ○秋萩の下葉「秋萩の下葉いろづく今よりやひとりある人のいねがてにする。」(古今集)  
 ○曉の鳴「曉の鳴のはねがきもはがき君が来ぬ夜は我ぞ數かく。」(古今集)  
 ○吳竹の憂きふし「世にふれば言の葉しげき吳竹のうきふしごとく驚ぞなく。」(古今集)  
 ○吉野川をひきて「流れては妹脊の山のなかにおつるよし野の川のよしや世の中。」(古今集)  
 ○富士の山の烟「ふじの根のならぬ思ひにもえばも

それが中に、梅をかざすよりはじめて、時鳥を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、又鶴龜につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩夏草を見て妻を戀ひ、逢坂山にいたりて手向を祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ選ばせ給ひける。すべて、千歌はた巻。名づけて古今和歌集といふ。

かく、この度あつめえらばれて、山した水の絶えず、濱の真砂かず多くつもりぬれば、今は、飛鳥川の瀬になるうらみも聞えず、さゞれ石のいはほとなるよろこびのみぞあるべき。それわれら、詞は、春の花の匂少くして、空しき名のみ、秋の夜の長きをかこてれば、かつは、人の耳におそり、かつは歌の心にはお思へど、たなびく雲の立ちぬ、啼く鹿のおきふしは、貫之らが、この世に生れて、この事の時にあへるをなむよろこびぬる。人麻呂なくなりたれど、歌のこととゞまれるかな。たとひ、時移り事去り、たのしび悲みゆきかふとも、この歌のもじあるをや。青やぎの絲絶えず、松の葉の散り失せずして、まさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しくとゞまれらば、この歌のさまをも知り、事の心をも得たらむ人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて、今を戀ひざらめかも。



え神だにけたぬ空し烟を。(古今集)  
 ○長柄の橋―「世の中にふりぬる物は津の國の長柄の橋と我れとなりけり。(古今集)」  
 ○立田川に流る、紅葉―「立田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦中や絶えなむ。(古今集)」  
 ○かの御時より―「昔平城天子、詔侍臣令撰萬葉集、自爾以來、時

歷三十代、數過百年。(眞名序)  
 ○僧正遍昭は―「華山僧正尤得歌體、然其詞花而少實、如圖畫好女徒動人情。(眞名序)」  
 ○在原業平は―「在中將之歌、其情有餘、其詞不不足、如菱花雖少、彩色而有薰香。」(眞名序)  
 ○ふんやの康秀は―「文琳巧詠物、

然其體近俗、如賈人之著鮮衣。」(眞名序)  
 ○宇治山―山城國宇治郡の宇治山。  
 ○喜撰は―「其詞花麗而首尾停滯、如望秋月、遇曉雲。」(眞名序)  
 ○をの、小町は―「小野小町之歌、古衣通姫之流也、然艶而無氣力、如病婦著花粉。」(眞名序)  
 ○大ともの黒主は

「大友黒主之歌、古猿丸大夫之姿也。頗有逸興而體甚鄙、如田夫息花前。」(眞名序)  
 ○この外の人々―「此外氏姓流聞者、不可勝數、其大底皆以艶爲基、不知歌之趣者也。」(眞名序)  
 ○かゝるに今云々―「醍醐天皇は寛平九年踐祚遊ばされたので延喜五年は九年目である。」

○大内記―中務省に屬し詔勅の類を掌る。  
 ○御書のところのあづかり―宮中祕書類を掌藏する役。  
 ○前のかひのさう官―前甲斐少目。少目は國衛の四等官。  
 ○右衛門の府生―衛門府門部舍人を監する下官。  
 ○山した水の絶えず―淵變爲瀨之

聲、寂々閉レ口、砂長爲巖之頰、洋々滿レ耳。(眞名序)  
 ○飛鳥川の瀨―「世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀨になる。」(古今集)  
 ○それわれら云々―「臣等、詞少春花之艶、名竊秋夜之長、況乎、進恐時俗之嘲、退慙才藝之拙、適遇和歌之中興、以樂吾道之再昌。」(眞名序)

卷第一 春 歌上

ふる年に春立ちける日よめる  
 在原元方  
 年のうちに春は來にけり一年をこぞとやいはむ今年とやいはむ

○在原元方―棟梁の子、天曆七年歿、年六十六。  
 ○紀貫之―御書所

春立ちける日よめる

在原元方  
紀貫之

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

春日野のとぶ火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜摘みてむ

君がため春の野にいでて若菜摘むわがころも手に雪は降りつゝ

春の夜うめの花をよめる

春の夜の闇はあやなしうめの花色こそ見えね香やはかくるゝ

初瀬にまうづる毎に宿りける人の家に、久しく宿らで、程へて後にいたりければ、かの家のあるじ「かく定かになむやどりはある」といひ出だして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる

人はいさ心も知らずふるさとははなぞむかしの香に匂ひける

○初瀬―泊瀬・長谷などとも書く。大和國磯城郡初瀬山、有名な長谷寺がある、中古以來の靈場。  
 ○渚の院―河内國

渚の院にて櫻を見てよめる

在原業平朝臣



世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

花さかりに、京を見やりてよめる

見渡せば柳さくらをこさませてみやこぞ春のにしきなりける

亭子院の歌合の時よめる

見る人もなき山ざとのさくら花ほかの散りなむ後ぞ咲かまし

卷 第二 春 歌 下

僧正遍昭に詠みておくりける

櫻ばな散らば散らなむ散らずとてふるさと人の來ても見なくに

さくらの花の散るをよめる

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

交野郡にあり、惟喬親王常に出でました所である。  
○在原業平—平城天皇の皇子阿保親王の第五子、臣籍に列せられ在原の姓を賜ふ。藏人・右馬頭より元慶元年右近衛權中將となり従四位上、同年藏人頭となる、元慶四年歿、年五十六。  
○亭子院—寛平法皇の御所、七條坊門の北南西洞院の西二町の處にあつた。(拾芥抄)  
○歌合—この歌合は延喜十三年のことである。  
○伊勢—伊勢守藤原繼蔭の女、宇多法皇に寵愛せらる、天慶二年歿。  
○僧正遍昭—俗名長岑宗貞。大納言安世の子、仁明天皇の御代、藏人頭、天皇崩するや剃髮

惟喬のみこ

きの友則

小野小町

はなの色は移りにけりな徒にわが身世にふるながめせし間に

題しらず

今もかも咲きにほふらむたちばなの小島のさきの山ぶきの花

よみ人しらず

亭子院の歌合に春のはての歌

けふのみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげかは

みつね

卷 第三 夏 歌

題しらず

わが宿の池のふちなみ咲きにけり山ほととぎすいつか來鳴かむ

よみ人しらず

題しらず

よみ人しらず

して遍昭と稱す。  
寛平二年寂、年七十六。  
○惟喬のみこ—文德天皇の第一皇子御母は紀靜子。寛平九年二月薨去。  
○きの友則—土佐掾・少内記より延喜の初頭大内記となり六位に叙せらる、延喜五年歿、年六十一。  
○小野小町—傳未詳。  
○たちばなの小鳥—大和國高市郡飛鳥の橋の鳥ならんといひ、宇治川の北岸橋姫社の下なる山吹の瀬ならんといひ、その所在未定である。  
○みつね—凡河内躬恒。寛平年中、甲斐權少目となり、やがて延喜の初頭御書所に候し和泉大掾に進む。歿年未詳。



さ月まつ山ほととぎすうちはぶき今も鳴かなむこぞのふる聲

○ 五月待つ花たちはなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする  
よみ人しらず

○ 月のおもしろかりける夜、曉方によめる  
ふかやぶ

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ

卷 第四 秋 歌 上

○ 秋たつ日よめる  
藤原敏行朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞ驚かれぬる

○ 秋風のふきにし日よりひさかたの天の川原にたゝぬ日はなし

○ 藤原敏行—富士鷹の子、宇多天皇の御代、近衛中將、歌人頭を經、從四位上右兵衛督に至る、延喜七年歿。

○ ふかやぶ—清原深養父。房則の子、延喜八年内匠大允、延喜八年從五位下に叙せらる、生歿年未詳。

○ 題しらず  
よみ人しらず

白雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋のよの月

○ 是貞のみこの家の歌合によめる  
大江千里

月見ればちとに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど

○ 是貞のみこの家の歌合によめる  
よみ人しらず

おく山にもみぢ踏みわけ鳴く鹿のこゑ聞く時ぞ秋はかなしき

○ 素性法師—真岑宗貞の子、生歿年未詳。

われのみやあはれと思はむきりくす鳴く夕蔭のやまと撫子

卷 第五 秋 歌 下

○ 文屋朝康—康秀

是貞のみこの家の歌合の歌

文屋朝康



吹くからに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ

の子、延喜年中、大舍人大允より大膳少進に進む、生歿年未詳。

壬生 忠岑

秋のよの露をば露とちきながら雁のなみだや野べを染むらむ

○壬生忠岑―藤原定國の隨身より右衛門府生、攝津大目となり六位に叙せらる、康保二年歿。

つら ゆき

しら露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

○もる山―守山又は森山とも書く、近江國野洲郡にありて觀音堂がある。

凡河内 躬恒

心あてにをらばやをらむはつ霜のちきまどはせるしら菊の花

しら菊の花をよめる

よみ人しらず

立田川紅葉みだれて流るめり渡らばにしきなかや絶えなむ

○立田川―山城國の山崎川の異名であるとも、大和國高市郡神南備山の麓を流る川が立田

業平 朝臣

川であるともいはいれ、定説がない。

千早ぶる神代も聞かずたつた川からくれなゐに水くゝるとは

卷 第六 冬 歌

題しらず

よみ人しらず

たつ田がは錦おりかくかみな月しぐれの雨をたてぬきにして

冬の歌とてよめる

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

大和の國にまかれりける時に、雪の降りけるを見てよめる

坂上 是則

朝ぼらけ在明の月と見るまでによし野の里にふれるしら雪

年のはてによめる

春道 列樹

昨日といひけふと暮してあすか川流れて早き月日なりけり

○源宗于―光孝天皇の皇子是忠親王の御子、寛平六年、源姓を賜ひ臣籍に列せらる、從四位下右京大夫に至る。天慶二年歿。  
○坂上是則―好藤の子、延喜八年、大和權少掾。延長八年歿。  
○春道列樹―延喜十年、文章生、同二十年、壹岐守。同年歿。  
○あすか川―大和



卷第七 賀歌

題しらず

わが君は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔の蒸すまで

よみ人しらず

ふして思ひおきて數ふる萬代は神ぞしるらむわが君のため

秋

すみの江の松を秋風ふくからにこゑうちそふるおきつしら波

躬

恒

○すみの江—攝津國住吉郡、今の住吉神社の地。

○佐保川—奈良市の北を西流する大和川の支流。

千鳥なく佐保の川霧立ちぬらし山の木の葉もいろまさり行く

忠

岑

卷第八 離別歌

題しらず

立ち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今かへりこむ

在原行平朝臣

題しらず

唐衣たつ日は聞かじ朝露のおきてし行けばけぬべきものを

よみ人しらず

○いなばの山—「因幡國法美郡稻羽(和名抄)とある山で稻葉山(一名宇倍山)とも書く。

志賀の山越にていし井のもとにて、物いひける人の別れけるをりによめる

つらゆき

むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな

道にあへりける人の車に物いひつきて、別れける所にてよめる とも のり

したの帯の道はかた／＼別るともゆきめぐりても逢はむとぞ思ふ



卷第九 羈旅歌

もろこしにて、月を見てよみける

安倍 仲鷹

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

あづまの方へ、友とする人、一人二人いざなひていきけり。三河國八橋といふ處にいたれりけるに、その川のほとりに、かきつばたいと面白く咲けりけるを見て、木の蔭におり居て、かきつばたといふいつもじを、句のかしらにすゑて、旅の心をよまむとて詠める 在原業平朝臣  
唐衣きつゝなれにしつましあればはるくきぬる旅をしぞ思ふ

朱雀院の奈良におはしましける時に、手向山にてよめる

すがはらの朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに

卷第十 物名

うぐひす

藤原敏行朝臣

○安倍仲鷹—昭守の子。靈龜二年、年十六にして遣唐留學生となり、唐に至りて名を朝衡と改め、唐朝に仕ふ。秘書監より御史中丞に至る。勝寶年中遣唐大使藤原清河と共に歸らんとして果さず、遂に彼の國に歿す、年七十。  
○春日なる三笠の山—大和國添上郡春日の郷、春日神社後方の山。  
○三河國八橋—碧海郡池鯉鮒宿の東方の里ならんといはれてゐる。  
○すがはらの朝臣—菅原道眞。是善の子、貞觀十二年、文章生に擧げられ元慶元年には文章博士となり、加賀權守、讚岐守、藏人頭等を経て、昌泰二年右大臣とな

心から花のしづくにそぼちつゝうぐひすとのみ鳥の鳴くらむ

をみなへし

とも のり

しら露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にも絲をみなへし

からはぎ

よみ人知らず

うつせみのからはぎごとにとどむれど魂の行方を見ぬぞ悲しき

おき火

みやこよし

流れいづるかただに見えぬ涙川おきひむ時や底はしられむ

卷第十一—卷第十五 戀歌

題しらず

よみ人知らず

ほととぎすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな

古今和歌集

○みやこよし—都長香。桑原秋成の子、貞觀二年、文章生となりやがて文章博士從五位下兼大内記越前權掾となる。元慶三年歿、年三十六。

る。延喜元年正月、太宰權帥として左遷、同三年二月薨去、年五十九。  
○手向山—奈良若草山南麓の手向山神社の附近か。



○ 思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき

○ かゞり火の影となる身の侘しきはながれて下にもゆるなりけり

題しらず

小野 小町

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせば覺めざらましを

○ うたゝ寝に戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

寛平の御時、後の宮の歌合の歌

藤原敏行朝臣

住の江の岸による浪よるさへや夢のかよひ路人めよくらむ

○ 淀―山城國久世郡淀川の北岸。

まこも刈る淀の澤みづ雨ふればつねよりことにまさるわが戀

つら ゆき

彌生のついたちより、しのびに、人に物をいひてのちに、雨のそほふりけるに、よみてつかはしける

在原業平朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめ暮らしつ

在原元方

○ あふ事のなきさにしよる波なればうらみてのみぞ立ち返りける

素性法師

○ 今こむといひしばかりの長月の有明の月を待ちいでつるかな

よみ人知らず

○ 月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たずしもあらず

古今和歌集



○河原左大臣源融。嵯峨天皇の皇子、寛平七年八月、年七十四。

陸奥のしのぶもぢずり誰れ故に亂れむと思ふ我れならなくに

河原左大臣

ちゞの色に移るふらめど知らなくに心し秋のもみぢならねば

よみ人知らず

かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人みれば袖ぞ濡れぬる

藤原かねすけ朝臣

よそにのみ聞かましものを音羽川渡るとなしにみなれ初めけむ

夢にだにあふ事かたくなり行くは我れやいをねぬ人や忘るゝ

○藤原兼輔。堤中納言と稱す。利基の子、從三位中納言に任ぜられ、承平三年二月歿、年五十七。  
○音羽川。山城國山科なる音羽瀧の流をいふ。

卷第十六 哀傷歌

いもうとのみまかりける時よめる

小野のたかむら

泣く涙雨とふらなむわたり河水まさりなば歸りくるかに

藤原敏行朝臣のみまかりける時に、詠みてかの家に遣はしける

紀 友 則

寐ても見ゆ寐でも見えけり大方はうつせみの世ぞ夢にはありける

母がおもひにてよめる

凡河内朝臣

神無月時雨にぬるゝもみぢ葉はたゞわび人のたもととなりけり

諒闇の年、池のほとりの花を見てよめる

篁 朝 臣

水の面にしづく花のいろさやかにも君がみ影のおもほゆるかな

をとこの、ひとの國にまかりけるまに、女俄かにやまひをして、いと弱くなりける時、よみおきて

○小野篁。守守の子。文章生より太宰少貳を經、參議左大辨に至る。仁壽二年十月歿、年五十一。  
○わたり河。三途川をいふ。



みまかりける

よみ人しらず

聲をだにきかで別るゝたまよりもなき床に寝む君ぞかなしき

卷第十七—卷第十八 雑歌

題しらず

よみ人しらず

わがうへに露ぞおくなるあまの川とわたる舟の櫂のしづくか

五節の舞姫を見てよめる

良岑 貞宗

あまつ風雲のかよひぢぶきとぢよをとめの姿しばしとゞめむ

〇

わがこゝろなぐさめかねつ更科やをばすて山にてる月を見て

惟喬のみこの狩しける供にまかりて、やどりけるに、歸りて、夜ひと夜、酒のみ物語をしけるに、十

〇更科やをばすて山—信濃國更科郡娘捨山。

一日の月も隠れなむとしけるをりに、みこ酔ひて、うちへ入りなむとしければ、よみ侍りける

なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月の隠るゝか山のはにげて入れずもあらなむ

業平の朝臣の母のみこ、長岡にすみ侍りける時に、業平宮仕すとて、時々も、えまかりとはず侍りければ、しはすばかりに、母のみこの許より、とみの事とて、文をもてまうできたり。あけて見れば、詞はなくてありける歌

おいぬればさらぬ別もありといへばいよく見まほしき君かな

かへし

なりひらの朝臣

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため

文屋の康秀が、三河のぞうになりて、「あがた見には、えいで立たじや」といひやれりけるかへりことによめる

小野 小町

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばいなむと思ふ

〇文屋康秀—字を文琳といふ。貞觀二年刑部中判事、元慶元年山城大掾、同三年縫殿助となる。歿年未詳。



○田村の御時—文  
德天皇の御代。  
○須磨—攝津國武  
庫郡須磨。

田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに、宮のうち侍りける人に  
つかはしける  
在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ

○小野—山城國葛  
野郡小野郷。

惟喬のみこの許にまかりかよひけるを、かしらおろして、小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶら  
はむとて、まかりたりけるに、比叡の山の麓なりければ、雪いと深かりけり。しひて、かの室にまか  
りいたりて、をがみけるに、つれづれとして、いと物悲しくて、歸りまうできて、よみおくりける

業平朝臣

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

題しらず

よみ人しらず

○立田山—大和國  
平群郡大和川の上  
流、龜瀬越の立田  
神社のある所。

風ふけばあきつ白浪たつ田山よはにや君がひとり越ゆらむ

ある人、「この歌は、昔、大和の國なりける人のむすめに、ある人住みわたりけり。  
この女、親もなくなりて家もわろくなりゆくあひだ、この男かふちの國に人をあ  
ひ知りて通ひつゝ、かれやうになりゆきけり。さりけれども、つらげなるけしき  
も見えで、かふちへいく毎に、をとこの心の如くにしつゝいだしやりければ、怪

しと思ひて、もしなきまにこと心もやあると疑ひて、月の面白かりける夜、かふ  
ちへいくまねにて、前裁のなかに隠れて見ければ、夜ふくるまで琴をかき鳴しつ  
つ、うちなげきてこの歌をよみて寝にければ、これをききて、それよりまた、ほ  
かへもまからずなりにけり」となむいひ傳へたる。

貞觀の御時、「萬葉集はいづばかり作れるぞ」と問はせ給ひければ、よみて奉りける

ふんやのありすゑ

神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふるごとぞこれ

卷第十九 雜體

長歌 (省略)

旋頭歌

題しらず

よみ人知らず

うちわたすをちかた人に物まをすわれ、そのそこに白く咲けるはなにの花ぞも

○貞觀の御時—清  
和天皇の御代。  
○文屋有季—傳未  
詳。



かへし

春されば野べにまづさく見れどあかね花、まひなしにたゞにのるべき花の名なれや

誹諧歌

題しらず

よみ人知らず

梅の花見にこそ來つれうぐひすの人く人くといとひしもをる

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

在原のむね梁

秋風にほころびぬらし藤袴つとりさせてふきりくす鳴く

○在原棟梁—業平の子、東宮舍人より筑前守に至る、昌泰元年歿。

卷第二十 大歌所御歌

おほなほびの歌

あたらしき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ

日本紀には、つかへまつらめ萬代までに

あふみぶり

近江より朝立ちくればうねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は

○うねの野—近江國蒲生郡、今の蒲生野。

○

君が代はかぎりもあらし長濱のまさごの數はよみつくとすとも

東歌

みちのくうた

みちのくはいづくはあれど鹽竈の浦こぐ舟の綱手かなしも

ひたちうた

筑波根のこのもかものもに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし

○筑波根—常陸國新治郡筑波山。



枕草子

清少納言

〔春は曙〕 春は曙。やう／＼しろくなり行く山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり、闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに、烏の寝どころへゆくとして、三つ四つ二つなど、飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。



〔正月一日は〕 正月一日は、まいて空のけしきうらくと、めづらしく霞こめたるに、世にありとある人は、姿かたち、心ごとにつくるひ、君をもわが身をも祝ひなどしたるさまことにをかし。

○七日は―七種の節供及白馬の節會行はる。七種の菜は「薺・菘・蕪・芹・葱・酒々代・御形・佛の座」(河海抄)と見えてゐる。  
○中の御門―待賢門をいふ。  
○左衛門の陣―建春門にあり、左衛門府の官人陣を立てゐる。  
○人々よろこびし

七日は、雪間の若菜青やかにつみ出でつゝ、例はさしもさる物、目近からぬ所にも騒ぐこそをかしけれ。白馬見むとて、里人は車清げにしたてゝ見にゆく。中の御門のとじきみひき入るゝほど、かしらども一ところにまるびあひて、刺櫛も落ち、用意せねば折れなどして、笑ふも亦をかし。左衛門の陣などに、殿上人あまた立ちなどして、舍人の弓ども取りて、馬ども驚かして笑ふを、はつかに見入れたれば、立蒞などの見ゆるに、主殿司、女官などの行きちがひたるこそをかしけれ。いかにばかりなる人、九重をかく立ちならすらむなど思ひやらるゝに、うちにも、見るはいとせばきほどにて、舍人が顔のきぬもあらはれ、白きもののゆきつかぬ所は、まことに黒き庭に雪のむら消えたる心地して、いと見苦し。馬のあがり騒ぎたるも、あそろしく覺ゆれば、引き入られて、よくも見やらず。  
八日、人々よろこびしてはしり騒ぎ、車の音も、常よりはことに聞えてをかし。

て―女叙位・給女王祿の奏慶をいふ。  
○もち粥―望粥にて十五日粥をいふ。

十五日は、もち粥の節供まゐる。粥の木ひきかくして、家の御達、女房などのうかがふを、打たれじと用意して、常にうしろを心づかひしたるけしきもをかしきに、いかにしてけるにかあらむ、打ちあてたるは、いみじう興ありとうち笑ひたるも、いとほえばえし。ねたしと思ひたる、ことわりなり。こぞより、あたらしうかよふ婿の君などの、内へ參るほどを、心もとなく、ところにつけて、われはと思ひたる女房ののぞき、奥のかたにたゞずまふを、前に居たる人は心得て笑ふを、「あなかま、く」と招きかくれど、君見しらず顔にて、おほどかにて居給へり。「こゝなる物とり侍らむ」などいひ寄り、はしり打ちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君もにくからず、あいぎようづきて笑みたる。ことに驚かず、顔すこし赤みて居たるもをかし。又、かたみに打ちて、男などさへぞ打つめる。いかなる心にかあらむ、泣き腹だち、打ちつる人をのろひ、まがまがしくいふもをかし。内わたりなどやむごとなきも、今日は皆亂れてかしまりなし。

○除目―「任レ官曰レ除目」授レ位曰レ除位。目名也。除ニ前官之名ニ記ニ當

除目のほどなど内わたりはいとをかし。雪降りこほりなどしたるに、申文もてありく四位五位、若やかにこゝちよげなるは、いとたのもしげなり。老いて頭白きなど



任之意也。職原抄(除目には縣召除目(地方官の除目)・司召除目(京官の除目)・臨時除目の三種が行はれた。

○三月三日―重三上巳の佳節、曲水の宴行はる。

○櫻の直衣―春三月の服。表白、裏紫又は赤などの直衣である。

○祭―賀茂祭、四月第二の酉の日に行はれた。

○青朽葉―表は經半緯黄の織物で、

が、人にとかくあないひ、女房の局によりて、おのが身のかしきよしなど、心をやりて説き聞かするを、若き人々は、まねをし笑へど、いかでか知らむ。よきに奏し給へ、啓し給へ」などいひても、得たるはよし、得ずなりぬること、いとあはれなれ。

三月三日は、うらくとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる、柳などいとをかしきこそ更なれ。それもまだまゆに籠りたるこそをかしけれ。ひろごりたるは憎し。花も散りたるのちは、うたてぞ見ゆる。おもしらく咲きたる櫻を長く折りて、大きな花瓶に挿したるこそをかしけれ。櫻の直衣に出桂してまらうどにもあれ、御せうとの君達にもあれ、そこ近くゐて、ものなどうちいひたる、いとをかし。そのわたりに、鳥蟲のひたひつき、いとうつくしうて飛びありく、いとをかし。

祭の頃は、いみじうをかし。木々のこの葉、まだ繁うはなうて、若やかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空のけしきの、何となくそとろにをかしきに、すこし曇りたる夕つかた、よるなど、忍びたる時鳥の、遠うそら耳かと覺ゆるまで、たど／＼しきを聞きつけたらむ、なに心地かはせむ。祭近くなりて、青朽葉、二藍などのもの

裏は青を用ひる。○二藍―藍と紅とで染める間色、今の薄紫の染色。織物とすれば經紅、緯藍である。○末濃―裾を濃く上に次第に薄く染めたもの。○村濃―濃淡を交へて斑に染めたもの。○巻染―巻きたる織物を細き絹を以てく／＼り、何色にても染めなしたるもの。

○ぢやうざ―定者、法會の時の役僧。

○験者―験者、所謂山伏のことである。○御嶽―大和國吉野の金峯山をいふ。○熊野―紀伊國東

どもあしまきつゝ、細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて、行きちがひもてありくこそをかしけれ。末濃、村濃、巻染など、常よりもをかしう見ゆ。わらはべの頭ばかり洗ひつくるひて、なりは皆なえ綻び、うち亂れかゝりたるもあるが、けいし、履などの「緒すげさせ、裏をさせ」などもて騒ぎ、いつしかその日にならむと、急ぎ走りありくもをかし。あやしう跳りてありく者どもの、さうぞきたてつれば、いみじく、ぢやうざといふ法師などのやうに、練りさまよふこそをかしけれ。ほど／＼につけて、親、をばの女、姉などの、供しつくるひありくもをかし。

「思はむ子を法師に」 思はむ子を法師になしたらむこそは、いと心苦しけれ。さるは、いと頼もしき業を、たゞ木の端などのやうに思ひたらむこそ、いといとほしけれ。精進物のいとあしきを食ひ、寝ぬるをも。若きは物もゆかしからむ。女などのある所をも、などか忌みたるやうに、さし覗かずもあらむ。それをも安からずいふ。まして験者などの方は、いと苦しげなり。御嶽、熊野、かゝらぬ山なくありくほどに恐ろしき目も見、しるしある聞え出できぬれば、こゝかしこに呼ばれ、時めくに



つけて、安げもなし。いたく煩ふ人にかゝりて、物の怪てうずるも、いと苦しければ、こうじてうちねぶれば、「ねぶりなどのみして」と咎むるも、いと所せく、いかに思はむと。これは昔の事なり。今やうは安げなり。

〔すさまじきもの〕 すさまじきもの、晝吠ゆる犬。春の綱代。三四月の紅梅の衣。

○春の綱代―「山城國、近江國、水魚綱代各一處、其水魚、始九月迄十二月三十日、貢之。」(延喜式)

○紅梅の衣―十一月より二月までの服。表紅、裏紫の袷。

○方違―陰陽道の説で他行の時その方向に金神・天神・太白神等が居り方塞なる時、前夜の方向に行き一泊して翌日その神の居る方向を避けて行くをいふ。

「すさまじきもの」すさまじきもの、晝吠ゆる犬。春の綱代。三四月の紅梅の衣。乳兒のなくなりたる産屋。火おこさぬ火桶、炭櫃。牛にくみたる牛飼。博士のうち續きによろ子生ませたる。方違に往きたるにあるじせぬ所。まして節分はすさまじ。ひとの國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそは思ふらめ。されどそれは、ゆかしきことをも書き集め、世にある事を聞けばよし。人の許に、わざと清げに書き立てて遣りつる文の、返りごと見む、今は來ぬらむかし、怪しく遅きと待つほどに、ありつる文の結びたるも、立文も、いときたなげに持ちなしふくだめて。うへに引きたりつる墨さへ消えたるを、「おはしまさざりけり」とも、も少しは「物忌とて取り入れず」などいひて、もて歸りたる、いとわびしくすさまじ。又、必ずくべき人の許に車をやりて待つに、入りくる音すれば、「さななり」と、人々出でて見るに、

車宿くるまやどりに入りて、轆ながえほうとうちおろすを、「いかなるぞ」と問へば、「今日はおはしまさず」、「渡り給はず」とて、牛のかぎりひき出でいぬる。又、家ゆすりて取りたる壻うぶの來ずなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の宮仕するがり遣りて、いつしかと思ふも、いとほいなし。乳兒の乳母の、只あからさまとて去ぬるを、もとむれば、とかく遊ばし慰めて、「とくこ」といひやりたるに、「今宵はえ參るまじ」とて、返しおこせたる、すさまじきのみにもあらず、憎さわりなし。(中略)

待つ人ある所に、夜すこし更けて、忍びやかに門を叩けば、胸すこし潰れて、人出だして問はするに、あらぬよしなき者の、名告してきたるこそ、すさまじといふ中にも、返す／＼すさまじけれ。驗者の物のけ調ずとて、いみじうしたり顔に、獨鈷ごごや珠數すずなど持たせて、せみ聲にしぼり出だし讀みわたれど、いさゝか去りげもなく、護法ごほふも付かねば、集りて念じ居たる男も女も怪しと思ふに、時の換るまで讀み困じて、「更に付かず。起ちね」とて、珠數取り返して、あれと、「驗なしや」とうちいひて、額よりかみざまに、頭さぐりあげて、欠伸あぐびをおのれうちして、寄り臥しぬる。

○獨鈷―金剛杵。印度の武器であつたが、惡魔調伏の修法の具として用ひらる。  
○護法―護法童子の略。佛法守護のため驗者に使役せらるゝ童形の鬼神。



除目につかさ得ぬ人の家。今年はずと聞きて、はやうありし者どもの、ほかほか  
 なりつる、片田舎に住む者共など、皆集まりきて、出で入る車の轆もひまなく見え、  
 物詣する供にも、我も我もと参り仕うまつり、物食ひ酒飲みのしりあへるに、は  
 つる曉まで、門叩く音もせず。怪しなど耳立てて聞けば、前おふ聲して、上達部な  
 ど、皆出で給ふ。物聞きに、宵より寒がりわななき居りつる下衆をのこなど、いと  
 物憂げに歩みくるを、をる者どもは、問ひだにもえ問はず。とよりきたる者どもな  
 どぞ「殿は何にかならせ給へる」など問ふ。いらへには、「何の前司にこそは」と、必  
 ずいらふる。誠に頼みける者は、いみじう歎かしの思ひたり。つとめてになりて、  
 隙なく居りつる者も、やうやう一人二人づつすべり出でぬ。舊き者の、さもえ行き  
 離るまじきは、來年の國々を、手を折りて數へなどして、ゆるぎありきたるも、い  
 みじういとほしう、すさまじげなり。

よろしう詠みたりと思ふ歌を、人の許に遣りたるに、返しせぬ。懸想文はいかゞは  
 せむ。それだに、折をかしうなどある、返事せぬは心劣りす。又、騒がしう時めか  
 しき處に、うち舊めきたる人の、おのがつれづれといとまあるまゝに、昔覺えて、  
 ことなる事なき歌詠みしておこせたる。物の折の扇、いみじと思ひて、心ありと知  
 りたる人にいひつけたるに、その日になりて、思はずなる繪など描きて得たる。産  
 養馬の驢などの使に、祿など取らせぬ。はかなき藥玉、卵槌などもてありく者  
 などにも、なほ必ず取らすべし。思ひかけぬことに得たるをば、いと興ありと思ふ  
 べし。これはさるべき使どと、心ときめきしてきたるに、たゝなるは、誠にすさま  
 じきぞかし。壻とりて、四五年まで、産屋の騒せぬ所。大人なる子どもあまた、よ  
 うせずは、うまごなども這ひありきぬべき人の親どちの晝寝したる。傍なる子ども  
 の心地にも、親の晝寝したるは、より所なくすさまじくぞあるべき。寝起きてあぶ  
 る湯は、腹立たしくさへこそ覺ゆれ。しはすのつごもりの長雨「ひと日ばかりの精  
 進のげたい」とやいふべからむ。八月の白がさね。乳あへずなりぬる乳母。

○産養—出産後七  
 日まで親族より衣  
 裳・襪・屯食等  
 贈られたるに對し  
 産婦の家にてその  
 人々を招きて祝宴  
 を開くをいふ。  
 ○藥玉—辟香・沈  
 香等を錦の袋に入  
 れ、菖蒲・艾を結  
 び五彩の色糸を飾  
 り下げたる物。  
 ○卵槌—桃の木を  
 長さ三寸幅一寸の  
 角に切りたるもの  
 に五色の粗糸を下  
 げ飾りたる物。正  
 月卯の日の祝に用  
 ぶ。  
 ○げたい—懈怠の  
 字音。  
 ○白がさね—白き  
 下襲である。四月・  
 十月の更衣の外は  
 夏のみ用ひる。  
 ○時鳥の蔭に—  
 「鳴く聲をえやは

「木の花は」 木の花は梅。濃くも薄くも紅梅。櫻の花びら大きに、葉色濃きが、枝  
 細くて咲きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし。卵の花は、  
 品劣りて何となけれど、咲く頃のをかしう、時鳥の蔭に隠るらむと思ふに、いとを



しのばぬ時鳥はつ  
うの花の蔭にかく  
れて。(人丸一新  
古今集)  
○紫野—京一條以  
北の野。

○黄金の玉—「枝  
繁—金鈴—春雨後。  
花—紫雲—凱風  
律。(具平親王詩)  
○時鳥のよすが—  
「五月山はな橋に  
時鳥かくろふ時に  
あへる君かも。」  
(萬葉集)「けさ來  
鳴きいまだ旅なる  
時鳥花橋に宿はか  
らなむ。」(古今集)

○梨花一枝云々—  
「玉容寂寞淚闌干。  
梨花一枝春帶雨。」  
(長恨歌)  
○ことごとしき名  
つきたる鳥—鳳凰  
をいふ。

かし。祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色のうへに白き單ひさへがさね襲かづきたる、青朽葉あやぐらばなどに通ひて、いとをかし。四月うづきのつごもり、五月さつきついたちなどの頃ほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より、實の黄金の玉と見えて、いみじく際やかに見えたるなど、朝霧に濡れたる櫻にも劣らず。時鳥のよすがとさへ思へばにや、なほ更にいふべきにもあらず。梨の花、世にすさまじくあやしき物にして、目に近く、はかなき文付けなどだにせず。愛敬あいぎやう後れたる人の顔など見ては、たとひにいふも、げにその色よりしてあいなく見ゆるを、唐土からうこに限なき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらむとて、せめて見れば、花びらの端はしに、をかしき匂こそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃、帝の御使みろかひにあひて、泣きける顔に似せて、「梨花一枝春の雨を帯びたり」などいひたるは、おぼろげならじと思ふに、なほいみじうめでたき事は、儔たぐひあらしと覺えたり。桐の花、紫に咲きたるは、なほをかしきを、葉のひろごりさまうたてあれど、また異木ことぎどもと、ひとしういふべきにあらず。唐土からうこにことごとし

き名つきたる鳥の、これにしも栖すまむらむ、心ことなり。まして琴ことに造りて、さまざまなる音の出でくるなど、をかしとは、世のつねにいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。木のさまぞ憎げなれど、棟あふちの花いとをかし。かれ花に様ことに咲きて、必ず五月五日さつきいつかにあふもをかし。

○あまづら—甘葛  
煎のこと。  
○かなまり—金  
碗。  
○すゐさう—水晶  
の字音。

「あてなるもの」あてなるもの、薄色うすいろに白襲がさねの汗衫かきみ。かりのこ。削氷けつりひのあまづらに入りて、新しきかなまりに入りたる。すゐさうの珠數。藤の花。梅の花に雪の降りたる。いみじう美しき乳兒ちちごの覆盆子いちご食ひたる。

○蟋蟀—今のこほ  
ろぎである。「秋  
風にほころびぬら  
し藤袴衣ふすまさせてふ  
きりくす鳴く。」  
(古今集)  
○われから—海藻  
につける小蟲。戀  
ひわびぬ蟹かにのかる  
藻もに宿るてふわれ

「蟲は」蟲は鈴蟲。松蟲。促織はたおり。蟋蟀きりぐす。蝶。われから。ひを蟲。螢。蓑蟲。いとあはれなり。鬼の生みければ、親に似て、これも恐ろしき心あらむとて、親の悪しき衣きぬひき着せて、「いま秋風吹かむ折にぞこむずる。待てよ」といひて、逃げて去いにけるも知らず。風の音聞き知りて八月はつきばかりになれば、ちよちよとはかなげに鳴く、いみじうあはれなり。蝸ひぐらし。ぬかづき蟲、またあはれなり。さる心に道心起して、



から身をも碎きつ  
るかな。(伊勢物  
語)  
○ひを蟲—朝生れ  
夕に死ぬといはれ  
る小蟲。  
○ぬかづき蟲—米  
つき蟲のこと。

突きありくらむ。又思ひかけず、暗き所などにほとめきたる、聞きつけたるこそを  
かしかれ。蠅こそ憎き物のうちに入れつべけれ。愛敬なく憎きものは、人々しう書  
き出づべきもののやうにあらねど、よろづの物にゐ、顔などに濡れたる足して居た  
るなどよ。人の名に付きたるは、いと疎まし。夏蟲、いとをかしく、らうたげな  
り。火近う取り寄せて、物語など見るに、草子のうへなどに飛びありく、いとをか  
し。蟻は憎けれど、かるびいみじうて、水の上などを、たゞ歩みありくこそをか  
しけれ。

○頭の辨—藏人頭  
にして太政官の辨  
官を兼ねたる人。  
こゝでは藤原行成  
を指す。

「頭の辨の」頭の辨の職に參り給ひて、物語などし給ふに、夜いと更けぬ。あす御  
物忌なるに籠るべければ、丑になりなば悪しかりなむ」とて參り給ひぬ。つとめて、  
藏人所の紙屋紙引き重ねて、「後のあしたは残り多かる心地なむする。夜をとほし  
て、昔物語も聞え明さむとせしを、鶏の聲に催されて」と、いみじう清げに、うら  
うへに事多く書き給へる、いとめでたし。御返事に、「いと夜深く侍りける鶏の聲は、  
孟嘗君のにや」と聞えたれば、立ち返り、「孟嘗君の鶏は、函谷關を開きて、三千の

○孟嘗君—春秋の  
世の齊の公族田文

のこと。(史記孟嘗  
君傳)

○函谷關—河南府  
靈寶縣。

○孟嘗君の鶏—  
「秦昭王、囚孟嘗  
君、謀欲殺之。(中  
略)孟嘗君至關。  
關法鶏鳴而出客。  
孟嘗君恐、追至、客  
之居、下坐、客有  
能爲鶏鳴、而鶏盡  
鳴、遂發傳出。」  
(史記)

○逢坂は—「相阪  
是古昔之舊關也。  
時爲聖運、不閉  
門鍵。出入無禁、  
年代久矣。」(文德  
實錄)  
○僧都の君—中宮  
定子の御弟隆圓の  
こと。

容わづかに去れり」とあれども、これは逢坂の關の事なり」とあれば、

「夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふ坂の關はゆるさじ

心かしこき關守待るめり」と聞ゆ。立ち返り、

「逢坂は人こえやすき關なれば鳥も鳴かねどあけて待つとか」

とありし文どもを、はじめのは、僧都の君の額をさへ衝きて取り給ひてき。のちの  
ちのは御前に。

さて、「逢坂の歌は詠みへされて、返しもせずなりにたる、いとわろし」と笑はせ給  
ふ。「さてその文は、殿上人皆見てしは」と宣へば、「まことに思しけりとは、これに  
てこそ知りぬれ。めでたき事など、人のいひ傳へぬは、かひなき業ぞかし。又、見  
苦しければ、御文はいみじく隠して、人につゆ見せ侍らず。志の程を比ぶるに、等  
しうこそは」といへば、「かう物思ひ知りていふが、なほ人々には似ず思ゆる。『思ひ  
限なく悪しうしたり』など、例の女のやうにいはむとこそ思ひつるに」とて、いみ  
じう笑ひ給ふ。「こはなぞ、よろこびをこそ聞えぬ」などいふ。「まろが文を隠し給ひ  
ける、又、なほ嬉しきことなり。いかに心憂くつらからまし。今よりもなほ頼み聞



○經房の中將—西宮左大臣源高明の四男、治安三年歿。年五十五。

えむ」など宣ひて後に、經房の中將「頭の辨はいみじう譽め給ふとは知りたりや。一日の文のついでに、ありし事など語り給ふ。思ふ人々の譽めらるゝは、いみじく嬉しく」など、まめやかに宣ふもをかし。「嬉しき事も二つにてこそ。かの譽め給ふなるに、また思ふ人の中に侍りけるを」などいへば、「それは珍しう、今の事のやうにも喜び給ふかな」と宣ふ。

○香爐峯の雪は—「遺愛寺鐘敬枕聽。香爐峯雪撥簾看。」(白氏文集)

「雪いと高く降りたるを」雪いと高く降りたるを、例ならず御格子參らせて、炭櫃に火おこして、物語などして集り侍ふに、「少納言よ。香爐峯の雪はいかならむ」と仰せられければ、御格子上げさせて、御簾高く巻き上げたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそ寄らざりつれ。「なほこの宮の人には、さるべきなめり」といふ。

「物暗うなりて」物暗うなりて、文字も書かれずなりたり。筆も使ひはてて、これを書き果てばや。この草紙は、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすると思ひて、

○内の大臣—中宮定子の御兄藤原伊周。

つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなく、人の爲便なきいひ過ぐしなどしつべき所々もあれば、ようかくしたりと思ふを、心より外ほかにこそ漏り出でにけれ。宮の御前に内の大臣の獻り給へりし御草子を、「これに何を書かまし。上の御前には、史記といふ文を書かせ給へる」など宣はせしを、「枕にこそはし侍らめ」と申ししかば、「さば得よ」とて賜はせたりしを、怪しきを、故事や何やと、盡させず多かる紙の數を書き盡さむとせしに、いと物覺えぬことぞ多かるや。大方これは、世の中のをかしき事、人のめでたしなど思ふべき事、なほえり出でて、歌などをも、木、草、鳥、蟲をもいひ出だしたらばこそ、「思ふ程よりはわろし。心見つなり」とも譏られめ。只心一つに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人並々なるべき耳をも聞くべきものかと思ひしに、「はづかし」なども、見る人は宣ふなれば、いと目安くぞあるや。げにそれもことわり、人のにくむをも善しといひ、譽むるをも悪しといふは、心の程こそあし量らるれ。只人に見えけむぞねたきや。



○左中将―左近衛  
中將源經房をい  
ふ。

〔左中将のいまだ〕左中将のいまだ伊勢守と聞えし時、里におはしたりしに、はし  
の方なりし疊をさし出でしかば、この草子も乗りて出でにけり。惑ひ取り入れしか  
ども。やがてもておはして、いと久しくありてぞ返りにし。それよりありき初めた  
るなめりとぞ。

第三篇 近古 鎌倉室町時代



### 平家物語

#### 〔祇園精舎〕

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、是等は皆舊主先皇の政にもしたがはず、たのしみをきはめ、諫をおもひいれず、天下のみだれむ事をさとらずして、民間の愁る所をしらざりしかば、久しからずして亡じし者ども也。近く本朝をうかがふに承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信賴、此等はおごれる心もたけき事も皆とりどりにこそありしかども、まぢかくは六波羅の入道、前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、傳へうけたまはるこそ心も詞も及ばれぬ。

其先祖を尋ねれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王九代の後胤讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛の朝臣の嫡男なり。彼親王の御子、高視王無官無位にして、う

○祇園精舎—祇樹給孤獨園精舎の略。中天竺舍衛國にあつた釋迦說法の精舎。  
○諸行無常の響—「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂。祇園者無常堂四角有頰梨鐘、鐘音中亦說此偈、病僧聞之、苦惱即除、得清凉樂、如入三禪、乘三淨土。」(往生要集)  
○娑羅雙樹—娑羅は梵語。高遠又は堅固と譯す。その樹高くして榭に類す。釋迦跋提河邊の娑羅林下にて涅槃に入る。  
○盛者必衰—「盛者必衰、實者必虛、

せ給ひぬ。其御子高望の王の時始めて平の姓を給て、上總介になり給しより、忽に王氏を出て人臣につらなる。其子鎮守府將軍義茂後には國香とあらたむ。國香より正盛に至る迄、六代は諸國の受領たりしかども、殿上の仙籍をばいまだゆるされず。

#### 〔體〕

しかるを忠盛備前守たりし時、鳥羽院の御願得長壽院を造進して三十三間の御堂をたて、一千一體の御佛をすゑ奉る。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には國國を給ふべき由仰下されける。境節但馬國のあきたりけるを給にけり。上皇御感のあまりに内の昇殿をゆるさる。忠盛三十六にて始て昇殿す。(以上殿上圖討)其子ともは諸衛の佐になり、昇殿せしに殿上のまじはりを人さらふに及ばず。其比、忠盛、備前國より都へのぼりたりけるに、鳥羽院「明石浦はいかに」と御尋ありければ、

あり明の月もあかしのうら風に浪ばかりこそよると見えしかと申たりければ、御感ありけり。この歌は金葉集にぞ入られける。

忠盛又仙洞に最愛の女房をもてかよはれけるが、ある時、女房のつぼねに、つまに

衆生盡々、都如幻居。(仁王經)  
○おごれる人も云—「朝開榮華、暮隨無常之風、宵翫明月、曙隱別離之雲。一生是風前之燭、萬事皆春夜夢。」(往生講式)  
○秦の趙高・漢の王莽・梁の周伊(朱異)・唐の祿山(安祿山)—それら交那古代に於ける奸臣である。  
○其先祖を云々—桓武天皇—葛原親王—高見王—高望(賜平姓)—國香—貞盛—維衡—正度—正衡—正盛—忠盛—清盛—重盛。  
○得長壽院—「天承元年三月十三日太上天皇御願得長壽院、三十三間御堂、一千一體觀音十一面像、供養。」(帝王編年記)  
○金葉集—十卷、



源俊賴撰、大治二年奏覽。

月出したる扇をわすれて出られたりければ、かたへの女房たち「是はいづくよりの月影ぞや。出どころおぼつかなし」などわらひあはれければ、彼女房、

雲井よりたゞもりきたる月なればおぼろげにてはいはじとぞ思ふ

とよみたりければ、いとゞあさからずおもはれける。薩摩守忠度の母、是なり。

にるを友とかやの風情に忠盛もすいたりければ、かの女房も優なりけり。かくて忠

盛刑部卿になて、仁平三年正月十五日歳五十八にてうせにき。清盛嫡男たるによて

その迹をつぐ。

保元々年七月に宇治の左府代をみだり給し時、安藝守とて御方にて勳功ありしかば、

播摩守にうつて同三年太宰大貳になる。次に平治元年十二月、信賴卿が謀反の時、

御方にて賊徒をうちたひらげ、勳功一にあらす、恩賞はおもかるべしとて、次の年

正三位に敍せられ、うちつゞき、宰相、衛府督、檢非違使別當、中納言、大納言に

歴あがつて剩へ丞相の位にいたり、左右を歴ずして内大臣より太政大臣從一位に

あがる。大將にあらね共、兵仗をたまはて隨身をめし具す。牛車輦車の宣旨を蒙

てのりながら宮中に入出す。偏に執政の臣のごとし。太政大臣は一人の師範として

○宇治の左府—左大臣藤原頼長、忠實の子、崇徳院を擁して兵を擧げ誅に伏す。  
○信賴卿—藤原信賴、忠隆の子、義朝と共に反を謀りて誅せらる。

○一人—凡自稱天子曰予一人。(禮記)

○昔、周の武王の船—「武王渡河、中流白魚躍入三舟中、武王俯取以祭。」(史記周本紀)

四海に儀刑せり。國を治め、道を論じ、陰陽をやはらげをさむ。其人にあらすば則ち闕けよ」といへり。されば則闕の官とも名付たり。其人ならではけがすべき官ならねども、一天四海を掌の内のにぎられしうへは子細に及ばず。平家かやうに繁昌せられけるも熊野權現の御利生とぞきこえし。其故は、古へ清盛公、いまだ安藝守たりし時、伊勢の海より船にて熊野へまゐられけるに、大きな鱸の船におどり入りけるを、先達申けるは、「是は權現の御利生なり。いそぎまゐるべし」と申ければ、清盛のたまひけるは、「昔、周の武王の船にこそ白魚は躍入たりけるなれ。是吉事なり」とて、さばかり一戒をたもちて、精進潔齋の道なれども、調味して家の子、侍どもにくはせられけり。其故にや吉事のみうちつゞいて太政大臣まできはめ給へり。子孫の官途も龍の雲に上るよりは猶すみやかなり。九代の先蹤をこえ給ふこそ目出けれ。

〔祇王〕 入道相國、一天四海をたなごころのうちのにぎりたまひし間、世のそしりをもはばからず、人の嘲りをもかへり見ず、不思議の事をのみし給へり。たとへば



其比都そのひとに聞えたる白拍子しらびやうしの上手、祇王祇女おとせむすめとして兄弟あり、とちといふ白拍子が娘なり。姉の祇王を入道相國最愛せられければ、是によつて妹の祇女をも世の人もてなす事なのめならず。母とちにもよき屋つくつてとらせ、毎月百石百貫まいぐわつひゃくくわんをおくられば、家内富貴けないふつきしてたのしい事なのめならず。

抑おさへ我朝わがてうに白拍子のはじまりける事は、昔鳥羽院の御宇ぎやうに鳥の千歳和歌の前とてこれら二人がまひいだしたりけるなり。始めは水干すみかんに立烏帽子たてゑぼし、白鞘卷しらさやまきをさいて、舞ひければ、男舞おとこまひとぞ申ける。然るを中比より烏帽子、刀をのけられ、水干ばかりをもちゐたり。さてこそ白拍子とは名付なづけけれ。京中の白拍子ども祇王が幸さいはひの目出度めでたきやうをさいてうらやむ者もあり、そねむ者もありけり。羨む者共は「あなめでたの祇王御前ぎぜんが幸や。おなじあそび女めとならば、誰もみなあの様でこそありたけれ。いかさま是は祇ぎといふ文字もじを名についてかくはめでたきやらん。いざ我等もついで見む」とて或は祇一と付き、祇二と付き、或は祇福祇徳などいふ者も有けり。そねむ者どもは「なん條名ぢょうなにより、文字にはよるべき。幸はたゞ前世の生れつきにこそあんなれ」とてつかぬ者もおほかりけり。

かくて三年と申に又都にきこえたる白拍子の上手一人出来たり。加賀國のものなり。名をば佛とぞ申ける。年十六とぞきこえし。昔よりおほくの白拍子ありしかども、かゝる舞はいまだ見ず」とて京中の上下もてなす事なのめならず。佛御前申けるは「我天下に聞えたれども、當時たうじさしもめでたうさかえさせ給ふ、平家太政の入道殿へめされぬ事こそ本意ほんいなけれ。あそびもののならひ、なにかはくるしかるべき。推參すゐさんして見む」とて、ある時西八條へぞまゐりたる。人まゐつて「當時都にきこえ候佛御前こそまゐつて候へ」と申しければ、入道「なんでうさやうのあそびものは人の召めしに隨したがつてこそ參れ。左右さうなう推參する様やうもある。祇王があらん處へは神ともいへ、佛ともいへ、かなふまじきぞ。とう／＼罷出まかりいでよ」とぞの給ひける。佛御前はすげなういはれたてまつて、已すでにいでんとしけるを、祇王、入道殿に申けるは「あそび者の推參は常の習でこそ候へ。其上年もいまだをさなう候ふなるが、たま／＼思たつてまゐりて候をすげなう仰られてかへさせ給はん事こそ不便ふびんなれ。いかばかりはづかしうかたはらいたくも候ふらむ。わがたてし道なれば、人の上うへともおぼえず。たとひ舞を御覽じ、歌をきこしめさずとも御對面ばかりさぶらうてかへさせ給ひた



らば、ありがたき御情なまけでこそ候はんずれ。たゞ理をまげて、めしかへして御對面さぶらへ」と申ければ、入道、「いで、我御前わがごぜがあまりにいふ事なれば見參けんざんしてかへさむ」とてつかひを立てぞめされける。佛御前はすげなういはれたてまつつて車に乗て既にいでんとしけるがめされて歸參りたり。入道出あひ對面して、「今日の見參はあるまじかりつるを祇王が何と思ふやらん、餘りに申しすゝむる間、か様に見參しつ。見參する程にてはいかで聲をきかであるべきぞ。今様いまやう一つうたへかし」とのたまへば佛御前「承りさぶらふ」とて今様一つぞ歌うたる。

君をはじめて見るをりは、

千代も歴ぬべし姫小松、

御前おまへの池なる龜岡に、

鶴こそ群れ居て遊ぶめれ。

とおし返し／＼三返歌さんべんうたひすましたりければ、見聞の人々みな耳目をおどろかす。入道もおもしろげに思ひ給ひて、「我御前は今様は上手でありけるよ。此定このぢやうでは舞も定めてよかるらん。一番見ばや、鼓打つづみうちめせ。」とてめされけり。うたせて一番舞まふたりけり。

○一樹の陰云々―  
「或處ニ一村ニ宿ニ一  
樹下ニ汲ニ一河流ニ一  
一夜同宿、(中略)  
輕重有レ異、親疎  
有レ別、皆是先世結  
縁。(説法明眼論)

佛御前は髮姿よりはじめてみめ形うつくしく聲よく節も上手でありければ、なじかは舞もそんずべき。心も及ばず舞すましたりければ、入道相國舞にめで給ひて佛に心をうつされけり。佛御前「こはされば何事さぶらふぞや。もとよりわらはは、推參の者にていだされまゐらせさぶらひしを、祇王御前の申狀まをしじやうによつてこそ召返めしかへされても候に、加様にめしおかれなば、祇王御前の思ひ給はん心のうちはづかしうさぶらふ。はや／＼暇いさまをたうで出させおはしませ」と申ければ、入道、「すべて其儀そのぎあるまじ。但祇王があるをはゝかるか。其儀ならば祇王をこそいださめ」と宣のたまひける。佛御前「それ又いかでかざる御事候べき。諸共にめしおかれんだに心うう候ふべし。おのづから後までわすれぬ御事ならば、めされて又は參るとも、今日は暇を給らむ」とぞ申ける。入道「なんでう其儀あるべき。祇王とう／＼罷出まひだでよ」と御使つかひかさねて三度までこそ立てられけれ。祇王もとよりおもひ設けたる道なれども、さすがに昨日今日きのふけふとは思よらず。いそぎ出べき由頻しきりにのたまふ間、はき拭ぬぐひ、塵ちりひろはせ、見苦しき物共とりしたためて出づべきにこそ定まりけれ。一樹の陰に宿り合ひ、同じ流をむすぶだに、別わかはかなしき習ぞかし。まして此三年が問住なれし處なれば、



名残もをしう悲しくて、かひなき涙ぞこぼれける。さてもあるべき事ならねば、祇王すでに、今はかうと、出けるが、なからん跡の忘れ形見にもとや思ひけむ。障子しやうじになくく一首の歌をぞかきつけける。

萌出もえいづるも枯るゝも同じ野邊の草何れか秋にあはではつべき

さて車に乗て宿所しゆくしょに歸り、障子の内に倒れ臥し、唯泣くより外の事ぞなき。母や妹是を見て「如何にやいかに」ととひけれども、とかくの返事にも及ばず。具ぐしたる女に尋ねてぞさる事ありともしりてける。さる程に毎月を送られつる百石百貫をも今はとゞめられて、佛御前がゆかりの者共ぞ、始めて樂み榮えける。京中の上下、「祇王こそ入道殿よりいとま給はつて出でたんなれ。いざ見參して、遊ばむ」とて、或は文をつかはす人もあり、或は使を立つる者もあり。祇王さればとて今更人に對面してあそびたはぶるべきにもあらねば、文を取入るゝ事もなく、まして使にあひしらふ迄もなかりけり。是につけても悲しくていと涙にのみぞしづみにける。かくて今年も暮れぬ。あくる春の比、入道相國、祇王が許へ使者を立てて、「いかに其後何事かある。佛御前があまりにつれくげに見ゆるに、まゐつて今様をもうたひ、舞

などをも舞て佛なぐさめよ」とぞ宣ひける。祇王とかうの御返事にも及ばず、入道「など祇王は返事はせぬぞ。參るまじいか。參るまじくば、其様に申せ。淨海じやうかいもはからふ旨あり」とぞ宣ひける。母とち是を聞くにかなしくて、いかなるべしともおぼえず。なくく教訓しけるは、「いかに祇王御前、ともかくも御返事を申せかし。さやうにしかられ參らせんよりは」といへば、祇王「參らんとおもふ道ならばこそやがて參るとも申さめ。參らざらんもの故に何と御返事を申すべしともおぼえず。此度めさんに參らざればはからふ旨ありと仰せらるゝは、都の外へ出さるゝか、さらずば命を召さるゝか、是二つによも過ぎじ。縦都たんどを出さるゝとも、歎くべきにあらず。たとひ命を召さるゝとも惜をしかるべき又わが身かは。一度憂きものに思はれ參らせて、二度面をむかふべきにもあらず」とて、なほ御返事をも申さざりけるを、母とち重ねて教訓しけるは、「天が下に住ん程はともかうも入道殿の仰をば背くまじき事にてあるぞ。男女なんによの縁宿世えんしよ今にはじめぬ事ぞかし。千年萬年と契れども、懸て離るゝ中もあり。白地あからさまとは思へども、ながらへ果る事もあり。世に定なきものは男女なんによの習ななり。それに我御前は此三年まで思はれまゐらせたれば、ありがたき御情なまじけでこそあれ。



めさんに參らねばとて命をうしなはるゝまではよもあらし。唯都の外へぞ出されん  
ずらん。縦たじひ都を出さるとも我御前たちは年若ければ、如何ならん岩木のはさまに  
ても過さん事安かるべし。年老い衰へたる母都の外へぞ出されんずらん。習はぬ旅  
の住居すまひこそかねて思ふも悲しけれ。唯我を都の内にて住果すみはてさせよ。其ぞ今生こんじやうごしやう後生の  
孝養けうやうと思はむずる」といへば、祇王うしと思し道なれども親の命を背かじと、なく  
なく又出立ける心の中こそ無慚むざんなれ。一人ひとり參らむはあまりにものうしとて妹の祇女  
をも相具しけり。其外白拍子二人、惣そうじて四人一車ひとつくろまに取乗て、西八條へぞ參たる。  
さきく召されける處へはいれられずして、遙はるかに下りたる處に座敷ざしきしつらうて置か  
れたり。祇王「こは、されば、何事ぞや、我身に過あやまつ事は無けれども、すてられた  
てまつるだにあるに、座敷をさへ下げらるゝ事の心うさよ。いかにせむ」と思ふに、  
知らせじと押ふる袖のひまよりも餘りて涙ぞこぼれける。佛御前是を見て、あまり  
にあはれに思ければ「あれはいかに、日頃召されぬ所にも候はばこそ。是へ召さ  
れ候へかし。さらずばわらはに暇を給たまべ。出でて見參せん」と申ければ、入道「す  
べて其儀あるまじ」と宣ふ間、力及ばで出でざりけり。其後入道は祇王が心の内を

も知たまはず、「いかに其後何事かある。さては佛御前があまりにつれくげに見ゆ  
るに、今様一つ歌へかし」とのたまへば、祇王參る程では、ともかうも入道殿の仰  
をば背くまじと思ひければ、落る涙をおさへて、今様一つぞ歌うたる。

佛も昔は凡夫なり

我等も遂には佛なり

佛も佛性具せる身を

隔つるのみこそ悲しけれ

○佛も昔は「佛も昔は人なりき、われらも遂には佛なり、三身佛性具せる身と、知らざりけるこそあはれなれ。(梁塵秘抄) ○何も佛性具せる身「一切衆生悉有佛性。」(涅槃經)

と泣くく二返歌うたりければ、其座にいくらも並居なみみたまへる平家一門の公卿、殿上人、諸大夫、侍に至るまで皆感涙をぞ流されける。入道も面白げにおもひ給て「時にとつては神妙じんべうに申したり。さては舞も見たけれども、今日は紛まぎるゝ事いできたり。此後は召さずとも、常に參つて今様をも歌ひ、舞などをも舞て佛なくさめよ」とぞ宣ひける。祇王とかくの返事にも及ばず、涙を押へて出でにけり。

「親の命を背かじとつらき道におもひいて、二度、うき目を見つる事の心うさよ。かくて此世にあるならば、又憂き目をも見むずらん。今は只身を投んとおもふなり」といへば、妹の祇女も「姉身を投げば、われもともに身を投ん」といふ。母とぢ、是をきくに悲しくていかなるべしともおぼえず。泣々又教訓しけるは「誠に我



○五逆罪一殺父・害母・殺阿羅漢・破和合僧・出佛身血の五戒律を犯せる罪。  
 ○惡道一地獄道・餓鬼道・畜生道をいふ。

○嵯峨野一山城國葛野郡嵯峨村。

御前の恨むるもことわりなり。さやうの事あるべしとも知らずして教訓して參らせつる事の心うさよ。但し我御前身を投げば、妹もともに身を投げんといふ。二人の娘共に後れなん後、年老衰へたる母命いきてなにかはせむなれば、我もともに身を投げむとおもふなり。いまだ死期も來らぬ親に身を投げさせん事五逆罪にやあらんずらむ。此世は假の宿なり。慚ても慚ても何ならず。唯長き世の闇こそ心うけれ。今生でこそあらめ。後生でだに惡道へ趣かむずる事の悲しさよ。」とさめざめとかき口説ければ、祇王なみだをおさへて「げにもさやうにさぶらはと五逆罪疑なし。さらば自害は思ひ止まり候ひぬ。かくて都にあるならば、又うき目をも見むずらん。今は都の外へ出でん」とて祇王二十一にて尼になり、嵯峨野の奥なる山里に柴の庵をひきむすび念佛してこそ居たりけれ。妹の祇女も「姉身を投げば、我も共に身を投げんとこそ契りしか。まして世を厭はむに誰かは劣るべき」とて十九にて様をかへ、姉と一所に籠居て後世を願ふぞあはれなる。母とち是を見て若き娘どもだに様を替る世中に年老い衰へたる母白髪をつけて何にかはせむとて四十五にて髪を剃り、二人の娘諸共に一向專修に念佛して、ひとへに後世をぞ願ひける。

○天のと渡る一山の端のさくらえ壯子、天の原、と渡る光、見らくし好しも。（萬葉集）。「わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる船のかいのしづくか。」（古今集）  
 ○西方淨土一從是西方過十萬億佛土、有二世界。名曰極樂、其土有佛號阿彌陀、今現在說法。（阿彌陀經）

○彌陀の本願一彼佛光明無量、照十方國無所不照、是故號爲阿彌陀。（阿彌陀經）彌陀佛は四十八願を發して一切衆生を濟度し給ふ

かくて春過ぎ夏闌けぬ。秋の初風吹きぬれば、星合の空をながめつゝ、天のと渡る梶の葉に思ふ事かく比なれや。夕日の影の西の山の端に隠るゝを見ても、日の入給ふ所は西方淨土にてあんなり。いつか我等も彼處に生れて物を思はずぐさんずらんと、かゝるにつけても過ぎにし方の憂き事ども思ひ續けて、たゞ盡せぬ物は涙なり。黄昏時も過ぎぬれば、竹の編戸を閉ぢ塞ぎ、燈かすかにかきたてて、親子三人念佛して居たる處に、竹の編戸を、ほとくと打ちたく者出できたり。その時尼ども膽をけし、「あはれ、是はいひかひなき我等が念佛してゐたるを妨げんとて、魔縁のきたるにてぞあるらん。晝だにも人も問ひ來ぬ山里の柴の庵の内なれば、夜深て誰かは尋ぬべき。僅の竹の編戸なれば、あけずとも推破んこと安かるべし。なかなたゞあけていれんと思ふなり。それに情をかけずして、命を失ふものならば、年比頼みたてまつる彌陀の本願を強く信じて、ひまなく名號を唱へ奉るべし。聲を尋ねて迎へ給ふなる聖衆の來迎にてましますば、などか引接なかるべき、相構へて念佛念り給ふな」と、互に心をいまして、竹の編戸をあけたれば、魔縁にてはなかりけり、佛御前ぞ出できたる。祇王「あれはいかに、佛御前と見奉るは夢かや、



といふ。  
 ○聖衆の來迎—「念佛功積、運心年深之者、臨命終時、大喜自生。所以然者、彌陀如來、以本願故。與諸菩薩百千比丘衆、放大光明、皓然在目前。時大悲觀世音、申二百福莊嚴手、擊寶蓮臺、至行者前。大勢至菩薩與無量聖衆、同時讚歎、授手引接。」(往生要集)

○人身は受け難く云々—「人身難く受佛法難く遇。」(六道講式)  
 ○此度泥梨に云々—「墮泥梨、無出期。」(般舟讚)泥梨(梵語)又は捺落迦ともいひ、無去

うつしか」といひければ、佛御前涙をおさへて、「か様の事申せば事あたらしう候へども、申さずば、又思ひ知らぬ身ともなりぬべければ、始よりして申すなり。もとよりわらは推參の者にて、出され參らせ候ひしを、祇王御前の申狀によつてこそ、召し返されても候ふに、女のかひなきこと、我身を心に任せずして、おしとゞめられまゐらせし事心うさぶらひしが、いつぞや又めされまゐらせていまやうたひ給ひしにも思ひしられてこそさふらへ。いつか我身の上ならんと思へば、嬉しとは更におもはず。障子にまた、「いづれか秋にあはではつべき」と書置給ひし筆の跡、げにもと思ひさぶらひしぞや。その後は在所をいづくとも知りまゐらせざりつるに、かやうにさまを替へて、一處にと承はつて後は、あまりに羨しくて常は暇を申しかども、入道殿さらに御用ひまします。つくづく物を案ずるに、娑婆の榮花は夢の夢、樂み榮えて何かせん。人身は受け難く、佛教には遇ひ難し。此度泥梨に沈みては、多生曠劫をば隔つとも、浮み上らんこと難し。年の若きを憑むべきにあらず。老少不定のさかひ、出づる息の入るをも待つべからず、かげろふ稻妻よりも猶はかなし。一旦の樂に誇りて、後生を知らざらんことの悲しさに、今朝まぎれ出でて、かくな

處・無喜樂等と譯す。地獄の原名である。  
 ○老少不定のさかひ—南瞻部洲をいふ。北洲定千年、西東半半減。此洲壽不定。(俱舍論)出づる息の入るをも云々—「尼詠吟云、出息農入息麻多奴世中遠農土加仁君波思希留哉。」(往生要集)  
 ○かげろふ稻妻よ—「是身無常念念不往、猶如電光暴水幻炎。」(涅槃經)  
 ○一蓮の身—「往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處、生蓮華中寶座之上。」(法華經)

りてこそ參りたれ」とて、かつきたる衣を打ちのけたるを見れば、尼になつてぞ出できたる。かやうに様をかへて參りたれば、日比の科をば許し給へ、許さんと仰せられば、諸共に念佛して、一蓮の身とならん。それに猶心行かずば、是よりいづちへも迷ひ行き、如何ならん苦の席、松が根にも倒れ臥し、命あらんかぎり念佛して、往生の素懷を遂げんとおもふなり」とさめざめとかきくどきければ、祇王涙をおさへて、「誠にわごぜの是ほどに思ひ給けるとは、夢にだに知らず、憂き世の中のさかなれば、身の憂とこそおもふべきに、ともすればわごぜの事のみうらめしくて、往生の素懷を遂げん事かなふべしともおぼえず、今生も後生も、なまじひに仕損じたるこゝちにてありつるに、かやうにさまをかへておはしたれば、日比の咎は露塵ほども残らず、今は往生疑ひなし。此度素懷を遂げんこそ、何よりも又嬉しけれ。我等が尼になりしをこそ、世にためしなきことのやうに、人もいひ我身にも又思ひしが、それは世を恨みて成しかば、様を替るも理なり。今わごぜの出家にくらぶれば事の數にもあらざりけり。わごぜは恨もなし歎もなし。今年は纔に十七にこそなる人の、かやうに穢土を厭ひ、淨土を願はんと、深く思ひいれ給ふこそ、まことの大



○善知識「自修三菩提亦能教三人修三菩提」以是義故名善知識(涅槃經)  
 ○長講堂「正しくは法華長講阿彌陀三昧堂といふ。今下京區寺町五條下東側にあり」

道心とはおぼえたれ。嬉しかりける善知識かな。いざ諸共に願はん」とて四人一所に籠り居て、朝夕佛前に花香を供へ、餘念なく願ひければ、遅速こそありけれ、四人の尼共皆往生の素懷を遂けるとぞ聞えし。されば、後白河の法皇の長講堂の過去帳にも、祇王、祇女、佛、とち等が尊靈と四人一所に入れられけり。あはれなりし事どもなり。

○嘉應三年正月五日云々「此日有天皇(高倉)御元服事。御年十一。」(玉葉)  
 ○朝觀「天子の太上皇・太后の宮に行幸して拜し給ふをいふ」  
 ○妙音院の太政のおほいとの一藤原師長。

〔鹿谷〕 さる程に今歳も暮れぬ。明れば嘉應三年正月五日、主上御元服あり。同十三日朝觀の行幸ありけり。法皇、女院、待ち受け参らせさせ給て、初冠の御粧いかばかりらうたく思しめされけん。入道相國の御娘、女御に参らせ給ひけり。御年十五歳。法皇の御猶子の儀なり。其比妙音院の太政のおほいと、其時は未内大臣の左大將にてましましけるが、大將を辭し申させ給ふことありけり。時に徳大寺の大納言實定卿、その仁に當り給ふ由聞ゆ。又花山院の中納言兼雅卿も所望あり。その外、故中御門の藤中納言家成卿の三男、新大納言成親卿もひらに申されけり。院の御氣色よかりければ、様々の祈

○八幡「男山八幡即石清水八幡宮」  
 ○眞讀「文句丁寧ニ讀テ眞讀ト云。」(法然上人行狀書圖翼讀)  
 ○大般若「大般若若波羅蜜多經、六百卷、唐の玄奘三藏の譯」  
 ○甲良の大明神「高良大明神。男山八幡の末社、武内宿禰を祀る」  
 ○賀茂の上の社「愛宕郡上賀茂村御生山の麓にあり、賀茂別雷神を祀る」

をぞ始められける。先づ八幡に百人の僧を籠て、眞讀の大般若を七日讀ませられける最中に、甲良の大明神の御前なる橘の木に、男山の方より山鳩三つ飛來て、食ひ合ひてぞ死にける。鳩は八幡大菩薩の第一の仕者なり。宮寺にかゝる不思議なしとて、時の檢校匡清法印奏聞す。神祇官にして御占あり。天下の噪ぎと占申。「但し君の慎みにあらず、臣下のつゝしみ」とぞ申ける。新大納言是に恐れをも致されず、晝は人目の滋ければ、夜なく歩行にて、中御門烏丸の宿所より、賀茂の上の社へ七夜續けて参られけり。七夜に滿ずる夜、宿所に下向して、苦しさ、うちよし、ちと目睡給へる夢に、賀茂の上の社へ参りたると思しくて、御寶殿の御戸推開き、ゆゝしくけだかげなる御聲にて、

櫻花賀茂の川かぜうらむなよ散るをばえこそとゞめざりけれ

新大納言猶恐れをも致されず、賀茂の上の社に、ある聖を籠て、御寶殿の御後なる杉の洞に壇を立てて、拏吉尼の法を百日行はせられけるほどに、彼の大杉に雷落ちかゝり、雷火あびただしく燃え上て、宮中已に危く見えけるを、宮人ども多く走り集て、これを打消つ。かの外法行ひける聖を、追出せんとしければ、「我當社に百日

○拏吉尼の法「拏吉尼天を祭る眞言密教の外法」



參籠の大願あり。今日は七十五日になる。全く出まじ」とてはたらかず。此の由を社家より内裏へ奏聞しければ、「唯法に任せて追出せよ」と宣旨を下さる。その時神人白杖を以て、彼聖がうなじをしらせ、一條の大路より南へ追ひ出してけり。神は非禮をうけ給はずと申すに、この大納言、非分の大将を祈り申されければにや、かかる不思議も出で來にけり。

其比の叙位除目と申は、院内の御はからひにもあらず、攝政關白の御成敗にも及ばず、唯一向平家のまゝにてありしかば、徳大寺、花山院もなり給はず、入道相國の嫡男小松殿、右大将にておはしけるが、左に移りて次男宗盛、中納言におはせしが、數輩の上臈を超越して、右に加はられけるこそ、申すばかりもなかりしか。中にも徳大寺殿は、一の大納言にて、華族、英雄、才學雄長、家嫡にてましくけるが、越えられ給けるこそ遺恨なれ。定めて御出家などやあらむずらむと、人々内々は申あへりしかども、暫く世のならむ様を見むとて、大納言を辭し申して、籠居とぞ聞えし。

新大納言成親卿宣ひけるは、「徳大寺、花山院に越えられたらむは、いかゞせん。平

家の次男に、越えらるゝこそ安からね。是も萬づ思ふさまなるがいたす所也。いかにもして平家を亡し、本望を遂げむ」とのたまひけるこそ怖しけれ。父の卿は中納言までこそ至られしか。その末子にて、位正二位、官大納言にあがり、大國あまた給はて、子息所從朝恩に誇れり。何の不足に、かゝる心つかれけん。是偏に天魔の所爲とぞ見えし。平治にも、越後中將とて、信賴卿に同心の間、既に誅せらるべかりしを、小松殿やうゝに申て、首をつぎ給へり。然るにその恩を忘れて、外人もなき所に兵具をとゝのへ、軍兵を語らひおき、其營みの外は他事なし。

東山の麓鹿の谷といふ所は、後は三井寺に續いて、ゆゝしき城郭にてぞありける。俊寛僧都の山庄あり。かれに常は寄りあひく、平家滅さむずる謀をぞ回しける。或時法皇も御幸なる。故少納言入道信西が子息、淨憲法印御供仕る。その夜の酒宴に、此由を淨憲法印に仰あはせられければ、「あなあさましや、人あまた承候ぬ。唯今漏きこえて、天下の大事に及び候ひなんず」と大に噪ぎ申ければ、新大納言氣色かはりて、さと立たれけるが、御前に候ける瓶子を、狩衣の袖にかけて引きたふされたりけるを、法皇「あれはいかに」と仰せければ、大納言立かへりて、「平氏たふ

○鹿の谷―「東山鹿谷ト云所ハ法勝寺ノ執行俊寛僧都ガ領也。後ハ三井寺ニ續テ如意山深ク前ハ洛陽遙ニ見渡シテ、然モ在家ヲ隔タリ云々ハ源平盛衰記」



れ候ひぬ」とぞ申されける。法皇多つぼに入らせおはしまして、「物ども參て猿樂つかまつれ」と仰ければ、平判官康頼參りて、「あゝ餘にへいじの多う候に、もて酔て候」と申す。俊寛僧都「さてそれをばいかゞ仕らむずる」と申されければ、西光法師、「頸を取るにはしかじ」とて、瓶子の首を取てぞ入にける。淨憲法印餘りのあさましさに、つやく物も申されず。返すくも恐しかりしことどもなり。與力の輩誰々ぞ。近江の中將入道蓮淨俗名成正、法勝寺の執行俊寛僧都、山城守基兼、式部大輔雅綱、平判官康頼、宗判官信房、新平判官資行、攝津國源氏多田藏人行綱を始として北面の輩多く與力したりけり。

○嚴島大明神—安藝國嚴島に鎮座。市杵島姫命を主神とし瀛津島姫命・瀧津姫命三女神を祀る。平家一門の守護神とす。

〔教訓狀〕 太政入道は、か様に人々數多縛め置ても、猶心行ずや思はれけん。既に赤地の錦の直垂に、黒絲緘の腹巻の、白金物打たる胸板せめて、先年安藝守たりし時、神拜の次に、靈夢を蒙て、嚴島の大明神より現に賜はられたりける銀の蛭巻したる小長刀、常の枕を放す立られたりしを脇挟み、中門の廊へぞ出られける。其氣色大方ゆゝしうぞ見えし。貞能を召す。筑後守貞能は、木蘭地の直垂に緋緘の鎧著

○平右馬助—清盛の叔父忠正を指す。保元の亂に上皇方として誅に伏す。  
○新院—崇徳上皇。  
○一宮—重仁親王。  
○故刑部卿—清盛の父忠盛。  
○故院—鳥羽上皇。  
○經宗—藤原經宗。永曆元年三月、阿波に流さる。  
○惟方—藤原惟方、同じく長門に流さる。

て、御前に畏て候。やゝあて入道宣けるは、「貞能、此事如何思ふ。保元に平右馬助を始として、一門半過て、新院の御方へ參にき。一宮の御事は、故刑部卿殿の養君にて坐いしかば、旁々見放ち參らせ難かしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先を懸たりき。是一の奉公也。次に平治元年十二月、信賴義朝が院内を取奉り大内にたて籠り天下黒闇と成しに、入道身を捨て、凶徒を追落し、經宗惟方を召縛しに至まで、既に君の御爲に命を失んとする事度々に及ぶ。たとひ人何と申す共、七代までは此一門をば争でか捨させ給べき。其に成親と云ふ無用の徒者、西光と云下賤の不當人めが申す事に附かせ給て、此一門を滅すべき由、法皇の御結構こそ遺恨の次第なれ。此後も議奏する者あらば、當家追討の院宣下されつと覺るぞ。朝敵となて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。世を静めん程、法皇を鳥羽の北殿へ移奉るか、然らずば、是へまれ、御幸をなし參らせんと思ふは如何に、其儀ならば、北面の輩、箭をも一つ射んずらん。侍共にその用意せよと觸べし。大方は入道院方の奉公思切たり。馬に鞍おかせよ。させながとり出せ」とぞ宣ける。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳參て、「世は既にかう候」と申ければ、大臣聞も敢ず、



「あは早成親卿が首を刎られたるな」と宣へば、「さは候はねども、入道殿御着背長召され候。侍共も皆打立て法住寺殿へ寄んと出たち候。法皇をば鳥羽殿へ押籠参らせうと候が、内々は鎮西の方へ流し参らせうと被擬候」と申せば、大臣、争かざる事在必きと思へ共、今朝の禪門の氣色、さる物狂しき事もあるらむとて、車を飛して、西八條へぞおはしたる。

門前にて車よりあり、門の内へ指入て見給へば、入道腹巻を著給ふ上は一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に、思々の鎧著て、中門の廊に二行に着座せられたり。其外諸國の受領衛府諸司などは、縁に居溢れ、庭にもひしと竝居たり。旗竿共引そばめく、馬の腹帯を固め、甲の緒を締め、唯今皆打立んずる氣色共なるに、小松殿烏帽子直衣に、大文の指貫のそば取て、さやめき入給へば、事の外にぞ見えられける。

○五戒—不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒の五種の戒法。  
○五常—仁・義・禮・智・信。

入道ふし目に成て、あはれ例の内府が、世をへうする様に振舞。大に諫ばやとこそ思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保て慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を著て向はむ事、面はゆる

○解脫幢相の法衣  
「袈裟名爲解脫幢衣。」(往生要集)。  
「被三菟伽沙佛解脫幢相衣。」於此起惡心一定墮無間獄。(地藏十輪經)

辱しうや思はれけん、障子を少し引立て、素絹の衣を腹巻の上に、周章著に著給たりけるが、胸板の金物の少しはづれて見えけるを藏さうと、頻に衣の胸を引ちがへ引ちがへぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上につき給ふ。入道も宣ひ出さず、大臣も申しいださるゝ事もなし。良有て入道のたまひけるは「成親卿が謀反は、事の數にもあらず。一向法皇の御結構にて在けるぞや。世をしづめん程、法皇を鳥羽の北殿へ遷奉るか、然らずば、是へまれ、御幸を成まゐらせんと思ふは如何に」と宣へば、大臣聞も敢ず、はらくとぞ泣れける。入道「如何に」とあきれ給ふ。大臣涙を抑へて申されけるは、「此仰承候に、御運は早末に成ぬと覺候。人の運命の傾んとては、必ず惡事を思立候也。又御有様、更現共覺候はず。さすが我朝は邊地粟散の境と申ながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の末、朝の政を司どり給ひしより以降、太政大臣の官に至る人の、甲冑をよるふ事禮儀を背にあらざるや。就中に御出家の御身なり。夫三世の諸佛解脫幢相の法衣を脱捨て、忽に甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しましまさむ事、内には既に破戒無慙の罪を招くのみならず、外には又仁義禮智信の法にも背き候なんず。旁々恐ある申事にて候へども、心



○世に四恩——「世出恩、有三其四種。一父母恩、二衆生恩、三國王恩、四一切衆生、平等荷負。」(心地觀經)

○普天下の王地に云々——「普天下莫不王土。率土之濱莫不王臣。」(詩經小雅北山篇)

○潁川の水に云々——許由字武仲、陽城槐里人也。(中略)堯又召爲九州長。由不欲聞之、洗耳潁水濱。(高士傳)

○首陽山に巖を云云——「武王已平殷亂、天下宗周。而伯夷叔齊恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之。」(史記)

○蓮府槐門——南齊の王儉の故事より大臣をいふ。

○日本は是神國也——「吾聞東有神

の底に旨趣を遺すべきに非ず。先、世に四恩あり。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩是也。其中に最重きは朝恩也。普天の下王地に非ずと云ふ事なし。さればかの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に巖を折し賢人も、勅命背き難き禮儀をば存知すところ承はれ。何に況、先祖にも未聞ざし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚闇の身をもて、蓮府槐門の位に至る。加之國郡半過て一門の所領と成、田園悉く一家の進止たり。是希代の朝恩に非ずや。今是等の莫大の御恩を思召忘れて、猥しく、法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背き候ひなみならず。日本は是神國也。神は非禮を受給はず。然れば君の思召立ところ、道理半無に非ず。中にも此一門は、代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を靜る事は無雙の忠なれ共、其賞に誇る事は、傍若無人共申つべし。聖德太子十七箇條の御憲法に「人皆心有り、心各執あり、彼を是し我を非し、我を是し彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くして端なし。爰を以て縱人怒ると云とも、かへて我咎を懼れよ」とこそ見えて候へ。然れ共御運盡きざるに依て、御謀反已に露ぬ。其上仰合せらる、成親卿を召置れぬる上は、縦君如何なる不思議を思召し立せ給ふ

國——謂日本。(日本書紀仲哀天皇の條)

○聖德太子十七箇條の御憲法——推古天皇十二年四月の御制定、其の第十條に「絶怨棄瞋、不怒人違、人皆有心、心各有執、彼是則我非、我必非、聖、彼必非、愚、共是凡夫耳、是非之理、誰能不定、相共賢愚、如鑽无端、是以彼人雖瞋、還恐我失、我獨雖得、從衆同舉。」と見えてある

○千顆萬顆の玉——「瑩日瑩風、高低千顆萬顆之玉。染枝染浪、表裏一入再入之紅。」(昔三品——本朝文粹)

○迷廬八萬——蘇迷廬の略、その高さ八萬四千由旬ありと。よつて山の高きに譬ふ。

とも、何の恐か候べき。所當の罪科行れん上は、退いて事の由を陳じ申させ給て、君の御爲には、彌奉公の忠勤を盡し、民の爲には、益撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預り佛陀の冥慮に背べからず。神明佛陀感應あらば、君も思召なほす事などか候はざるべき。君と臣とを比るに親疎別く方なし。道理と僻事を並べんに、争か道理に附ざるべき。

是は君の御理にて候へば、叶はざらむまでも、院御所法住寺殿を守護し參らせ候べし。其故は重盛敍爵より今大臣の大將に至迄、併ら君の御恩ならずと云ふ事なし。其恩の重き事を思へば、千顆萬顆の玉にも越え、其恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にも過たらん。然れば院中に參り籠り候べし。其儀にて候はば、重盛が身に代り、命に代らんと契りたる侍共、少々候らん。是等を召具して、院の御所法住寺殿を守護しまゐらせ候はば、さすが以の外の御大事でこそ候はんずらめ。悲哉、君の御爲に奉公の忠を致んとすれば、迷廬八萬の頂より猶高さ父の恩忽に忘れんとす。痛哉。不孝の罪を遁れんとすれば、君の御爲に已に不忠の逆臣と成ぬべし。進退惟谷れり。是非いかにも辨へ難し。申請る所詮は、唯重盛が頸を召され候へ。



○蕭何—漢の功臣高祖都侯に封ず。

○富貴の家には云「常觀富貴之家、祿位重疊、猶再實之木其根必傷。」(後漢書)

院中をも守護し參らすべからず。院參の御供をも仕るべからず。かの蕭何は大功かたへに越たるに依て、官大相國に至り、劔を帶し沓を履ながら殿上に昇る事を許されしか共、叡慮に背く事あれば、高祖重う警て深う罪せられにき。か様の先蹤を思ふにも、富貴といひ、榮花といひ、朝恩と云ひ、重職と云ひ、旁極させ給ぬれば、御運の盡ん事難かるべきに非ず。富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木は、其根必傷むと見えて候。心細うこそ覺候へ。何迄か命生て、亂れん世をも見候べき。唯末代に生は受けて、かゝる憂目に逢候重盛が果報の程こそ、拙う候へ。只今侍一人に仰附て、御坪の内に引出されて、重盛が首の刎られん事は、易い程の事でこそ候へ。是ちのく聞給へ」とて直衣の袖も絞る許に涙を流しかき口説かれければ、一門の人々、心あるも心なきも皆袖をぞ濡れける。

太政入道も、頼切たる内府はか様に宣ふ。力もなげにて、「いやく是迄は思も寄さうず。惡黨共が申事につかせ給ひて、僻事などや出こむざらんと思ふ計でこそ候へ」とのたまへば、大臣、「縱如何なる僻事出來候とも、君をば何とかし參らせ給ふべき」とて、つい立て中門に出で、侍共に仰られけるは、「唯今重盛が申しつる事を

ば、汝等承ずや。今朝より是に候うて、か様の事共申静むと存じつれ共、餘にひた噪に見えつる間、歸りたりつる也。院參の御供に於ては、重盛が頸の召されむを見て仕れ。さらば人參れ」とて、小松殿へぞ歸られける。

○同二十七日云々  
治承五年二月二十七日、玉葉同日の條に「禪門病頭風」と見ゆ。

○千手井—千壽井。東塔西谷にあり、山王院千手堂の關伽井である。

○法藏僧都—康保二年東大寺別當、安和二年權少僧都同年入寂、閻王宮

〔入道死去〕 同二十七日、前の右大將宗盛卿源氏追討の爲に、東國へ既に門出と聞えしが、入道相國違例の心地とて、留り給ひぬ。明る廿八日より重病を受給へりとして、京中六波羅「すは仕つる事を」と叫けり。入道相國病附給ひし日よりして、水をだに喉へ入たまはず、身の内の熱き事火を焼が如し。臥給へる所、四五間が内へ入る者は、熱さ堪がたし。唯宣ふ事とては、「あたあた」とばかり也。少しも徒事とは見えざりけり。比叡山より、千手井の水を汲下し、石の船に湛へて、其に下て冷給へば、水夥う湧上て、程なく湯にぞ成にける。若や扶かり給ふと笕の水をまかせたれば、石や鐵などの焼たる様に、水迸て寄附ず。自ら中る水は、焰と成て燃ければ、黒煙殿中に充滿て、炎渦巻いて上りけり。是や昔法藏僧都といし人、閻王の請に趣いて、母の生所を尋ねしに閻王憐み給ひて、獄卒を相副へて焦熱地獄へ遣さる。鐵



に母を尋ねし事、  
元亨釋書に見えて  
ある。

の門の内へ差入ば、流星などの如くに、炎空へたちあがり、多百由旬に及びけんも、  
今こそ思知られけれ。

入道相國の北の方、二位殿の夢に見給ひける事こそ恐しけれ。譬へば、猛火の夥う  
燃たる車を門の内へ遣入たり。前後に立たる者は或は馬の面の様なる者も有り、或  
は牛の面の様なる者も有り。車の前には、無と云ふ文字ばかりぞ見えたる鐵の札を  
ぞ立たりける。二位殿夢の心に「あれは何よりぞ」と御尋あれば、「閻魔の應より平  
家太政入道殿の御迎に參て候」と申す。さて、其の札は何といふ札ぞ」と問せ給へ  
ば、「南閻浮提金銅十六丈の盧遮那佛燒亡し給へる罪に依て、無間の底に墮給ふべき  
由、閻魔の應に御さだめ候が、無をば書かれて、問の字をば未だ書れぬ也」とぞ申  
ける。二位殿打驚き、汗水になり、是を人に語給へば、聞く人皆身の毛よだちけり。  
靈佛靈社に、金銀七寶を投げ、馬鞍鎧冑弓箭太刀刀に至る迄、取出し運出して祈ら  
れけれども、其驗も無りけり。男女の君達、跡枕に指つどひて、如何にせんと歎悲  
み給へども叶べしとも見えざりけり。

閏二月二日、二位殿熱う堪難けれども、御枕の上に寄て泣々宣けるは、「御有様見奉

るに、日に添て憑少うこそ見えさせ給へ。此世に思食おく事あらば、少し物の覺え  
させ給ふ時、仰置け」とぞ宣ひける。入道相國、さしも日來はゆゝしげに坐しかど  
も、誠に苦げにて、息の下に宣ひけるは、「われ保元平治より以來、度々の朝敵を平  
げ、勸賞身に餘り、忝くも帝祖太政大臣に至り榮花子孫に及ぶ。今生の望、一事も  
残る所なし。但し思置く事としては、伊豆國の流人前右兵衛佐頼朝が頸を見ざりつ  
るこそ安からね。我如何にも成なん後は堂塔をも立て孝養をもすべからず。やがて  
討手を遣し、頼朝が頭を刎て、我墓の前にかくべし。其ぞ孝養にて有んずる」と宣  
ひけるこそ、罪深けれ。

同四日、病に責められ、せめての事に板に水を沃て、其に臥轉給へ共、助る心地も  
し給はず。悶絶躡地して、遂にあつち死にぞし給ひける。馬車の馳違ふ音天も響さ  
大地も揺ぐほど也。一天の君萬乗の主の、如何なる御事在すとも是には過じとぞ見  
えし。今年は六十四にぞ成給ふ。老死と云べきにはあらねども、宿運忽に盡給へば、  
大法祕法の效驗もなく、神明三寶の威光も消え、諸天も擁護し給はず。況んや凡慮  
に於てをや。命に代り身に代らんと忠を存ぜし數萬の軍旅は、堂上堂下に竝居たれ

○悶絶躡地—「轉  
更惶怖、悶絶躡  
地。(法華經)



○死出の山―死天山ともいふ。娑婆與冥途一境有之。廣景山河。山名曰死出。河名號三津。○(前篇)  
 ○中有―於死有後。在生有前。即彼中間有之。自體起。爲至生處。故起此身。二趣中間故名中有。俱舍論。  
 ○經島―築島をいふ。兵庫北濱の地、來迎寺附近ならんといはれてゐる。

ども、是は目にも見えず力にも關らぬ無常の刹鬼をば、暫時も戰返さず。又歸り來ぬ死出の山、三瀬川、黄泉中有の旅の空に、唯一所こそ赴き給ひけめ。日比作り置れし罪業計や、獄卒と成て、迎に來けん。哀なりし事共也。さても有べきならねば、同七日に、愛宕にて煙になし奉り、骨をば圓實法眼頸にかけて、攝津國へ下り、經島にぞ納ける。さしも日本一州に名を揚げ威を振し人なれども、身は一時の煙と成て、都の空に立上り、屍を暫やすらひて、濱の眞砂に戲つ、空き土とぞ成給ふ。

〔福原落〕 平家は小松三位中將維盛卿の外は、大臣殿以下妻子を具せられければ、次様の人共はさのみ引しろふに及ばねば、後會其期を知らず、皆打捨てぞ落行ける。人は何れの日、何れの時、必ず立歸べしと其期を定置だにも、久しきぞかし。況んや是は今日を最後、唯今限の事なれば、行くも止まるも、互に袖をぞ濕しける。相傳譜代の好年比日比の重恩、争か忘るべきなれば、老たるも若きも、後のみ歸り見て、前へは進みもやらざりけり。或は磯邊の波枕、八重の潮路に日を暮し、或は遠

きを分け、嶮しきを凌ぎつゝ、駒に鞭打人もあり、舟にさをさす者もあり、思々心に落行けり。

○積善の餘慶云々―積善之家必有餘慶、積不善之家必有餘殃。周易文言傳。

平家は福原の舊都に著て、大臣殿然るべき侍共老少數百人召て仰られけるは、「積善の餘慶家に盡き、積惡の餘殃身に及ぶ故に、神明にも放たれ奉り、君にも捨られ參らせて、帝都を出て旅泊に漂ふ上は、何の憑みか有るべきなれ共、一樹の蔭に宿るも、前世の契淺からず、同じ流を掬ぶも、他生の縁尙深し。如何に況や、汝等は一且隨ひ付く門客にあらず、累祖相傳の家人也。或は近親の好他に異なるも有り、或は重代芳恩は深きも有り。家門繁昌の古へは、恩波に依て、私を顧みき。今何ぞ芳恩を酬ひざらんや。且は十善帝王、三種神器を帶して渡らせ給へば、如何ならん野の末山の奥迄も、行幸の御供仕らんとは思はずや」と仰られければ、老少皆涙を流いて申けるは、「怪しの鳥獸も、恩を報じ徳を酬ふ心は候なり。況や人倫の身として、いかが其理を存知仕らでは候べき。廿餘年の間、妻子を育み、所従を顧み候事、併ら君の御恩ならずといふ事なし。就中弓箭馬上に携る習ひ、二心あるを以て恥とす。然ば則ち日本の外、新羅、百濟、高麗、契丹、雲の果海の果迄も、行幸の御供



○海士の焼く藻の  
夕煙―「かきつめ  
て海士のたぐ藻の  
思にも今はかひな  
き怨だにせじ。」  
(源氏物語明石の  
卷)

○尾上の鹿の曉の  
聲―「秋風のうち  
ふくごとく高砂の  
尾上の鹿のなかぬ  
日ぞなき。」(拾遺  
集)

○遙々來ぬ―唐  
衣着つ、馴れにし  
妻しあれば遙々來  
ぬる旅をしぞ思  
ふ。(伊勢物語)

○在原のなにがし  
―在原業平、名に  
し負はゞいざ言問  
はむ都鳥わが思ふ  
人はありやなしや  
と。(伊勢物語)

○長門國ひく島―  
引島(書紀)・彦島  
(吾妻鑑)、豊浦郡  
伊崎浦の東にあ  
り。

○田邊の新熊野―  
紀伊國西牟婁郡湊  
村にあり。田邊庄  
は今の湊村であ  
る。熊野別當湛海、  
熊野三所權現を此  
地に勧請して新熊  
野と名づく。

仕て、如何にも成候はん」と、異口同音に申ければ、人々皆憑氣にぞ見えられける。福原の舊里に、一夜をこそ明されけれ。折節秋の初の月は下の弦なり。深更空夜閑にして、旅寝の床の草枕、露も涙も争ひて、唯物のみぞ悲き。何歸るべし共覺えねば、故入道相國の造り置き給ひし所々を見給ふに、春は花見の岡の御所、秋は月見の濱の御所、泉殿、松蔭殿、馬場殿、二階の棧敷殿、雪見の御所、萱の御所、人々の館ども五條の大納言國綱卿の承て造進せられし里内裏、鶯の瓦、玉の磴、何れも何れも三年が程に荒果て、舊苔徑を塞ぎ、秋の草門を閉づ。瓦に松生ひ、垣に葛茂れり。臺傾て苔むせり。松風ばかりや通ふらん。簾絶え閨露は也。月影のみぞ差入ける。明ぬれば福原の内裏に火を懸て、主上を始奉て人々皆御船に召す。都を立し程こそ無れども是も名残は惜かりけり。海士の燒藻の夕煙、尾上の鹿の曉の聲、渚々に寄する浪の音、袖に宿かゝる月の影、千草にすたく蟋蟀のさきりくす、惣て目に見耳に觸る事、一として哀れを催し、心を痛しめずといふ事なし。昨日は東關の麓に轡を並て十萬餘騎、今日は西海の浪に纜を解て七千餘人、雲海沈々として、青天既に暮なんとす。孤島に夕霧隔て、月海上に浮べり。極浦の浪を分け、鹽に引

かれて行船は、半天の雲に浜る。日數歴れば、都は既に山川程を隔て、雲井の餘所にぞ成にける。遙々來ぬと思ふにも、唯盡ぬ者は涙なり。浪の上に白き鳥のむれるるを見給ひては、彼ならん、在原のなにがしの隅田川にて言問ひけん、名も睦敷き都鳥にやと哀也。壽永二年七月二十五日に、平家都を落果ぬ。

〔壇浦合戦〕 さる程に、九郎大夫判官義經周防の地に押渡りて、兄の參河守と一に成る。平家は長門國ひく島にぞつきにける。源氏阿波國勝浦に着て八島の軍に打勝ぬ。平家引島に着と聞えしかば、源氏は同國の内、追津に着こそ不思議なれ。熊野別當湛増は、平家重恩の身なりしが、忽に其恩を忘れて「平家へや參るべき、源氏へや參るべき」とて、田邊の新熊野にて御神樂奏して、權現に祈誓し奉る。「唯白旗につけ」と御託宣有けるを、猶疑をなして白い鶏七、赤き鶏七、是を以て權現の御前にて勝負をせさす。赤き鶏一つも勝たず皆負てけり。さてこそ源氏へ參らんと思定めけれ。一門の者共相催し、都合其勢二千餘人、二百餘艘の船に乗り連て、若王子の御正體を船に乗參せ、旗の横上には、金剛童子を書奉て、壇浦へ寄するを見て、源



○門司—豊前國門司半島の西北、早瀬戸の南岸、豊前・長門間の關津。

氏も平家も共にをがむ。されども源氏の方へ附ければ、平家興覺てぞ思はれける。又伊豫國の住人、河野四郎通信、百五十艘の兵船に乗連て漕來り、源氏と一つに成にけり。判官旁憑しう力ついてぞ思はれける。源氏の船は三千艘、平家の船は千餘艘、唐船少々相交れり。源氏の勢は重れば、平家の勢は落ぞ行く。元暦二年三月廿四日卯刻に、豊前の國の門司赤間關にて源平矢合とぞ定めける。(中略)平家は千餘艘を三手に作る。山賀の兵藤次秀遠五百餘艘で先陣に漕向ふ。松浦黨三百餘艘で二陣に續く。平家の君達二百餘艘にて三陣に續き給ふ。兵藤次秀遠は、九國一番の精兵にて有けるが我程こそなけれ共、普通さまの精兵共五百人をすくて、舟々の艦船に立て、肩を一面に比て、五百の矢を一度に放つ。源氏は三千餘艘の船なれば、勢の數、さこそ多かりけめども、處々より射ければ何くに精兵有とも見えす。大將軍九郎大夫判官眞先に進で戦ふ。楯も鎧もこらへずして、散々に射しらまさる。平家御方勝ぬとて、頻に攻鼓打て悦の関をぞ作りける。(中略)さる程に四國鎮西の兵共、皆平家に背いて源氏に附く。今まで従ひ著たりし者共も君に向て弓を引き、主に對して太刀を抜く。彼岸につかんとすれば、波高して叶ひ難し。此の汀に寄らんとす

れば、敵箭鋒を汰て待懸たり。源平の國争い、今日を限とぞ見えたりける。

源氏の兵共、既に平家の船に乗移りければ、水主梶取共、射殺され、切殺されて船を直すに及ばず、船底に倒伏しにけり。新中納言知盛卿、小船に乗て御所の御船に參り、「世の中はいまはかうと見えて候。見苦しからん物共皆海へ入させ給へ。」とて艦船に走り廻り、掃いたり拭いたり、塵拾ひ、手づから掃除せられけり。女房達、「中納言殿、軍は如何に」と口々に問ひ給へば、「めづらしき東男をこそ、御覽せられ候はんずらめ」とて、から／＼と笑ひ給へば、「何條の只今の戯れぞや」とて、聲にをめき叫給ひけり。(中略)

女院は此御有様を御覽じて、御燒石、御硯左右の御懷に入れて、海へ入せ給ひたりけるを、渡邊黨に源五馬允 昵誰とは知り奉らねども、御髪を熊手に懸て引上奉る。女房達、「あな淺まし、あれは女院にて渡らせ給ぞ」と聲々口々に申されければ、判官に申て急ぎ御所の御舟へわたし奉る。大納言の殿は、内侍所の御唐櫃をもて、海へ入らんとし給ひけるが、袴の裾を舟端にいつけられ、蹴纏ひて倒れ給たりけるを、兵ども取留め奉る。さて武士共内侍所の御唐櫃の鎖を捏切て、既に御蓋を開か



んとすれば忽たちまちに目くれ鼻血垂る。平大納言、生捕にせられておはしけるが、「あれは内侍所の渡らせ給ふぞ。凡夫は見奉らぬ事ぞ」と宣へば、兵共みなのにけり。其後判官平大納言に申合せて、本の如く緘からけ納め奉る。(中略)

凡そ能登守教經の矢先に廻る者こそ無りけれ。矢種たねの有る程射盡して今日を最後とや思はれけん、赤地の錦の直垂に、唐綾威からあやおさしの鎧著て、いか物作りの大太刀拔、白柄の大長刀を鞘をはづし、左右に持て、なぎ廻り給ふに面を合する者ぞなき。多の者ども討たれにけり。新中納言使者を立て、「能登殿痛う罪な作り給ひそ。さりとて好き敵かたきか」と宣ひければ、「さては大將軍に組めごさんなれ。」と心得て、打物莖くきみじか短に取て、源氏の船に乗り移り、をめき叫んで責戦ふ。されども判官を見知給はねば、物具ものぐの好き武者をば「判官か」と目を懸て、馳はせま回り給ふ。判官も先に心得て面おもてに立つ様にしけれども、兎かく違ひて、能登殿には組れず。されども如何したりけん、判官の船に乗當て「あはや」と目を懸て飛とでかゝるに、判官叶はじとや思はれけん、長刀脇にかい挟み、御方の船の二丈ばかりのいたりけるに、ゆらりと飛乗り給ひぬ。能登殿は疾態はやわざや劣られけん、やがて續いても飛び給はず。今はかうと思はれければ

太刀長刀海へ投入れ、甲かぶとも脱ぬいで棄られけり。鎧くさすりの草摺くさすりかなぐり棄て、胴ばかり著て、大童おほわらになり、大手を廣げて立たれたり。凡當あたりを擽はらてぞ見えたりける。怖しなども愚也。能登殿大音聲を上て、「我と思はん者共は寄て教經に組くで生捕いけりにせよ。鎌倉へ下て頼朝に逢て物一詞ひことば云はんと思ふぞ。よれやよれ」と宣へども寄る者一人も無りけり。こゝに土佐の國の住人、安藝あきの郷がうを知行しける安藝大領實康が子に、安藝あきの太郎實光とて、三十人が力持たる大力たいちからの剛がうの者あり。我にちとも劣らぬ郎等一人、弟の次郎も、普通にはすぐれたるしたゝか者也。安藝太郎能登殿を見奉て申けるは、「如何に心猛くましますとも我等三人取付つたらんに縦長たごひたけ十丈の鬼なりとも、などか従へざるべき」とて主従三人小船に乗て、能登殿の船に押並べえいといひて乗移り甲かぶとのしころを傾かたぶけ太刀を抜て一面に打て懸る。能登殿ちとも噪なぎ給はず、眞先に進すすむる安藝あきの太郎が郎等をすそを合せて、海へどうと蹴け入給ふ。續いてよる安藝あきの太郎を弓ゆみ手の腋わきに取て挟み、弟の次郎をば、馬手うての脇にかい挟み、一ひとしめしめて、「いざうれ、さらば己等死出の山の供せよ」とて、生年廿六にて、海へつとぞ入給ふ。新中納言、見みべき程の事は見つ、今は自害せん」とて、乳人子あなごの伊賀いげの平内左衛門家



長を召て、「いかに日比の約束は違まじきか」と宣へば、「子細にや及候」と申。中納言に、鎧二領著せ奉り、我身も鎧二領著て、手を取組で海へぞ入にける。是を見て侍共廿餘人後たてまつらじと手に手を取組で一所に沈みけり。其中に、越中の次郎兵衛、上總の五郎兵衛、悪七兵衛、飛驒の四郎兵衛は、何としてか逃れたりけん、そこをも又落にけり。海上には赤旗赤幟共、投捨かなぐり捨たりければ、龍田川の紅葉を、嵐の吹散したるがごとし。汀に寄る白浪も薄紅にぞ成にける。主もなき虚しき船は、潮に引かれ風に從て、いづくを指ともなくゆられゆくこそ悲しけれ。

○建禮門院一吾妻  
 鑑元曆二年四月廿  
 八日の條「建禮門  
 院渡御于吉田邊。  
 律師實」と見えて  
 憲坊と見えて  
 みる。

〔女院出家〕 建禮門院は、東山の麓、吉田の邊なる所にぞ、立入せ給ひける。中納言の法印慶惠と申ける奈良法師の坊なりけり。住荒して年久しう成ければ庭には草深く、軒にはしのぶ茂れり。簾たえ閨露はにて、雨風たまるべうもなし。花は色々へども主と憑む人もなく、月は夜なくさし入れども詠めて明す主もなし。昔は玉の臺を磨き、錦の帳に纏れて、明し暮し給ひしが、今は有とし有人には、皆別果てて、あさましげなる朽坊に入らせ給ひける御心の中おしはかられて哀なり。魚の陸

○蒼波路遠し云々  
 「蒼波路遠雲千  
 里、白霧山深鳥一  
 聲。」(和漢朗詠集)

に上れるが如く、鳥の巢を離たるが如し。さるまゝには、憂りし波の上、船の中の御住ひも、今は戀しうぞ思召す。蒼波路遠し、思を西海千里の雲に寄せ、白屋苔深くして、涙東山一庭の月に落つ。悲しとも云ばかりなし。かくて女院は文治元年五月一日、御ぐし下させ給ひけり。御戒の師には、長樂寺の阿證房の上人印誓とぞ聞えし。御布施には、先帝の御直衣なり。今はの時まで召されたりければ、其移り香もいまだうせず。御形見に御覽せむとて、西國より遙々と都迄持せ給ひたりければ、如何ならむ世までも、御身をはなたじとこそ思召されけれども、御布施になりぬべき物のなき上、且は彼御菩提の爲とて、泣々取出され給ひけり。上人是を給て、何と奏する旨もなくして、墨染の袖を絞りつゝ泣々罷出でられけり。此御衣をば幡に縫て、長樂寺の佛前に懸られけるとぞ聞えし。

女院は十五にて女御の宣旨を下され、十六にて后妃の位にそなはり、君王の側に候はせ給ひて、(中略)朝政を勧め(中略)給へり。二十二にて皇子御誕生有て、皇太子に立ち、位につかせ給しかば、院號蒙らせ給ひて、建禮門院とぞ申ける。入道相國の御娘なる上、天子の國母にてましましければ、世の重し奉る事斜



○桃李の御粧―  
「南國有佳人、容華如桃李。」(文選)  
 ○芙蓉の御容―  
「芙蓉如面柳如眉。」(長恨歌)

○壁に背ける云々―  
「上陽人、紅顏鬢老白髮新、綠衣監使守宮門、一閉上陽多少春、玄宗末歲初選入、(中略)一生遂向空房宿、秋夜長、夜長無寐天不明、耿耿殘燈背壁影、蕭蕭雨打聲。」(中略)上陽人苦最多、少亦苦老亦苦、少苦老苦兩如何、君不見、昔時呂尚美人賦、又不見、今日上陽

ならず。今年は二十九にぞならせ給ふ。桃李の御粧猶濃かに、芙蓉の御容未だ衰させ給はねども、翡翠の御かざしつけても何にかはせさせ給ふべきなれば、遂に御様をかへさせ給ひ、浮世を厭ひ、實の道に入せ給へども、御歎きは更に盡せず。人入今はかくとて海に沈し有様、先帝、二位殿の御面影、如何ならん世までも忘れがたく思食すに露の御命何しに今までながらへて、かゝる憂目を見るらんと思食し續けて御涙せきあへさせ給はず。五月の短夜なれども明しかねさせ給ひつゝ、自打睡ませ給はねば、昔の事は夢にだにも御覽せず。壁に背ける殘の燈の影幽に、夜もすから窓打暗き雨の音ぞさびしかりける。上陽人が上陽宮に閉られけん悲みも、是には過じとぞ見えし。昔を忍ぶ妻となれとてや、本の主の移し裁たりけん花橋の軒近く風なつかしう香りけるに、山郭公二聲三聲音信ければ、女院ふるき事なれ共、思召出でて、御硯の蓋にかうぞ遊ばされける。

郭公花橋の香をとめて啼くは昔の人や戀しき

女房達は、さのみたけく、二位殿、越前の三位の上の様に、水の底にも沈み給ねば、武士の荒けなきにとらはれて、舊里に歸り、若きも老たるも様をかへ、形をやつし、

白髮歌。(白氏文集)

○花橋の軒近く云云―  
「五月待つ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。」(古今集)

○仙家より歸て云云―  
晋の王質が仙界に行き、碁を圍むを見て歸りしに七世の代を経たといふ故事。「謬入仙家、雖爲半日之客、恐歸舊里、纔逢七世之孫。」(和漢朗詠集)

在にもあらねぬ有様にてぞ、思ひもかけぬ谷の底、岩の挟間に明し暮し給ひける。住し宿は皆烟と上りにしかば、空しき跡のみ残りて、茂き野邊と成つゝ、見馴し人の問くるもなし。仙家より歸て、七世の孫に逢けんも、かくやと覺えて哀也。

さる程に七月九日の大地震に、築地も崩れ、荒たる御所も傾き破れて、いと住せ給べき御便もなし。綠衣の監使宮門を守だにもなし。心の儘に荒たる籬は、茂き野邊よりも露けく、折知がほに、何しか蟲の聲々恨るも哀也。夜も漸々長く成れば、いと御寢覺がちにて、明しかねさせ給ひけり。盡せぬ御物思ひに、秋の哀さへうち添て、しのびがたくぞ思食されける。何事も變り果ぬるうきよなれば、自なさを懸奉るべき草のゆかりも枯果てて、誰はぐくみ奉るべしとも見え給はず。

〔大原入〕 されども冷泉大納言隆房卿の北の方、七條の修理大夫信隆卿の北の方、しのびつゝやうくに訪ひ申させ給ひけり。あの人共のはぐくみで有るべしとこそ昔は思はざりしか」として女院御涙を流させ給へば、附參せたる女房達も、皆袖をぞ絞られける。



○寂光院—山城國愛宕郡大原村宇草生にあり。延暦寺所屬の尼寺である。  
 ○山里は物のさびしき云々—「山里は物のさびしきこそあれ世のうきよりは住みよかりけり。」(古今集)

此御すまひも猶都近く、玉鉾の道行人の人目も繁くて、露の御命の風を待む程は、憂事さかぬ深き山の奥へも入なばやとはおぼしけれども、さるべき便もましまさず。或女房の參て申けるは、「大原山の奥寂光院と申處こそ、靜かに候へ」と申ければ、「山里は、物のさびしき事こそあるなれども、世の憂よりは住よかんなるものを」とて、思食し立せ給ひけり。御輿などは隆房卿の北の方の御沙汰有けるとかや。文治元年長月の末に、かの寂光院へ入らせ給ふ。道すがら四方の梢の色々なるを、御覽じ過させ給ふ程に、山陰なればにや、日も既に暮かゝりぬ。野寺の鐘の入相の音すぐく、分る草葉の露滋み、いと御袖濕勝、嵐烈く木の葉亂りがはし。空かき曇り、いつしか打時雨つゝ、鹿の音幽に音信て、蟲の恨も絶々なり。とにかくに取集めたる御心細さ、譬へ遣べき方もなし。浦傳ひ島傳ひせし時も、さすがかくは無かりしものをと思召こそ悲けれ。岩に苔むして、寂たる處なりければ、住まほしうぞ思しめす。露結ぶ庭の萩原霜枯れて、籬の菊のかれくゝに、移ろふ色を御覽じて、御身の上とや覺しけむ。

佛の御前へ參せ給ひて、「天子聖靈、成等正覺、頓證菩提」と祈り申させ給ふにつけても先帝の御面影、ひしと御身に傍ひて、如何ならむ世にか思召忘れさせ給ふべき。さて寂光院の傍に、方丈なる御庵室を結んで、一間をば御寢所に定め、一間をば佛所に定め、晝夜朝夕の御勤、長時不斷の御念佛、怠る事なくて月日を送らせ給ひけり。

かくて神無月中の五日の暮方に、庭に散敷くならの葉を踏鳴して聞えければ、女院「世を厭ふ處に、何者の問ひ來るやらん。あれ見よや。しのぶべき者ならば急ぎ忍ばん」とてみせらるゝに小鹿の通るにてぞ有ける。女院「如何に」と御尋あれば、大納言の佐殿涙を押して、

岩根ふみたれかとはんならの葉のそよぐは鹿の渡るなりけり

女院哀に思召し、窓の小障子に此歌を遊ばし留させ給ひけり。

かゝる御つれづれの中に、思しめしなぞらふる事どもは、つらき中にも餘たあり。軒に竝べる樹をば七重寶樹とかたどれり。岩間に積る水をば、八功德水と思食す。無常は春の花、風に隨てちりやすく、有涯は秋の月、雲に伴て隱易し。昭陽殿に花を翫びし朝には、風來て匂を散し、長秋宮に月を詠せし夕には、雲掩て光を藏す。

○七重寶樹—極樂にある寶樹。「言ニ七重一者、或有ニ一樹ニ黄金爲レ根、紫金爲レ莖、白銀爲レ枝、珊瑚爲レ條、珊



瑚爲<sup>レ</sup>葉、白玉爲<sup>レ</sup>華、眞珠爲<sup>レ</sup>葉。如是七重五爲<sup>レ</sup>根莖乃至華葉等、七七四十九重也。<sup>レ</sup>（觀無量壽經疏定善義）

○八功德水—極樂にある池。澄淨・清冷・甘美・輕軟・潤澤・安和・飲無患・飲養の八徳を具へた水をたゞへてゐる。

○長秋宮—皇后中宮の居殿。

○北祭—賀茂祭をいふ。

○補陀洛寺—遺跡確ならず。

○小野の皇太后宮の舊跡—後冷泉天皇の皇后藤原歌子の舊跡。山城國愛宕郡小野山附近。

昔は玉樓金殿に錦の褥をしき、妙なりし御すまひなりしかども、今は柴引結ぶ草の庵、餘所の袂もしをれけり。

〔大原御幸〕 かゝりし程に、文治二年の春の比、法皇建禮門院大原の閑居の御住ひ御覽ぜまほしう思食されけれども、きさらぎ彌生の程は、嵐烈く餘寒も未だ盡せず。嶺の白雪消やらで、谷のつゝらも打解ず。春過ぎ夏來て、北祭も過しかば、法皇夜を籠めて、大原の奥へぞ御幸なる。忍びの御幸なりけれども、供奉の人々は、徳大寺、花山院、土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬どほりの御幸なれば、彼清原深養父が補陀洛寺、小野の皇太后宮の舊跡を觀覽有て、其より御輿に召されけり。遠山に懸る白雲は、散にし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞをしまるゝ。比は卯月廿日餘の事なれば、夏草の茂みが末を分入せ給に、始めたる御幸なれば、御覽じ馴たる方もなく、人跡絶たる程も思召しられて哀なり。

西の山の麓に、一字の御堂有り、即寂光院是なり。古う作りなせる山水木立、由あ

○青葉交りの晩櫻—夏山の青葉まじりのおそ櫻初花よりも珍らしきかな。<sup>レ</sup>（金葉集）

○瓢箪屢空—「瓢箪屢空、草滋、類淵之巷、藜藿深鎖、雨濕原憲之樞。」（和漢朗詠集）

る様の所なり。蕞破れては霧不斷の香を燒き、とほそ落ては月常住の燈を挑ぐと、か様の處をや申すべき。庭の夏草茂り合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草浪に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲る色、青葉交りの晩櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待がほなり。法皇是を觀覽有て、かうぞ思召しつゞけける。池水にみぎはの櫻散りしきて浪の花こそ盛なりけれ

ふりにける岩の斷間より、落くる水の音さへ、ゆゑび由ある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及びがたし。女院の御庵室を御覽すれば、軒には蔦權はひかゝり、しのぶ交りの萱草、瓢箪屢空し、草顔淵之巷にしげし。藜藿深鎖せり、雨原憲之樞をうるほすとも謂つべし。杉の蒼目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、漏る月影に争ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いよいよささ風に風噪ぎ、世にたえぬ身の習ひとて、うさふし繁き竹柱、都の方の言傳は、間遠に結るませ垣や、僅に事問ふ物とては、嶺に木傳ふ猿の聲、賤士がつま木の斧の音、是等が音信ならでは、正木の葛、青葛、來人稀なる所なり。



○五戒十善の御果報として人間に生れ、十善の果報として天道に生る。天子は人中に生れて天道の報を受くるをいふ。  
 ○捨身の行―「捨身他世必生淨國」(觀無量壽經地想觀)有漏の身を捨て往生淨土の行をなすをいふ。

法皇「人や在る」と召されけれども、御いらへ申者もなし。遙に有て、老衰へたる尼一人参りたり。「女院はいづくへ御幸成ぬるぞ」と仰ければ、「此上の山へ花摘に入せ給ひて候」と申。「左様の事に仕へ奉るべき人も無きにや。さこそ世を捨る御身といひながら、御痛しうこそ」と仰ければ、此尼申けるは、「五戒十善の御果報盡させ給ふに依て、今かゝる御目を御覽するにこそ候へ。捨身の行に、なじかは御身を惜ませ給ふべき。因果經には『欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因』と説かれたり。過去未來の因果を、悟らせ給ひなば、つやく御歎あるべからず。悉達太子は十九にて、伽耶城を出で、檀特山の麓にて、木葉を連ねては肌をかくし、嶺に上て薪を採り、谷に下て水を結ぶ。難行苦行の功に依て、遂に成等正覺し給ひき」とぞ申ける。此尼の有様を御覽すれば、絹布のわきも見えぬ物を結び集めてぞ着たりける。「あの有様にても、か様の事申す不思議さよ」と思食して、「抑汝は如何なる者ぞ」と仰ければ、さめくと泣いて、暫しは御返事にも及ばず。稍有て、涙を押して、申けるは、「申に付けても憚おぼえ候へ共、故少納言入道信西が娘、阿波の内侍と申し者にて候ふなり。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみ深うこそ候ひ

しに、御覽じ忘させ給ふにつけて身の衰へぬる程も思ひしられて今更せんかたならこそおぼえ候へ」とて袖を顔に押當て、忍びあへぬ様、目もあてられず。法皇も「されば汝は阿波の内侍にこそあんなれ。今更御覽じ忘れける、唯夢とのみこそ思食せ」とて御涙せきあへさせ給はず。供奉の公卿殿上人も、「不思議の尼哉と思ひたれば、理にて有けるぞ」とぞ各申あはれける。

○三尊―中尊として阿彌陀佛、脇侍として觀世音菩薩・勢至菩薩の三佛をいふ。  
 ○善導和尚―唐の高僧にして淨土教の祖師。  
 ○八軸の妙文―一部八卷の法華經をいふ。  
 ○九帖の御書―觀無量壽經疏四卷・法華經二卷・觀念法門一卷・往生禮

あなたをなたを御覽あれば、庭の千草露おもく、籬に倒れかゝりつゝ、そともの小田も水越えて、鴨立隙も見え分かず。御庵室に入せ給ひて、障子を引明て御覽すれば、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲をかけられたり。左には普賢の畫像、右には善導和尚、竝に先帝の御影を掛け、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂に引かへて、香の煙ぞ立上る。彼淨名居士の方丈の室の中には、三萬二千の床を竝べ、十方の諸佛を請じ奉り給ひけんもかくやとぞおぼえける。障子には諸經の要文ども、色紙にかいて所々におされたり。其中に大江定基法師が、清涼山にして詠じたりけん、「笙歌遙に聞ゆ、孤雲の上、聖衆來迎す、落日の前」ども書れたり。少し引のけて、女院の御製とおぼしくて、



讀一卷・般舟讚一卷。合計五部九卷、九帖御疏ともいふ。  
 ○淨名居士の方丈の居室一丈四方なるよりかくいふ。  
 ○大江定基―法名を寂昭といふ。長保六年渡唐。彼國にて入寂。

思ひきや深山の奥にすまひして雲井の月をよそに見んとは  
 さて側を御覽ずれば御寢所とおぼしくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の御衾など懸られたり。さしも本朝漢土の妙なる類ひ數を盡して綾羅錦繡のよそほひも、さながら夢に成にけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も各見參らせし事なれば、今の様に覺えて、皆袖をぞしぼられける。

さる程に上の山より、濃墨染の衣著たる尼二人、岩のかけちを傳ひつゝ、おり煩ひ給ひけり。法皇是を御覽じて「あれは何者ぞ」と御尋あれば、老尼涙を押へて申けるは、「花がたみ眩にかけ、岩躑躅取具して持せ給ひたるは、女院にて渡らせ給ひ候也。爪木に蕨折具して候ふは、鳥飼中納言維實の娘、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳人、大納言の佐」と申もあへず泣けり。法皇も世に哀氣に思食して御涙せきあへさせ給はず。女院は「さこそ世を捨つる御身といひながら今かゝる御有様を見え參せんずらん慚しさを、消も失ばや」と思しめせどもかひどなき。宵々毎の關伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起の袖の上、山路の露も滋して、絞りやかねさせ給ひけん、山へも歸らせ給はず、御庵室へも入せ給はず、御涙に咽ばせ給ひ、

あきれて立せましゝたるところに、内侍の尼參りつゝ、花がたみをば給はりけり。

○悲想之八萬劫―悲は非の誤。非相天に於ける壽命は八萬劫といへどもなほ必滅の憂をまぬかれ難いといふ。  
 ○善見城之勝妙の樂云々―善見城は帝釋天の居城。善見城之勝妙之樂、中間禪高臺閣、亦是夢中果報幻間之快樂也。(六道講式)

〔六道の沙汰〕「世を厭ふ習ひ、何かは苦しう候ふべき。疾々御對面候うて還御なし參らせ給へ」と申ければ、女院御庵室に入らせ給ふ。「一念の意の前には、攝取の光明を期し、十念の柴の扇には、聖衆の來迎をこそ待つるに、思の外に御幸なりける不思議さよ」とて、御見參有けり。法皇此御有様を見參らせ給て、「悲想之八萬劫、猶必滅の愁に逢ひ、欲界の六天、未だ五衰の悲をまぬかれず。善見城の勝妙の樂、中間禪の高臺の閣、又夢の裏の果報幻の間の樂、既に流轉無窮也。車輪の廻るが如し。天人の五衰の悲みは人間にも候ひける物かな」とぞ仰ける。「さるにても、誰か事問ひ參せ候。何事に附ても、さこそ古思しめし出候らめ」と仰ければ、「何方よりも音信る事も候はず。隆房、信隆の北の方より、絶々申送る事こそさぶらへ。その昔、あの人どものはぐくみにて有るべしとは、露も思ひ寄候はず」とて、御涙を流させ給へば、附參せたる女房たちも、袖をぞぬらされける。女院御涙を押へて申させ給ひけるは、「かゝる身になる事は、一旦の歎き申すに及び候はねども、後生善



○五障三從—女人は一に梵天となる事を得ず、二に帝釋となることを得ず、三に魔王となることを得ず、四に轉輪王となることを得ず、五に佛身となることを得ず、是を五礙又五障といひ、婦人有三從之義、無專用之道。故未レ嫁從レ父、既嫁從レ夫、夫死從レ子。(儀禮喪服篇)を三從といふ。

○六根—眼・耳・鼻・舌・身・意。

○九品の淨利—九品淨土といふに同じ。極樂を上品・中品・下品の三階に分ち、更に各階を上生・中生・下生に分つ。

○六欲四禪—六欲は欲界の六天、四禪は欲界の諸惡を棄て、禪定に住む色界の十八天で、禪定に四種あるが故に名づく。

提の爲には、悦とおぼえさぶらふ也。忽に釋迦の遺弟に列なり、忝なく彌陀の本願に乗じて、五障三從の苦みを遁れ、三時に六根をきよめ、一筋に九品の淨利を願ふ。専ら一門の菩提を祈り、常は三尊の來迎を期す。何の世にも忘がたきは先帝の御面影、忘れんとすれどもわすられず、しのばんとすれどもしのばれず。唯恩愛の道程、悲かりける事はなし。されば彼菩提の爲に、朝夕の勤め怠る事候はず。是も然へき善知識とこそ覺え候へ」と申させ給ひければ、法皇仰せなりけるは、「此國は粟散邊土なりといへども、忝くも十善の餘薰に答へて萬乘の主となり、隨分一として心かなはずといふ事なし。就中佛法流布の世に生て、佛道修行の志あれば、後生善處疑あるべからず。人間のあだなる習は、今更驚くべきにはあらねども、御有様見奉るに、餘に爲方なうこそ候へ」と仰ければ、女院重て申させ給ひけるは、「我平相國の娘として、天子の國母となりしかば、一天四海皆掌のまゝなりき。拜禮の春の始より、色々の衣がへ、佛名の年の暮、攝録以下の大臣公卿にもてなされし有様、六欲四禪の雲の上にて、八萬の諸天に圍繞せられ候ふらむ様に、百官悉く仰ぬ者や候ひし。清涼紫宸の床の上、玉の簾の中にて持成され、春は南殿の櫻に心をとめて日

を暮し、九夏三伏のあつき日は、泉をむすびて心を慰み、秋は雲の上の月を獨見ん事許されず、玄冬素雪の寒き夜は、つまを重ねて暖にす。長生不老の術を願ひ、蓬萊不死の藥を尋ねても、唯久しからん事をのみ思へり。明ても暮れても、樂しみ榮えし事、天上の果報も、是には過じとこそ覺え候しか。それに壽永の秋の初、木曾義仲とかやに恐れて、一門の人々住馴し都をば雲井の餘所に顧みて、故郷を燒野の原と打詠め、古は名のみ聞し須磨より明石の浦傳ひ、さすが哀れに覺えて、晝は漫漫たる浪路を分て袖をぬらし、夜は洲崎の千鳥と共に泣明し、浦々島々由ある所を見しかども、故郷のことはわすられず。かくて寄る方無しは、五衰必滅の悲とこそおぼえ候しか。人間の事は、愛別離苦、怨憎會苦、共に、吾身に知られて候ふ。

四苦八苦一として残る所候はず。さても筑前國太宰府と云處にて、維義とかやに九國の内をも追出され、山野廣といへども立寄休むべき處なし。同じ秋の末にもなりしかば、昔は九重の雲の上にて見し月を、今は八重の鹽路に詠めつゝ、明し暮し候ひし程に、神無月の比ほひ、清經の中將が、都のうちをば、源氏が爲に責落され、鎮西をば維義が爲に追出さる。網にかゝれる魚の如く、何くへ行かば、遁るべきか



は。存へ果へき身にもあらずとて、海に沈み候ひしぞ心憂き事の始めにて候ひし。波の上にて日を暮し、船の中にて夜を明し、御つぎ物もなかりしかば、供御を具ふる人もなし。適供御は備へんとすれども水なければ參らず。大海に浮ぶといへども、潮なれば吞事もなし。是又餓鬼道の苦ところおぼえ候ひしか。かくて室山水島の所の戦ひに勝しかば、人々、少色なほて見え候ひし程に一の谷といふ處にて一門多く滅びし後は、直衣束帯を引替て、鐵をのべて身に纏ひ、明ても暮ても、軍よばひの聲斷ざりし事修羅の鬪諍、帝釋の争ひも、かくやとこそおぼえ候ひしか。一の谷を攻落されて後、親は子におくれ、妻は夫に別れ、沖に釣する船をば、敵の船かと肝を消し、遠き松に、群居鷺をば、源氏の旗かと心を盡す。さても門司赤間の關にて軍は今日を限と見えしかば、二位の尼申おく事候ひき。『男の生残らん事は、千萬が一も有難し。縦又遠きゆかりは、自生残たりといふとも吾等が後生を弔はん事も有りがたし。昔より女は殺さぬ習ひなれば如何にもしてながらへて主上の後生をも弔ひまゐらせ、吾等が後生をも助け給へ』と搔口説き申候ひしが、夢の心地しておぼえ候ひし程に風俄に吹き、浮雲厚くたなびいて、兵心を惑し、天運盡て、人の力に

○修羅の鬪諍云々  
 言修羅者、常  
 含嗔志、鎮懷怨  
 毒、與天帝一諍  
 權、屢侵喜見城。  
 或時據須彌山、或  
 時把日月輪、然  
 爲天帝軍被摧  
 破、時怖畏萬端。  
 (六道講式)

及びがたし。既に今はかうと見えしかば、二位の尼先帝を抱き奉て船端へ出し時、あきれたる御様にて、『尼ぜ我をばいづちへ具して行んとするぞ』と仰さぶらひしに、幼き君に向ひ奉り、涙を押へて申さぶらひしは、『君は未だ知し召され候はずや。先世の十善戒行の御力に依て、今萬乗の主とは生れさせ給へども、惡縁に引かれて御運既に盡給ひぬ。先づ東に向はせ給て、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、其後西方淨土の來迎に預らんと思食し、西に向はせ給ひて御念佛候ふべし。此國は粟散邊土とて心憂き堺にてさふらへば、極樂淨土とてめでたき所へ具し參せ候ふぞ』と、泣泣申候ひしかば、山鳩色の御衣に鬘結せ給ひて、御涙に溺れ、小う美しい御手を合せ、先づ東を伏拜み、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、其後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位尼やがて抱き奉て海に沈みし御面影目もくれ、心も消果てて、忘んとすれ共忘れず、忍ばんとすれ共忍ばれず。残留まる人々のをめき叫びし聲、叫喚大叫喚のほのほの底の罪人も、是には過じとこそ覺候ひしか。さて武士共にとらはれて上り候ひし時に、播磨の國明石の浦について、ちと打目睡て候ひし夢に、昔の内裏には遙に勝りたる所に、先帝を始奉て一門の公卿殿上人、皆ゆゝ



しげなる禮儀にて候ひしを、都を出て後、かゝる所は未だ見ざりつるに、「是はいづくぞ」と問ひ候ひしかば、二位の尼と覺えて、「龍宮城」と答へ候ひし時、「目出度かりける所かな。是には苦は無きか」と問候ひしかば、「龍蓄經の中に見えて候ふ、能後世を弔ひ給へ」と申すと覺えて夢覺ぬ。其後はいよく經を讀念佛して、かの御菩提を弔奉る。是皆六道にたがはじとこそ覺え候へ」と申させ給へば、法皇仰なりけるは、「異國の玄奘三藏は、悟りの前に六道を見、吾朝の日藏上人は、藏王權現の御力にて、六道を見たりとこそ承はれ。是程まのあたりに御覽せられける御事誠に有難うこそ候へ」とて御涙に咽ばせ給へば、供奉の公卿殿上人も皆袖をぞ絞られける。女院も御涙を流させ給へば、つき參せたる女房達も又袖をぞぬらされける。

○玄奘三藏—玄奘は唐の名僧にて印度に行き佛典を究む。三藏は經律論の三藏に通達せるもの、稱。○日藏上人—三善清行の弟、道賢といふ。室生の龍門寺に居る、寛和元年寂。

〔女院御往生〕 さる程に寂光院の鐘の聲、今日も暮ぬと打しられ、夕陽西に傾けば、御名殘惜うはおぼしけれども、御涙を押へて還御ならせ給ひけり。女院は今更古を思食し出させ給ひて、忍あへぬ御涙に、袖の柵塞あへさせ給はず。遙に御覽じ送らせ給ひて、還御もやうく延させ給ひければ、御本尊に向ひ奉り、「先帝聖靈、

一門亡魂、成等正覺、頓證菩提」と泣々祈らせ給ひけり。昔は東に向はせ給ひて、「伊勢大神宮、正八幡大菩薩、天子寶算、千秋萬歳」と申させ給ひしに、今は引かへて、西に向ひ手を合せ、「過去聖靈、一佛淨土へ」と祈らせ給ふこそ悲しけれ。御寢所の障子にかうぞ遊されける、

このごろはいつ習ひてかわが心大宮人の戀しかるらん  
いにしへも夢になりにし事なれば柴の編戸もひさしからじな

御幸の御供に候はれける徳大寺左大臣實定公、御庵室の柱に書附られけるとかや。

いにしへは月にたとへし君なれど其の光なき深山邊の里  
こし方行末の事共覺しめし續けて、御涙に咽ばせ給ふ折しも、山郭公音信ければ、女院いざさらば涙くらべん郭公我も憂世にねをのみぞ泣く

抑壇の浦にて生ながら捕られし人々は、大路を渡して首をはねられ、妻子に離れて遠流せらる。池の大納言の外は一人も命を生けられず、都に置かれず。されども四十餘人の女房達の御事は、沙汰にも及ばざりしかば、親類に従ひ縁に就いてぞおはしける。上は玉の簾の中までも、風靜なる家もなく、下は柴の扇のもとまでも塵收れ



る宿もなし。枕を雙べし妹背も、雲井の餘所にぞ成果る。養ひ立し親子も、行方知らず別れけり。忍ぶ思ひは盡せねども、嘆ながらもさてこそ過されけれ。是は只入道相國、一天四海を掌に握て上は一人をも恐れず、下は萬民をも顧みず、死罪流刑、思ふ様に行ひ、世をも人をも憚られざりしが致す所なり。父祖の罪業は子孫に報ふと云ふ事疑なしとぞ見えたりける。

○龍女―婆娑羅龍王の女。八歳にして法華經を行じ正覺に徹せりと傳へられる。  
○韋提希夫人―摩訶陀國頻婆娑羅王の后、阿闍王の母である。太子のために幽閉せられ、釋尊の説法によつて正覺を得たといはる。

かくて年月を過させ給ふ程に、女院御心地例ならず渡らせ給ひしかば、中尊の御手の五色の絲を引へつゝ、「南無西方極樂世界教主彌陀如來、必ず引攝し給へ」とて御念佛有しかば、大納言の佐の局阿波の内侍左右に候て、今を限りの悲しさに聲も惜まらず泣き叫ぶ。御念佛の聲やう／＼よわらせましましければ、西に紫雲飄舞き、異香室にみち、音楽空に聞ゆ。限ある御事なれば、建久二年ささらぎの中旬に一期遂に終らせ給ひぬ。ささいの宮の御位より片時も離れまゐらせずして候はれ給しかば、御臨終の御時、別路に迷ひしも遣方なくぞおぼえける。此女房達は昔の草のゆかりも枯果て、よる方もなき身なれども、折々の御佛事營み給ふぞ哀なる。終に彼人々は、龍女が正覺の跡をおひ、韋提希夫人の如に、皆往生の素懷を遂けるとぞ聞えし。

謠曲・狂言

高砂

人物

ワキ、阿蘇神主友成、ワキヅレ、同従者二人

前シテ、尉(住吉松の精) 前ツレ、姥(高砂松の精)

狂言、高砂の浦人、後シテ、住吉明神

所

前段、播磨國高砂、後段、攝津國住吉

時

春(正月)

○阿蘇の宮―官幣中社阿蘇神社。肥後國阿蘇郡宮地町。  
○高砂の浦―播磨國加古郡、今の高砂町。  
○旅衣未はる―旅人の衣の關のほる／＼と都へだて、幾日來ぬらん。(衣笠内大臣家長―續拾遺集)

「ワキ」ワキヅレ次第「今を始めの旅衣、今を始めの旅衣日も行く末ぞ久しき」ワキ「抑もこれは九州肥後の國、阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり。われ未だ都を見ず候程に、この度思ひ立ち都に上り候。又よきついでなれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候」ワキヅレ「道行旅衣、未はるばるの都路を、未はるばるの都路を、今日思ひ立つ浦の波、船路のどけき春風の幾日來ぬらん跡末も、いさ白雲の遙々と、さしも思ひし播磨瀉、高砂の浦に着きにけり高砂の浦に着きにけり」



○尾上の鐘―「高砂の尾上の鐘の音すなり眺かけて霜や置くらん。」(大江匡房―千載集)  
 ○誰をか知る人―「誰をか知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに。」(藤原興風―古今集)

○落葉衣―「秋の夜の月の影こそ木の間にうつりけれ。」(撰集)  
 ○生の松―筑前國早良郡生の松原。神功皇后三韓征伐の時、松の枝を逆地にさし、戦勝つて歸らばこの松生きよと仰せられた。果してこの松が生ひ出たのでこの名があると傳ふ。

○古今の序に―「松蟲のねに友をしのび、高砂・住の江の松もあひおひのやうにおぼえ、をとこ山のむかしを思ひ出で……とある。」  
 ○津の國の住吉―攝津國東成郡住吉神社。

○松とは盡きぬ―「松の葉の散り失せずして、まさきのかづらながくつたはり……」(古今集の序)  
 ○西の海の一―「西の海やあをきが原

ワキ「急ぎ候程に、播州高砂の浦に着きて候。暫くこの所に相待ち、所の様をも尋ねばやと存じ候 ッレシテ」尤も然るべう候

「二」ッレ一聲 高砂の、松の春風吹きくれて、尾上の鐘も、響くなり ッレ二句 波は霞の磯がくれ ッレ音こそ潮の、満干なれ シテサシ 誰をか知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで ッレ「過ぎ來し世々は白雪の、積り積りて老の鶴の、時に残る有明の、春の霜夜の起居にも松風をのみ聞き馴れて、心を友と、菅筵の、思ひを述ぶるばかりなり ッレ下歌」おとづれば松にこと問ふ浦風の、落葉衣の袖添へて、木蔭の塵を搔かうよ木蔭の塵を搔かうよ 上歌 所は高砂の、所は高砂の、尾上の松も年ふりて、老の波も寄りくるや、木の下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて、猶いつまでか生の松、それも久しき、名所かなそれも久しき名所かな

「三」ワキ 里人を相待つ處に、老人夫婦來れり、いかにこれなる老人に尋ねべき事の候シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ ワキ 高砂の松とはいづれの木を申し候ぞシテ」唯今木蔭を清め候こそ高砂の松にて候へ ワキ 高砂住の江の松に相生の名あり、當所と住吉とは國を隔てたるに、何とて相生の松とは申し候ぞ シテ 仰せの如く古

今の序に、高砂住の江の松も、相生のやうに覺えとありさりながら、この尉は津の國住吉の者、これなる姥こそ當所の人なれ、知る事あらば申さ給へ ワキ 不思議や見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國を隔てて住むと、いふは如何なる事やらん ッレ「うたての仰せ候や、山川萬里を隔つれども、互に通ふ心遣ひの、妹脊の道は遠からず シテ」まづ案じても御覽ぜよ ッレ 高砂住の江の、松は非情のものだにも、相生の名はあるぞかし、ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともに、この年まで、相生の夫婦となるものをワキ 謂れを聞けば面白や、さてさて先に聞えつる、相生の松の物語を、所にいひ置く謂れはなきか シテ 昔の人の申ししは、これはめでたき世の例なり ッレ 高砂といふは上代の、萬葉集の古の義 シテ 住吉と申すは、今この御代に住み給ふ延喜の御事 ッレ 松とは盡きぬ言の葉の シテ 榮えは古今相同じと ッレ 御代を崇むる喻へなり ワキ よくよく聞けばありがたや、今こそ不審春の日の シテ 光やはらぐ西の海の一 ワキ かしこは住の江 シテ ここは高砂 ワキ 松も色添ひシテ 春もワキのどかに 地上歌 四海波靜かにて、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや、逢ひ



の沙ぢよりあらはれ出でし住吉の神。(卜部兼直續古今集)

○四海波靜かにて「四つ」の海波靜かなる御代なればはらかのにももけふ供ふなり。(衣笠内大臣一夫木抄)

○枝を鳴らさぬ「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴枝、雨不破塊。」(王充の論衡)

○花實の時を「中頃古今の時、花實共に備はりて、其様まぢまぢに分れたり。(無名抄)

○南枝花始めて「誰言春色從東到、露暖南枝花始開。」(菅三品一和漢朗詠集)

○一千年の色雪「一千年の色雪、十八公榮霜後露、一千年色雪中深。」(源順一和漢朗詠集)

○松花の色十廻り「椿葉之影再改、尊猶南面、松花之色十廻、豈唯天意乎。」(大江朝綱一本朝文粹)。「松の花十かへり咲ける君が代に何をあらそふ鶴がよはひぞ。」(藤原基俊一新後撰集)

○長能一藤原長能。平安中期の歌人。

○十八公の粧ひ「十八公は松の折字。」松字十八公也。(吳錄)

○始皇の御爵一秦の始皇、風雨に遭ひ、松樹の下に憩ひ、松に五大夫の爵を與ふ。(史記秦始皇本紀)

○眞拆のかづら長き「青柳の絲絶えず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久

に相生の、松こそめでたかりけれ、げにや仰ぎても、ことも愚かやかかる世に、住める民とて豊かなる、君の恵みぞ、ありがたき君の恵ぞありがたき

〔四〕「ワキ」なほなほ高砂の松のめでたき謂れ委しく御物語り候へ 地クリ「それ草木心なしとは申せども花實の時をたがへず、陽春の徳を具へて南枝花始めて開く シテサシ」然れどもこの松は、その氣色長へにして花葉時を分かず 地「四つ」の時至りても、一千年の色雪のうちに深く、又は松花の色十廻りともいへり シテ「かかるたよりを松が枝の 地」言の葉草の露の玉、心を磨く種となりて シテ「生きとし生ける、ものごと」に 地「敷島の陰に、よるとかや (居クセ) 地クセ」然るに、長能が言葉にも、有情非情のその聲みな歌に漏るる事なし、草木土沙・風聲水音まで萬物のこもる心あり、春の林の、東風に動き秋の蟲の、北露に鳴くも皆、和歌の姿ならずや。中にもこの松は、萬木に勝れて、十八公の粧ひ、千秋の縁をなして、古今の色を見ず。始皇の御爵に、あづかる程の木なりとて異國にも、本朝にも萬民これを賞翫す シテ「高砂の、尾上の鐘の音すなり 地」曉かけて、霜は置けども松が枝の、葉色は同じ深緑立ち寄る蔭の朝夕に、搔けども落葉の盡させぬは、まことなり松の葉の散り失せずし

て色はなほ眞拆のかづら長き世の、たとへなりける常磐木の中にも名は高砂の、末代のためしにも相生の松ぞめでたき

〔五〕地「ロンギ」げに名を得たる松が枝の、げに名を得たる松が枝の、老木の昔あらはして、その名を名乗り給へや ツレ「今は何をかつつむべき、これは高砂住の江の、相生の松の精、夫婦と現じ來りたり 地」不思議やさては名所の、松の奇特を現して ツレ「草木心なけれども 地」かしこき代とて ツレ「土も木も 地」わが大君の國なれば、いつまでも君が代に、住吉にまづ行きてあれにて待ち申さんと、夕波の汀なる海士の小舟にうち乗りて、追風にまかせつつ沖の方にいでにけりや、沖の方にいでにけり

〔六〕「ワキツレ」上歌(待詠)「高砂や、この浦舟に帆をあげて、この浦舟に帆をあげて、月もろともに出汐の、波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎてはや住の江に、着きにけりはや住の江に着きにけり

〔七〕後ジテ「われ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松幾代經ぬらん、睦しと君は知らずや瑞籬の、久しき代々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すずしめ給へ、宮



しく止まれらば―  
〔古今集の序〕  
○土も木もわが大  
君―「草も木も我  
が大君の國なれば  
いづくか鬼の住家  
なるべき。」(紀朝  
雄―太平記)

○鳴尾―攝津國武  
庫郡武庫川の川  
口。

○われ見ても―  
昔、帝住吉に行幸  
し給ひけり。我見  
ても久しくなりぬ  
住吉の岸の姫松幾  
代へぬらむ。御神  
現形したまひて、  
むつまじと君は知  
らずや瑞籬の久し  
き世よりいはひそ  
めてき。」(伊勢物  
語)

○淺香潟―攝津國  
住吉の海邊であつ

つこ達 地「西の海、あをさが原の、波間よりシテ」現れ出でし、神松の、春なれや、  
残んの雪の淺香潟 地「玉藻刈るなる岸陰のシテ」松根に倚つて腰を磨れば 地「千年の  
緑、手に満てりシテ」梅花を折つて頭に挿せば 地「二月の雪衣に落つ  
〔神舞〕〔八〕地「ロンギ」ありがたの影向や、ありがたの影向や、月住吉の神遊び、御影  
を拜むあらたさよシテ」げに様々の舞姫の、聲も澄むなり住の江の、松影も映るな  
る、青海波とはこれやらん 地「神と君との道すぐに、都の春に行くべくはシテ」そ  
れぞ還城樂の舞 地「さて萬歳のシテ」小忌衣 地「さす腕には、惡魔を拂ひ、をさむ  
る手には、壽福を抱き、千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ、相生の松風颯々  
の聲ぞ樂しむ颯々の聲ぞ樂しむ

たが、今は和泉國  
泉北郡五箇莊村と  
いはれてゐる。  
○玉藻刈るなる―

「夕されば汐みち  
くなる住吉の淺香  
の浦に玉藻刈りて  
な。」(萬葉集)

○松根に倚つて云  
云―「倚松根二而  
摩腰、千年之翠滿  
レ手、折梅花一而挿

レ頭、二月之雪落  
レ衣。(橋在列一和  
漢朗詠集)

### 隅田川

人物

ワキ、隅田川渡守。ワキツレ、都の者(旅人)

シテ、梅若丸の母(狂女)。子方、梅若丸の亡靈

所

武藏國隅田川岸

時

三月十五日

○この在所―後の  
向島木母寺の梅若  
塚。

○雲霞あと遠山に  
―山遠雲埋。行客  
跡、松寒風破。旅人  
夢。―(紀齊名―和  
漢朗詠集)

〔一〕ワキ「これは武藏の國隅田川の渡守にて候、今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと  
存じ候。又この在所にさる子細あつて、大念佛を申す事の候間、僧俗を嫌はず、人  
數を集め候、その由皆々心得候へ

〔二〕ワキツレ次第、末も東の旅衣、末も東の旅衣日も遙々の心かなワキツレ「かやうに  
候者は、都の者にて候、われ東に知る人の候程に、かの者を尋ねて唯今罷り下り候  
ワキツレ道行、雲霞、あと遠山に越えなして、あと遠山に越えなして、幾關々の道すが  
ら、國々過ぎて行く程に、ここぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く着きにけり渡りに早  
く着きにけりワキツレ「急ぎ候程に、これははや隅田川の渡りに候、又あれを見れ  
ば舟が出で候、急ぎ乗らばやと存じ候ワキツレ「いかに船頭殿舟に乗らうするにて候



ワキ「なかなかの事召され候へ、まづまづ御出で候後の、けしからず物騒に候は何事にて候ぞ、ワキツレ」さん候都より女物狂の下り候が、是非もなく面白う狂ひ候を見候よ、ワキ「さやうに候はば、暫く舟を留めて、かの物狂を待たうするにて候

○人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな。(藤原兼輔後撰集)  
○白雪の道行き人「春來れば雁歸るなり白雲の道行ぶりにことやつてまし。」(凡河内躬恒古今集)  
○聞くや如何に「聞くやいかに上の空なる風だにも松に音する習ひありとは。」(宮内卿新古今集)  
○眞葛が原の露「わが戀は松を時雨の染めかねて眞葛が原に風騒ぐなり。」(慈鎮新古今集)

〔三〕シテサシ「げにや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人の言傳てて、行方を何と尋ねらん。聞くや如何に、上の空なる風だにも、地、松に音する、習ひあり。」(カケリ)シテ「眞葛が原の露の世に、地、身を恨みてや、明け暮れんシテ」これは都北白河に、年経て住める女なるが、思はざる外に一人子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと聞くより心亂れつつ、そなたとばかり、思ひ子の、跡を尋ねて、迷ふなり。地下歌「千里を行くも親心子を忘れぬと聞くものを、上歌もとりも、契り假なる一つ世の、その中をだに添ひもせで、ここやかしこに親と子の四鳥の別れこれなれや、尋ねる心のはてやらん、武藏の國と、下總の中にある隅田川にも、着きにけり隅田川にも着きにけり

〔四〕シテ「なうなうわれをも舟に乗せて給はり候へ、ワキ「おことはいづくよりいづ方

○北白川—京都南禪寺の北から西流する白河の北部をいふ。  
○逢坂の關—近江國滋賀郡逢坂山にあつた關所。  
○千里行くも「親千里行不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>子。」(白氏文集)  
○契り假なる一つ世「頼むらむ知るべもいさや一つ世の別れにだにもまどふ心は。」(西行)  
○四鳥の別れ—昔桓山の鳥、四羽の子鳥が成長して四海に分れ飛び行く時、母鳥が悲鳴して之を送つたといふ。(孔子家語顔回篇)  
○尋ねる心の果て「武藏野や行けども秋のはてぞなき如何なる風の末に吹くらむ。」(源通具—新古今集)

へ下る人ぞシテ「これは都より人を尋ねて下る者にて候、ワキ「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ、狂はずはこの舟には乗せまじいぞとよシテ」うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ。かたの如くも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも覺えぬ事な宣ひそよ、ワキ「げにげに都の人とて名にし負ひたるやさしさよシテ」なうその言葉はこなたも耳にとまるものを、かの業平もこの渡りにて、「名にし負はば、いざ言問はん都鳥、わが思ふ人は、ありやなしやと、なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり、あれをば何と申し候ぞ、ワキ「あれこそ沖の鷗候よシテ」うたてやな浦にては千鳥ともいへ鷗ともいへ、などこの隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ、ワキ「げにげに誤り申したり、名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さでシテ」沖の鷗と夕波の、ワキ「昔にかへる業平もシテ」ありやなしやと言問ひしも、ワキ「都の人を思ひ妻シテ」わらはも東に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の、ワキ「妻をしのびシテ」子を尋ねるも、ワキ「思ひは同じシテ」戀路なれば、地上歌「われも又、いざ言問はん都鳥、いざ言問はん都鳥、わが思ひ子は東路に、ありやなしやと、問へども問へども答へ



○舟競ふ堀江の川  
「舟競ふ堀江の川  
の水際に來居つゝ  
鳴くは都鳥かも」  
(大伴家持―萬葉  
集)

ぬはうたて都鳥、鄙ひなの鳥とやいひてまし。げにや舟競ふなぎほふ堀江ほりえの川の水際に、來居きこつ  
鳴くは都鳥、それは難波江これは又隅田川の東あづままで、思へば限りなく、遠くも來  
ぬるものかな、さりとは渡守舟、こぞりて狭くとも、乗せさせ給へ渡守さりとは  
は乗せてたび給へ

〔五〕「ワキ」かかるやさしき狂女こそ候はね、急いで舟に乗り候へ「ワキ」この渡りは大  
事の渡りにて候。かまひて静かに召され候へ「ワキツレ」なうあの向ひの柳の下に、人  
の多く集まりて候は何事にて候ぞ「ワキ」さん候あれは大念佛にて候、それにつきてあ  
はれる物語の候。この舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申さうするにて候  
「ワキ(語)」さて去年三月十五日、しかも今日に相當り候。人商人の都より、年の程十  
二三ばかりなる幼き者を買ひ取つて奥へ下り候が、この幼き者、未だ習はぬ旅の疲  
れにや、以ての外に違例ちがひし、今は一足も引かれずとて、この川岸にひれふし候を、  
なんぼう世には情なき者の候ぞ、この幼き者をばそのまま路次みちぎに捨てて、商人は奥  
へ下つて候。さる間この邊の人々、この幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程  
に、様々に痛はりて候へども、前世の事にもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既

○吉田の何某―吉  
田少將惟房(木母  
寺縁起)

に末期まつごと見えし時、おことはいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候  
へば、われは都北白河に、吉田の何某と申しし人の唯ひとり子にて候が、父には後  
れ母ばかりに添ひまゐらせ候ひしを、人商人にかどかはされて、かやうになり行き  
候、都の人の足手影もなつかしう候へば、この道のほとりにつきこめて、しるしに  
柳を植ゑて給はれとおとなしやかに申し、念佛四五返唱まがへ終つひに事終つて候。なんぼ  
うあはれるなる物語にて候ぞ、見申せば船中にも少々都の人も御座ありげに候、逆縁  
ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。由なき長物語に舟が着いて候、とうとう御  
あがり候へ「ワキツレ」いかさま今日はこの所に逗留とまり仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申  
さうするにて候

〔六〕「ワキ」いかにこれなる狂女、何とて舟よりは下りぬぞ急いであがり候へ、あらや  
さしや、今の物語を聞き候ひて落涙し候よ、なう急いで舟よりあがり候へ「シテ」な  
う舟人、今の物語はいつの事にて候ぞ「ワキ」去年三月今日の事にて候「シテ」さてその  
稚兒ちごの年は「ワキ」十二歳「シテ」主なの名は「ワキ」梅若丸「シテ」父の名字は「ワキ」吉田の何  
某「シテ」さてその後は親とても尋ねず「ワキ」親類とても尋ね來ず「シテ」まして母とて



も尋ねぬよなう、ワキ「思ひもよらぬ事シテ」なう親類とても親とても、尋ねぬこそ理  
なれ、その幼き者こそ、この物狂が尋ねる子にてさむらへとよ、なうこれは夢かや  
あらあさましや候、ワキ「言語道断ごんご だうだんの事にて候ものかな、今まではよその事とこそ存  
じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞやあら痛はしや候。かの人の墓所むしよを見せ  
申し候べし、此方おんにへ御出で候へ

〔七〕シテ「今まではさりととも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今はこ  
の世になき跡の、しるしばかりを見る事よ。さても無慙むざんや死の縁とて、生所しやうじよを去つ  
て東のはての、道の邊はざりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそある  
らめや、地ちさりとては人々この土を、返して今一度、この世の姿を母に見せさせ給  
へや地上歌ちのうた残りても、かひあるべきは空しくて、かひあるべきは空しくて、あるは  
かひなき帚木はきぎの、見えつ隠れつ面影の、定めなき世の習ひ、人間憂ひの花盛り、無  
常の嵐音あらしね添ひ、生死長夜しやうじやうやの、月の影不定ふせやうの、雲覆へりげに目の前の、浮世かなげに  
目の前の浮世かな

〔八〕ワキ「今は何と御歎き候ひてもかひなき事、ただ念佛を御申し候ひて、後世を御

○道の邊の土  
「古墳何代人、不  
知三姓與名、化  
作三路傍土、年々春  
草生。」(白氏文集)

○帚木の見えつ  
「園原や伏屋に生  
ふる帚木のありと  
は見えて逢はぬ君  
かな。」(坂上是則  
新古今集)  
○生死長夜の  
「未得眞覺、常  
處夢中、故佛説

爲「生死長夜。」(唯  
識論)

○西方極樂世界  
「從是西方、過十  
萬億佛土、有三世  
界、名曰「極樂。」  
(阿彌陀經)  
○三十六萬億云々  
「釋迦佛在世時、  
有翁婆二人、用  
數一斗、記數、念  
阿彌陀佛、願生  
西方、佛云、我別  
有方法、令汝念  
佛一聲得三多般之  
數、乃教以念南謨  
西方極樂世界三十  
六萬億一十一萬九  
千五百同名同號阿  
彌陀佛。」(經文龍  
舒淨土文卷四)

弔ひ候へ。『既に月出で川風も、はや更け過ぐる夜念佛の、時節なればと面々に、鉦  
鼓を鳴らしすすむればシテ「母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれ  
ふして泣きぬたり、ワキ「うたてやな餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこ  
そ、亡者まうじやも喜び給ふべけれど、「鉦鼓しやうこを母に參らすればシテ「わが子の爲と聞けばげ  
に、この身も身鐘みかねを取りあげて、ワキ「歎きを止め聲澄むやシテ「月の夜念佛もろとも  
に、ワキ「心は西へと一すぢに、ワキ「南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌  
陀佛、地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛シテ「隅田河原の、  
波風も聲立て添へて、地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛シテ「名にし負は  
ば都鳥も音を添へて、子方「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛  
〔九〕シテ「なうなう今の念佛のうちに、正しくわが子の聲の聞え候、この塚の内に  
てありげに候よ、ワキ「われ等もさやうに聞きて候、所詮此方の念佛をば止め候べし。  
母御一人御申し候へシテ「今一聲こそ聞かまほしけれ南無阿彌陀佛、子方「南無阿彌陀  
佛南無阿彌陀佛と、地「聲の内より、幻まほうしに見えければシテ「あれはわが子か、子方「母に  
てましますかと、地「互に手に手を取り交はせば又、消え消えとなり行けば、いよいよ



○今一聲こそ一  
「行きやらで山路  
くらしつ時鳥今一  
聲の聞かまほしき  
に。」(藤原公忠一  
拾遺集)

よ思ひはます鏡、面影も幻も、見えつ隠れつするほどに東雲しののめの空も、ほのぼのと明  
け行けば跡絶えて、わが子と見えしは塚の上の、草茫茫として唯、しるしばかりの  
浅茅が原となるこそあはれなりけれなるこそあはれなりけれ

附子

大 名 長袴 小さ刀  
三人 太郎冠者 半袴 腰帶  
次郎冠者 同じく

大名、このあたりの大名でござる。今日はさる方へ參る。太郎冠者を呼びいだし、  
申し付ける事がある。太郎冠者あるか。太郎冠者はあ。大名、わたか。太郎、お前に。大  
名、念ねんなう早かつた。次郎冠者も呼べ。太郎、畏つてござる。次郎冠者召すわ。次郎冠者  
「心得た。お前に。大名、汝等と呼び出すは別のことでない。今日はさる方へ行く。兩  
人共に留守をせい。冠者二人、畏まつてござる。大名、それに待て。二人、はあ。大名、や  
い、このあなたに、附子がある程に、さう心得。二人、それならば、兩人共に子供致  
しませう。大名、さうではない、このあなたに、ぶすと云うて、毒がある。この方か

ら吹く風に當つてさへ滅つぎやく御する程に、さう心得。二人、畏まつてござる。太郎、やい、  
次郎冠者、今日のやうなおるすはあるまいぞ。次郎、を、そなたが供に行けば、  
身共が留守をする。身共が供に行けば、そなたが留守をする、今日のやうな云ひあ  
はせた留守はあるまいぞ。そりやあ。太郎、何事ぢや。次郎、ぶすの方から、風が来た。  
こゝにてはなせ。太郎、みどもは、あのぶすを見ようとおもふ。次郎、やくたいもない  
事を。おけ。太郎、あの方から吹く風が、あたらねば苦しうない。扇いでくれ。次郎、心  
得た。太郎、扇げ。次郎、心得た。ぬかるな。太郎、ぬかることではない。さあ、紐  
は解いたぞ。さて、蓋をあけうほどに、扇げ。次郎、心得た。太郎、さて、蓋をあけた  
ぞ。身どもはあの附子を見て來う。次郎、一段とよからう。太郎、やい。見て來た  
わ。次郎、いか様なものぢや。太郎、なんぢやは知らぬが、黒い物がどつみりとしてあ  
る。旨さうな物ぢやほどに、みどもは食うて見よう。次郎、やくたいもない事を。おけ。  
太郎、みどもは、ぶすに領じられたか、食ひたうてならぬ。行て食て來う。次郎、身共  
が居るからは、やることはならぬ。太郎、名残の袖をふりきりて、附子の側へぞあゆ  
み行く。太郎、を食ふ。む。次郎、やい太郎冠者、なんとした。太郎、砂糖ぢや。次郎、何ぢや。



砂糖ぢや。太郎「なか〜」。次郎「どれ〜」。太郎「まづ食うてみよ。次郎「心得た。む、まことに砂糖ぢや。太郎「これを食はずまいとおもうて、ぶすぢやの、毒ぢやのとおしやつた。次郎「汝ばかり食てよいものか。太郎「それならば、ちとやらう。次郎「そのやうに取らずとも、ちつと取れ。二人「さてさてうまい事かな。太郎「ほしう、よい事めさつた。頼うだお方の、ぶすぢやの、毒ぢやのとおしやつたに、皆おくやつたと、頼うだお方のお歸りなされたらば申し上ぐる。次郎「みどもが、あけと云ふたに開けた。某がまつすぐに、申し上ぐる。太郎「やい〜。これはじやれ事ぢや。この言ひわけは、あの掛物を破ればよい。次郎「心得た。さらり〜。太郎「よい事めさつた。あれは頼うだお方の、牧溪和尚の墨繪の観音で、御祕藏なされたものを、あの様にめさつた。お歸りなされたら、きつと申し上ぐる。次郎「破れと云うたによつて、やぶつた。みどもが申し上ぐる。太郎「やい〜、これもじやれ事ぢや。次郎「扱、この言ひわけどもは、何とするぞ。太郎「この大天目を破れば、いひわけが立つ。次郎「いかな〜、また迷惑をさせうて。太郎「身どもも、手をかける。そちらを持って。次郎「心得た。太郎「ぐわらり。次郎「ちん。太郎「さて、おかへりなされたらば、泣いて居よ。

次郎「泣けばよいか。大名「只今罷歸る。やい〜、もどつたぞ。二人「泣け〜。大名「心許ないが、何事ぢや。太郎「次郎冠者申し上げ。次郎「わこれ、申し上げさしませ。太郎「お留守を大事と存じて、次郎冠者と相撲をとりましてござれば、次郎冠者手どりでござり、私が小股をとつてこかしますを、こけまいと存じて、掛物に取付いたれば、あのやうになりました。大名「これはいかな事。あれは身共が祕藏の観音を、あのやうにし居つた。次郎「かへしさに、天目の上へ投げられました、あの様に微塵になりました。大名「これはいかな事。おのれをなんとしたものであらうぞ。太郎「かやうに大事の御道具を損ひまして、生きてはおかせられまいと存じて、附子を食へて死なうと存じて、下されたれども、まだ死にませぬ。大名「おのれ等、今のまに滅却せうぞ。太郎「一口食へども、まだ死なず。次郎「二口食へども、死なれもせず。太郎「三口四口。次郎「五口六くち。二人「十口あまり、皆になるまで食うたれども、死なれぬ命、めでたさよ。なんぼう。大名「やい、そこなやつ。次郎「はあ。太郎「これは何としたものであらう。大名「まだ、おのれはそれに居る。二人「ゆるさつしやれ〜。大名「やるまいぞ、やるまいぞ。



第四篇 近世 江戸時代



### 奥の細道

松尾芭蕉

○月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口  
 客―夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮世若夢、爲歎幾何。(李太白―春夜宴桃李園序) 海濱にさすらへ―芭蕉貞享五年三月、和歌の浦に、同四月、須磨明石に遊びたるをいふ。  
 ○去年の秋―元祿元年の秋。  
 ○江上の破屋―芭蕉の庵。庵址は深川區西元町にありと。  
 ○住める方―芭蕉庵。  
 ○杉風が別墅―探

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口  
 とらへて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。もゝ引の破をつどり、笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに  
 草の戸も住替る代ぞひなの家  
 面八句を庵の柱に懸置。彌生も末の七日、明ぼの、空朧々として、月は在明にて光をさまれる物から、不二の峰幽にみえて、上野谷中の花の梢又いつかはと心ぼそ

し。むつまじきかぎりは宵よりつとひて舟に乗て送る。

千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゞく  
 行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として、行道なほすゝまず。人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる迄はと見送なるべし。ことし元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひたちて、吳天に白髪を重ぬといへ共、耳にふれていまだめに見ぬさかひ、若生て歸らばと、定なき頼の末をかけ、其日漸早加と云宿にたどり著にけり。瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すがらにと出立侍を、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた雨具墨筆のたぐひ、あるはさがたき銭などしたるは、さすがに打捨がたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。(中略)

卅日日光山の麓に泊る。あるじの云けるやう、我名を佛五左衛門と云。萬正直を旨

茶庵。深川六軒堀にあつたといふ。  
 ○杉風―杉山氏。通稱鯉屋市兵衛、幕府の魚御用商、享保十七年歿、年八十六。  
 ○月は在明にて―「月は有明にて光をさまれるものから影さやかに見えてなかくをかしき暁なり。」(源氏物語)  
 ○前途三千里のおもひ―「李陵が胡道のおもひ身に知らるゝ心持す。」(東關紀行)  
 ○鳥啼―「羈鳥戀三舊林、池魚思故淵。」(陶淵明―歸田園居)  
 ○吳天に―「笠は重し吳天の雪、香は香し楚地の花。」(謡曲葛城)「去年九月到東洛、今年九月來吳鄉。兩邊



蓬髪一時白、三處菊地同色黄。(白氏文集)  
 ○早加—武藏國北足立郡草加町、千住より二里ばかり、日光街道の一宿である。  
 ○卅日—三月の三十日、江戸を發し、より四日目。

○濁世塵土—「諸佛出ニ五濁惡世。所謂劫濁・煩惱濁・衆生濁・見濁・命濁如是云々。」(法華經)  
 ○剛毅朴訥—「剛毅朴訥近仁。」(論語)

○御山—下野國都賀郡日光山。東照宮を始として、大猷院・二荒山神社等あり。  
 ○往昔、此御山を—「抑々下野國都賀郡二荒山は人皇四十八代の帝稱徳天皇の御宇神護景

とする故に、人かくは申侍まゝ、一夜の草の枕も打解て休み給へと云。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにやと、あるじのなす事に心をとめてみるに、唯無智無分別にして、正直偏固の者也。剛毅朴訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質、尤尊ぶべし。  
 卯月朔日、御山に詣拜す。往昔、此御山を二荒山と書しを、空海大師開基の時、日光と改給ふ。千歳未來をさとり給ふにや。今此御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の栖穩なり。猶憚多くて筆をさし置ぬ。  
 あらたうと青葉若葉の日の光(中略)

心許なき日かず重るまゝに、白川の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便求しも斷也。中にも此關は三關の一にして風驟の人心をととむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裝を改し事など、清輔の筆にもととめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな

會良

とかくして越行まゝに、あぶくま川を渡る。左に會津根高く、右に岩城、相馬、三春の庄、常陸下野の地をさかひて山つらなる。

かけ沼と云所を行に、今日は空曇て物影うつらず。すか川の驛に等窮といふものを尋て四五日とゞめらる。先、白河の關いかにこえつるやと問。長途のくるしみ身心つかれ、且は風景に魂うばれ、懷舊に腸を斷て、はかしくしう思ひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて三卷となしぬ。

此宿の傍に、大きな栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。椽ひろふ太山もかくやと間に覺られてものに書付侍る。其詞、

栗といふ文字は、西の木と書て、西方淨土に便ありと行基菩薩の、一生杖にも柱にも此木を用給ふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の栗(中略)

雲元年勝道上人の開創なり。(日光名所記)  
 ○心許なき日かず—「別れにし都の秋の日数さへつもれば雪の白河の關。」(大江貞重—後拾遺集)  
 ○白川の關—岩代國西白河郡古關村宇旗宿の南、南山にあつた。  
 ○いかで都へと—「たよりあらばいかで都へ告げやらむ今日白川の關は越えぬと。」(平兼盛—拾遺集)  
 ○三關—白河關・勿來關・念珠關。  
 ○秋風を—「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關。」(能因法師—後拾遺集)  
 ○紅葉を俤にして—「都にはまだ青紅葉散りしく白河の關。」(源賴政—



千載集)  
 ○清輔の筆—藤原清輔の袋草紙卷三に見ゆ。  
 ○會津根—磐梯山。  
 ○かげ沼—鏡沼ともいふ。鏡石村鏡田にある。  
 ○等窮—相良伊右衛門。石田未得に學び後燕門に入る。寶永二年十二月四日歿。  
 ○世をいとふ僧—名を可伸、號を栗齋といひ、等窮の友であつた。  
 ○椽ひろふ—山深み岩にせかるゝ水ためんかつゝ、落つる椽拾ふほど。  
 (西行—山家集)  
 ○行基—聖武天皇頃の高僧、天平二十一年寂、年八十二。  
 ○月の輪のわたし—月輪山籠、阿武

月の輪のわたしを越て、瀬の上と云宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は、左の山際一里半斗に有。飯塚の里、鯖野と聞て、尋ねく行に、丸山と云に尋あたる。是庄司が舊館也。麓に大手の跡など人の教ゆるにまかせて、涙を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれどもかひくしき名の、世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入て茶を乞へば、爰に義經の太刀、辨慶が笈をとめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日の事也。

其夜飯塚にとまる。温泉あれば湯に入て宿をかるに、土坐に蓆を敷てあやしき貧家也。灯もなければ、ゐろりの火かげに寐所をまうけて臥す。夜に入て、雷鳴雨しきりに降て、臥る上よりもり、蚤蚊にせゝられて眠らず、持病さへあこりて消入計になん。短夜の空もやうく明れば、又旅立ぬ。猶夜の餘波心すまらず。馬かりて桑

隈川の渡場。  
 ○瀬の上—福島北一里半、今の瀬の上町。  
 ○佐藤庄司—佐藤基治。繼信・忠信の父。文治五年頼朝に攻められて戦死。  
 ○飯塚の里—飯坂の誤ならんか、鯖野は佐場野で飯坂の西南、今の信夫郡平野村。  
 ○丸山—「佐藤庄司館、上飯坂村西、在天王寺中野村之間、稱大鳥城、郷人謂之丸山城。」(奥羽觀蹟聞老志)  
 ○女なれども—繼信・忠信の死後その妻二人甲冑を着し凱旋姿して老母を慰めたりとの記事見ゆ。(東遊記)  
 ○墮涙の石碑—晋の羊祜の死後百姓その徳を慕ひ、硯

折の驛に出る。遙なる行末をかゝえて、斯る病覺東なしといへど、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路にしなん是天の命なりと、氣力聊とり直し、路縱横に踏で、伊達の大木戸をこす。(中略)

名取川を渡て仙臺に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に畫工加右衛門と云ものあり。聊心ある者と聞て、知る人になる。この者、年比さだかならぬ名どころを考置侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらる。玉田、よこ野、つじが岡はあせび咲ころ也。日影ももらぬ松の林に入て、爰を木の下と云とぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひ三かさはよみたれ。藥師堂、天神の御社など拜て其日はくれぬ。猶松島鹽がまの所々畫に書て送る。且、紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其實を顯す。

あやめ艸足に結ん草鞋の緒